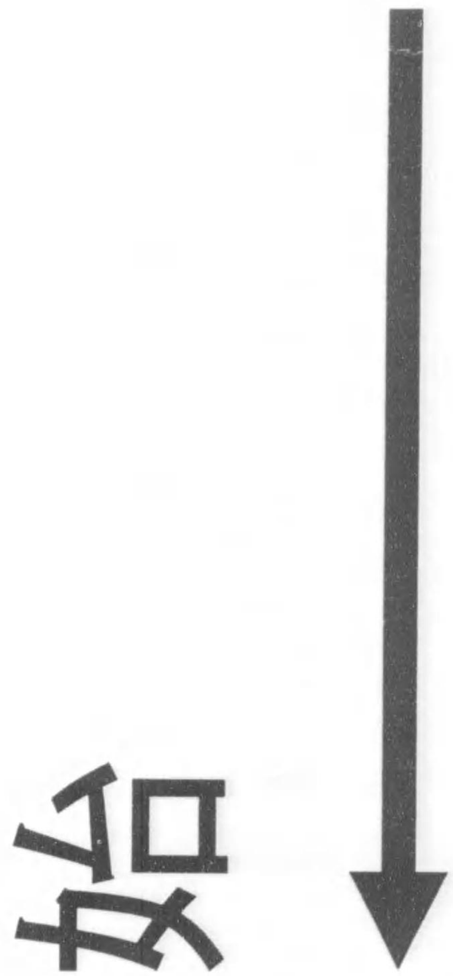


324
641

3212.16

324-641

新編

日蓮宗歷史

大正
10 5 12

日蓮宗大學宗學部教授

影山堯雄著

教令

日蓮魁したり、我黨共二陣三陣のゞきて加葉阿難にも勝れ天台傳敎にも超へよかし、僅かの小島の主等が威嚇さんを恐ては閻魔王の責をばいかんがすべき、佛の御使と名乘り乍ら臆せんは無下の人人なり。

一三八八 縮刷遺文

緒言

抑も吾宗門史は尙研究の道程に在りて、所傳の選擇、堙沒せる事蹟の探求等研鑽の餘地あるもの蓋し尠しとせず。此書既に不完全の史乘に依りて成れり、加ふるに敎務の傍ら草率の間に編みし未定稿にして固より瑕疵多きことを信ず、唯素鑛を砧上に提して鎚鍊の士を待つのみ、江湖の道彥請ふ、之が敎正に嗇なからんことを。

大正辛酉聖祖降誕第七百年二月十六日

著者識

凡例

動機 聖祖日蓮聖人を傳せるもの古來其數甚だ多し、然るに門下法孫已降の宗門狀勢を記せしもの頗る稀なり。玆に聊かその缺を補はんことを欲し、公務の餘暇史料を片簡隻墨の間に蒐め、終に此一篇をなすに至れり。

目的 日蓮聖人一代の行蹟は且らくその正傳に讓り、今は專ら門子末弟殉教護法の跡を尋ね、聖祖滅後に於ける教勢の隆替、宗門の推移に就て其梗概を窺ひ、本化の教光、宗團の勢力をして今日あらしめたる深き根源を察知すると倶に、更に進んで門下僧俗の同心協力將來倍〻法運の隆昌を圖り、依て以て人世の救濟に資せんことを期するに在り。

程度 日蓮宗大學中學部二・三學年程度の門下各教團宗立私立學校の宗門史教科書に適用し得べく編纂せしを以て、專ら字句の平易を旨とし、文飾を避けて史實の要項を會得せしめんことに務め、從來特殊の讀方をなせし名詞には一一振假名を施せり。

組織 一致・勝劣諸門流を一體系の下に叙述せん事を企てしが、各派分立の後は殆んど互に沒交渉の狀態に在りしと、勝劣側に關する史料の充分集め得られざりしとに因り、聯立的に記述するの外なかりしは甚だ遺憾とする所、尙一層史材の蒐集に努め、其完璧を

後日に期す。常に國政の變遷が吾教史に影響する所頗る大なるを以て、本書の時代區別も、滅後南北朝・室町時代・織田豐臣時代・德川前期・同後期・明治大正時代の六期三十六章に分ち、以て國史との連絡を保ち、更に項目を設けて叙説の内容を見易からしむ。又挿畫を出來得る限り多く挿入せしは、その時代、人物、事蹟、位地等を想倒するに便宜あらしめんが爲なり。

方針　古來諸門流に傳へられし史料に對し、眞僞決し難きものは之を避け、異説あるものは且らく一説に從ひ、研究の結果新たに發見せられし史實は之を斟酌し、專ら宗門大勢の移動、著名なる事件及主要人物を漏らさゞることに留意し、從て個人傳記の一宗史上直接の關係なき部分は多く之を省略せり。

本書の編纂に際し、門下各教團諸賢より懇篤なる注意、史料の貸與を受け、寫眞撮影に關して殊に多大の便益を與へられ、又掲載せし寫眞中、稲田海素師、淺井要麟師、國柱會等より貸與を受けしものあり、尚ほ本書の裝幀は渡邊光德畫伯の意匠考案に係り模樣の日廻草は日蓮宗を表示し、書題の文字は柳田泰麓先生の揮毫を乞へり、玆に記して謝意を表す。

新編日蓮宗歴史

目次

聖祖門下諸門流略系圖

第一期　聖祖御在世已降南北朝時代

第一章　聖祖御在世に於ける門下……一
第二章　老僧諸師の分張　上代の宗門制度……一三
第三章　本宗の西傳……一九
第四章　關東諸門流の狀勢……二三
第五章　京都諸門流の發展……二二
第六章　日興門流の發展　日什上人の獨立……二六

第二期　室町時代

第七章　叡山と本宗　什門の狀況……三九
第八章　六條門家の分出……四二

第九章　四條門流の消長……四四
第十章　中山・身延及隆・興兩門の狀勢……五〇
第十一章　鎧冠日親上人……五六
第十二章　一致諸門流並什門の人物……五九
第十三章　寛正盟約の前後……六八
第十四章　宗門の隆盛と天文の法亂……七五
第十五章　法亂後の宗門狀勢……八一
第十六章　永祿前後の宗門　佐渡の教勢……八七
第三期　織田・豐臣氏時代
第十七章　信長時代の宗門……九一
第十八章　秀吉の佛教擁護と本宗……九七
第十九章　受不受兩黨の諍　佐渡及九州の宗門……一〇三
第四期　德川氏時代　前期
第二十章　德川氏時代の宗門概況……一一〇
第二十一章　德川氏初期の宗門……一一七

第二十二章　檀林の組織　祖書の刊行……一二四
第二十三章　不受論者の活動と遭難……一二九
第二十四章　文書上の宗論……一三三
第二十五章　宗門の全盛期……一三五
第二十六章　第三回の受不受論……一四〇
第二十七章　元祿前後の宗門狀況……一四五
第二十八章　宗運の衰兆……一五一
第五期　德川氏時代　後期
第二十九章　日導・日康上人等の革新運動……一五七
第三十章　宗門の人才　淨土教との論戰……一六一
第三十一章　革新機運の高潮……一六六
第三十二章　文政・天保年間の宗門……一七一
第三十三章　幕末宗門の概況……一七九
第六期　明治・大正時代
第三十四章　明治新政の宗教對策と本宗各派……一八四

新編日蓮宗歷史 目次 終

第三十五章　明治十七年已後の宗政變遷……一九〇
第三十六章　寺院教育・傳道及慈善事業……二〇四
挿畫　筆蹟、肖像及其他(百三十六葉)
參照地圖(十一圖)

日昭・日朗・日興の入門

新編日蓮宗歷史

影山堯雄著

第一期　聖祖御在世已降南北朝時代

第一章　聖祖御在世に於ける門下

佐渡御流罪已前　建長五年聖祖房州清澄に立教開宗を宣し、次で鎌倉に來り給ふや天台の僧成辨先づ來り投ず、日昭上人是なり。聖祖に長ずる事一歲、常に「辨殿」と敬稱せられしと云ふ。其俗甥日朗上人翌年また聖祖に付す。聖祖駿州岩本の入藏に際し伯耆房衣を更む。日興上人是なり。文應元年松葉ケ谷艸庵燒却せらるゝや檀越下總若宮

吉隆・鏡忍房の殉教

日持・日向日頂の入門

四條頼基

日朗・日進の入牢

の邑主富木胤繼、自邸の傍に法華堂を建て聖祖に轉法輪を請ふ。曾谷教信・太田乘明・金原法橋・秋元太郎兵衞等受戒す。弘長二年叡山の學僧日澄上人は、日朗上人によりて改宗し、房州天津の邑主工藤吉隆・鏡忍房日曉上人等と共に小松原の法厄に侍して防戰大に努め、吉隆及日曉上人爲に殉教す。翌三年駿州の松野政行の子、日持上人の入門あり。文永元年聖祖房州に歸省せらるゝや、日向上人來り投じ、富木胤繼が其香花院たりし天台宗眞間弘法寺、化主了性を說破し、終に寺を領し、又其義子日頂上人を聖祖に投ぜしは同三年にありき。龍ノ口の法難に際し、四條頼基が聖祖に殉ぜんとせし事蹟は宗徒の今に傳えて龜鑑とするところ。次で佐渡に配せられ給ふに及び、日昭上人は松葉ケ谷艸庵に守文の命を蒙りて門子檀越を督し、爾來宗政の内治を扶く。日朗上人は當時十三歳の三位房日進上人と師の罪に坐して鎌倉に入牢し、日興上人は佐渡に給仕す。日朗上人後また往いて事ふ。其途次越

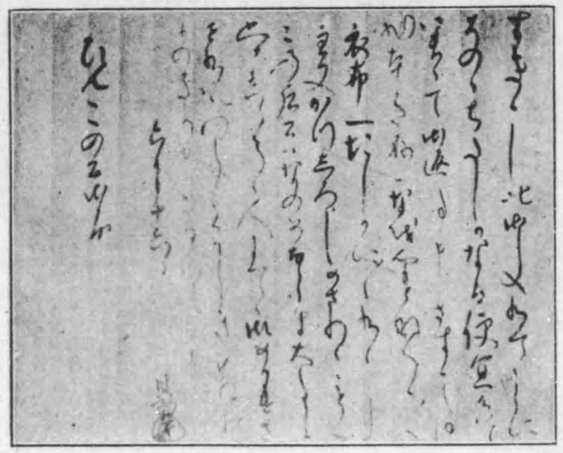
日傳・日法の入門

【繪解】京都妙顯寺所藏日朗上人の消息

比企・池上兩山

南部實長

後柏崎天台寺の僧、改宗して佐渡に到る、これ日傳上人なり。聖祖赦され給ひて歸途信州を過ぎる、彫像を以て聞えし和泉公日法上人の入門此時にあり。



御歸鎌及び隱棲　門下の僧俗、聖祖の歸鎌によりて、一段の活氣を添え、是より漸く發展の域に向へり、比企能本は鎌倉に長興山妙本寺を建て。池上宗仲は武州池上に長榮山本門寺を開く。聖祖兩寺を日朗上人に付す、上人乃ち長興・長榮兩山一主の制を定む、因つて「兩山」と稱す。

聖祖身延に隱退し給ふや、甲州波木井の南部實長、鷹取山の東麓に庵

【繪解】中山法華經寺安置、日高上人の肖像

室を構えて之を迎ふ。門弟子交、來り仕へ、太田乘明の子、日高上人の如きは一千日の給仕をなして千歳給仕に擬し。阿佛房日得は數、佐渡より登詣し。最蓮房日榮は下山に庵して仕へ奉れり。「御義口傳」「御講聞書」は弘安元年門子の爲に法華經を講じ給ひし時の聽講錄なり。

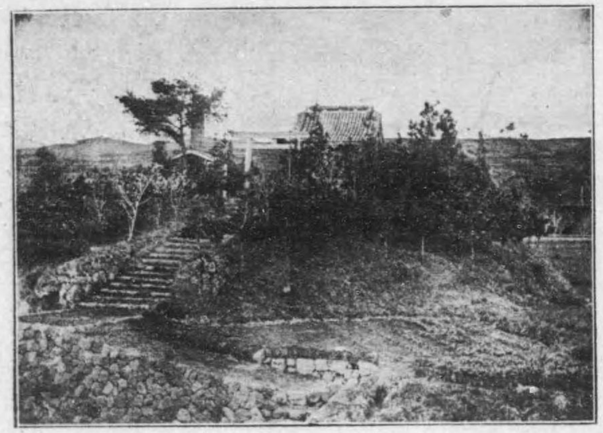
實相寺・瀧泉寺僧の改宗

日興の甲駿傳道

身延御隱退後の門下　岩本實相寺學僧智海、豫て聖祖の學德に感ぜしが、身延に入り給ふと聞きて來り投じ名を賢秀房日源と賜ふ、富士下方瀧泉寺學頭五人此の事を傳聞し、身延に至りて法義を角し、反駁せられて改宗せるもの三人、下野房日秀・越後房日辨・少輔房日禪是なり。日興上人は微恙ありて伊豆熱海に療養し弟子日目上人を得。次で駿州岩本附近に强折の化導をなし、更に甲州に轉教して日華・日仙・日妙・日傳等の法子を得。建治二年三月聖祖の舊師、房州清澄の道善房遷化の事あるや、日向上人は但馬公日實上人と共に「報恩鈔」を持して之に使し。上總興津の邑主佐久間重貞の嫡男美作房日保上人は興津に妙覺寺を開き、重貞の父重吉の三男寂日房日家上人は、聖祖の誕生地を記念して小湊に誕生寺を建つ。一乘阿闍梨日門

佐久間重吉重貞父子の外護

【繪解】駿州入山瀬瀧泉寺遺趾



【繪解】駿州岩本實相寺全景(下)

小湊誕生寺

上人は常陸行方の邑主横山勝光・由井國光等の外護によりて水原村に妙光寺を開き。工藤吉隆の遺子筑前公日合上人は、教信の子曾谷直秀の請に應じて、聖祖の化跡、下總野呂村に妙興寺を建つ。聖祖嘗て佐渡よりの歸途、甲州北原村に安國論を講じ給ふ。辻ノ坊修驗僧宥範法印、深く其講説に感ぜしが、此年日法上人北原に行化するや宥範、胎藏寺に轉じ、式部阿闍梨と稱せしが、遂に受戒し、名を日乘と改め、全村亦寺と共に歸正す、よりて日蓮休息村安國山立正寺となす。又日法上人の俗弟駿州岡ノ宮光長寺蓮明阿闍梨空存、日乘上人の誘導によりて身延に登り、名を日春と賜ふ、尋で寺檀共に本宗となる。

【繪解】京都妙顯寺所藏日法上人の消息

日法上人の行化

休息立正寺

岡宮光長寺

翌三年鎌倉にありては日進上人、桑ヶ谷の龍象房を論破せり。四條賴基之を警護す。同僚の讒言により、其主江馬氏の勘氣を受け、所領を沒收せらる、聖人代作の「賴基陳狀」を江馬氏に呈してその改宗を勸めしは此時にあり。又曾谷教信は下總平賀に長谷山本土寺を建てゝ日朗上人を請す、上人乃ち其資日傳上人を遣はして之に主たらしむ、「兩山」に加へて「朗門の三長三本」と稱す。

賴基の扶宗

朗門の三長三本

熱原法難

岩本の日源上人は瀧泉寺の日秀・日辨上人等と相呼應して徐々に妙教の宣傳をなしつゝありしが實相寺主嚴譽と法義を諍ひて破門せられ、松野政行等の外護により、傳道怠りなかりき、弘安元年日興・日法上人は「御義口傳」の講終ると倶に、祖命を受けて富士郡に來り、日源・日秀・日辨上人等と合して大擧傳道す、上野村の南條時光、西山村の大内安清等之を援護し、教績頓に擧る、茲に於て嚴譽は、領主平ノ賴綱に讒す、翌二年瀧泉寺主行智亦我宗徒を讒訴せしかば、日秀・

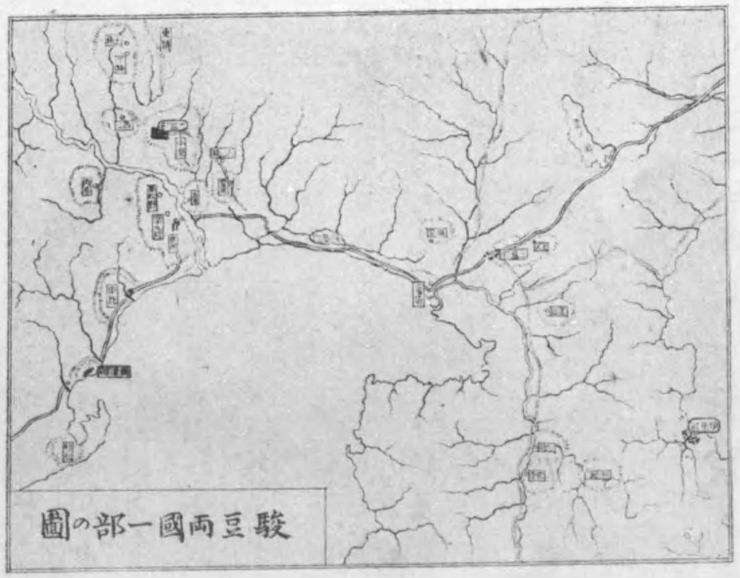
日興・日法・日源・日秀・日辨等の傳道

嚴譽行智の讒訴

熱原の信者斬殺せらる

日辨上人等「瀧泉寺申狀」を出して問注所に對決せん事を請ふも賴綱肯かず、反つて加島の信者熱原神四郎國重・田中四郎・廣野彌太郎等を捕へて鎌倉に斬す、然るに後幾何もなく嚴譽・行智等謀反を企て、事洩れしかば自ら寺を棄てゝ遁走す、よりて日源上人は實相寺に住し、日向上人瀧泉寺に主たり、是を「熱原法難」と稱す。

武總兩國及駿州教況



金龍山寺寂海

日頂日秀日辨下總に向ふ

鷲山寺

池田本覺寺

富木胤繼は建治二年母の遺骨を持して身延に詣で、入道して名を常忍日常と改めしが、武州淺草天台宗金龍山寺寂海法印を論伏す、寂海乃ち名を日寂と改め、金龍山寺を改宗せしめんとせしも、寺僧等應ぜず、よりて黃金の觀音像を奉じて別に橋場に庵す、今の長昌寺是なり。斯くて日常上人は太田乘明と共に一尊四士の本尊を造り、又眞間に釋迦佛を造立し、其開眼を聖祖に請ふ、日頂上人代りて之に赴けり。當時日秀・日辨上人は身延にありしが、日頂上人と共に上總茂原法華堂に移り、尋で日辨上人は小早川內記の外護により、茂原の西、鷲巢に鷲山寺を開きて之に居り、高橋時光は須田に妙福寺を創して日秀上人を請す、今の妙源寺是なり。當時治部公日位上人は聖祖が其祖母妙位尼に賜はりし「盂蘭盆鈔」を奉じて駿州四十九院に庵す、後の本覺寺是なり、至孝の聞えありし淡路公日賢上人は其法弟なり。

門下の奉仕

弘安四年に至り、日常上人は法華堂の傍に一宇を

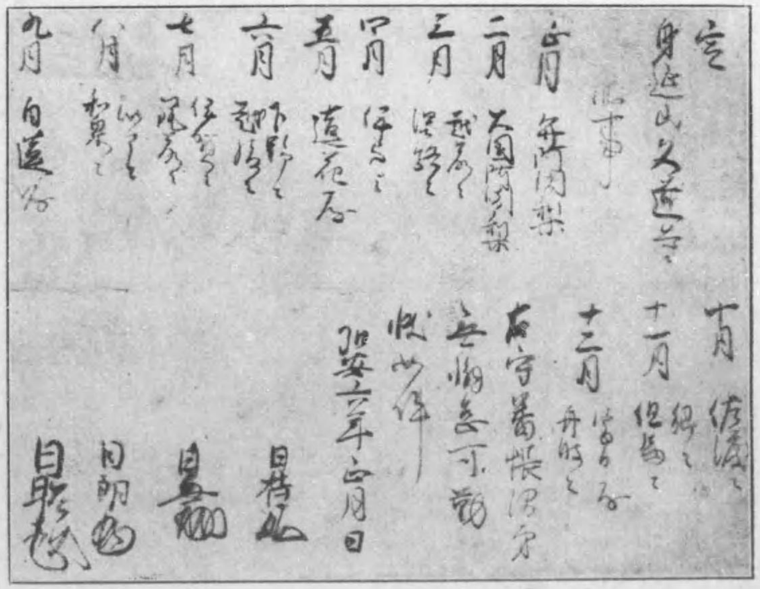
中山法華寺本妙寺

建つ、聖祖命名して妙蓮山法華寺と云ふ、太田乗明は自邸を改め正中山本妙寺と稱し、其子日高上人を住せしむ。此と相前後して南部實長は身延の艸庵を改築し、聖祖之を身延山久遠寺と命じ給ふ。又嘗て日興・日華上人等により て改宗せし甲州小室の修驗僧善知は名を肥前公日傳と賜ひ、寺を妙法寺と改め、日興上人を開祖とし、尋で身延醍醐谷に庵して聖祖に仕ふ、志

身延山久遠寺

【繪解】池上本門寺所藏日興上人筆墓番帳

小室の日傳



天目の入門

摩坊是なり。天目日盛上人の聖祖に投ぜしも亦此頃なるが如し。

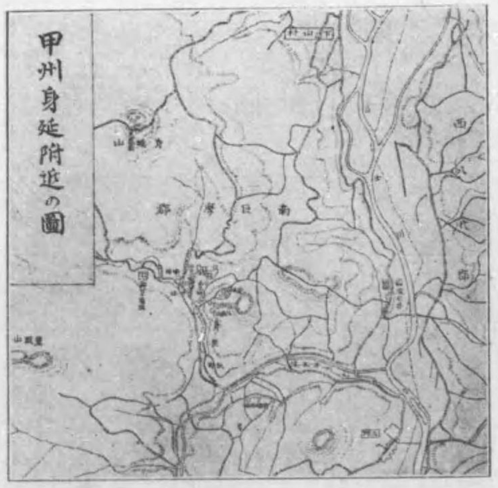
御入滅の前後

六老僧の選定

弘安五年聖祖武州池上に移り、十月門下の上足六人を選んで本弟子と定む、辨阿闍梨日昭・大國阿闍梨日朗・白蓮阿闍梨日興・佐渡阿闍梨日向・伊豫阿闍梨日頂・蓮華阿闍梨日持、是を「六老僧」と稱し、其他の直弟子を「中老僧」と云ふ、同月十三日聖祖入滅し給ふや、門下の僧俗、遺命により、骸を甲州身延山に葬り、六老僧及び中老僧十二人、月次交代に御靈廟の洒掃・獻香・看經の役を執る事とせり、是を「輪次守塔」と云ふ、六老僧各〻艸庵を構えて之に奉仕す。

中老僧

輪次守塔



第二章　老僧諸師の分張　上代の宗門制度

六老僧の分立　滅後宗門の經營・發展は、凡て六老僧の聯合宗政によりて行はれんとせしが、早くも聖祖の三回忌に際し、眞間の日頂上人は、日常上人の勸氣を受け、日興上人亦輪次守塔廢止の事より南部實長と不和を生じ、正應元年身延を去り、茂原妙光寺日向上人、實長の歸依によりて久遠寺に主たり、茂原門流又は身延門流の名是より起る。老僧中の長者たる日昭上人は鎌倉濱戸の法華寺に在りしを以て濱門流と稱し、降て德治元年風間信昭相州那瀨に妙法寺を建て、元亨三年信昭、越後村田に轉封せらるゝや寺も亦た移る、上人之を其資日成上人に付す、然るに濱戸は正慶年間、兵燹に罹りしを以て日祐上人伊豆雲金に移す、妙本寺是なり、兩山の日朗上人は、平賀の日傳上人と共に日像・

輪次守塔の廢止

【繪解】日向上人の自署花押

身延門流

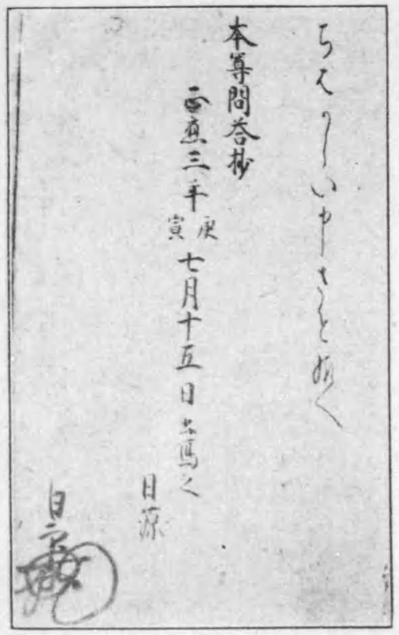
濱門流

日輪・日善上人等を教養し、日範・日印・日行・朗慶上人等相尋で入門し門葉最も榮ゆ、稱して朗門流と云ふ。日持上人は正應四年海外傳道の雄圖を懷き松野の精舍を法子日教上人に付して駿州を發せり。

中老諸師の發展　實相寺日源上人は武州雜司ヶ谷法明寺を改宗せしめて之を日賢上人に付し、更に碑文谷に法華寺を開き、蒲原四十九院の日位上人は弘安四年駿河村松海長寺を領し、日賢上人を招きて之に住せしめ、正應元年二月本覺寺を建て、正安元年之を府中に移せり。

よりて日善上人・日賢上人に代つて雜司ヶ谷を補す。當陸妙光寺日門上人は遠く仙臺に轉教して大仙寺を

朗門流



【繪解】岩本實相寺所藏日源上人の筆の本尊問答抄奥書

孝勝寺

【繪解】京都妙顯寺所藏日位上人の消息（上）

日辨の殉難

【繪解】下總峰妙興寺安置日辨上人の灰像

天目の迹門不讀說

建つ、後の孝勝寺是なり。又上總鷲山寺日辨上人は其資日忍上人を率ひて東北に行化し、常陸赤濱に願成・妙法兩寺を創し、次で盤城神谷に本行寺、岡小名に安立寺を開き、北進して伊具郡櫻村に至り、異教徒に殺害せらる、時に應長元年七十三歳なりき。日忍上人遺骸を願成寺に葬り、鷲巣に歸りしも法弟日源上人既に鷲山寺を領せしかば、下總千田庄大島に妙興寺を建てゝ之に居る、後中村に移せり。又天目盛上人は鎌倉腰越に圓成寺を創し、日辨上人と等しく迹門不讀の說をなし、乾元

佐野妙顯寺

中山門徒

大石寺
重須本門寺

重須談所

元年日向上人と諍ふ、後武州品川に妙國寺、下野佐野に妙顯寺を開き、晩年常陸小勝に本門寺を建つ。又日常上人は太田乘明逝去の後、中山本妙寺に移り、日高上人を後見し、眞間には及川宗秀を俗別當とし、其嫡子日樹上人を住せしむ、永仁七年聖教殿居の制を設け、法華寺を日高上人に付す、上人乃ち法華・本妙兩寺一主の制を立て以後貫首は中山に常居す、故に中山門徒と稱せり。

日興上人の獨立　身延を去りし上人は一時甲州鰍澤の大井氏に寓せしが、正應二年駿州西山村大内氏に憑り、又上野村南條時光の外護によりて、大石寺を創し、永仁六年石川忠實を說きて北山に重須寺を開き、大石寺を高弟日目上人に付して之に移り、後本門寺と改め本門戒壇建立の道場に擬せりと云ふ、日禪・日乘・日華・日仙・日代上人・日目の資日尊・日鄕・日道上人、日華の資日妙上人等來り集る、よつて門子の爲に講莚を張る稱して「重須談所」と云ふ。乾元元年眞間の日項上人

及び富木氏の後妻妙常尼、其子妙國尼、相尋で來り、日頂上人と同母弟にして身延日向上人の資なる日澄上人は其弟子日順上人を伴ふて亦富士に詣る、茲に於て日澄上人を擧て談所の學頭職に任ぜしが延慶三年遷化せしを以て日頂上人をして其職を補せしむ、然るに幾もなく寂せしかば、日順上人を擧て第三の學頭とす。是よりさき正安元年久成房日尊上人談所の席に惰容を示して日興上人の勘氣を蒙り、爾來十二年間、西は丹波・出雲・石見・安藝より東は外濱、南は伊豆、北は下野・奥羽に轉教し、三十六寺を建立す、應長元年其教效によりて勘氣を赦さる。又元亨年中鰍澤の邑主秋山

【繪解】駿州富士郡重須正林寺六老日頂上人の墓

日尊の傳道

日華日仙の四國行化

信綱の子泰忠、土佐田村に移封せらるゝや法華堂を創してその實弟日華上人を迎ふ、秋山氏更に同國幡田に轉封せらるゝに逮び上人亦往て法華堂を建つ、今の大乘坊是なり、然るに日華上人疾んで富士に歸り、南條時光の舊邸を妙蓮寺と改めて之に居す、其資日仙上人代つて土佐に赴きしが三度秋山氏讃岐に轉ぜらる、上人乃ち田村法華堂を移して鴻ノ巣に本門寺を建つ、會〻兵燹に罹りしを以て正中二年更に高瀬に移す、讃岐大坊是なり。是よりさき德治元年日興上人は日目・日華・日秀・日禪・日仙・日乘の六人を本弟子と定め、越て正慶元年日代・日澄・日道・日妙・日鄕・日助を新弟子六人とし、重須本門寺を日代上人に付し、佐渡妙宣寺阿佛房日得の曾孫日滿上人を北陸七個國法華宗別當とし、翌二年遷化す、八十八歳。本迹勝劣論によりて一派獨立せる事爰に濫觴す、興門又は富士門流等と稱す、今の本門宗及日蓮正宗の惣稱にして、已後餘の諸門流を一致門流と呼びて區別するに至れり。

下條妙蓮寺

本六人、新六人

妙宣寺日滿

興門又は富士門流

勝劣一致兩門流

北海道渡海

【繪解】駿州真松蓮永寺所藏日持上人の筆蹟

韃靼上陸

日持上人の海外傳道

上人は正應四年正月陸奥國石崎港より渡島國錢亀澤に渡航し、志苔・石崎等に傳道し、又交通の便を開きて内地人の移住を促す。土人、上人を「シャモ」又は「法華」と呼べり、留錫四年佛像及經石を小堀江差に埋め、惠山の麓今の椴法華より發し、樺太を經て韃靼沿海洲に上陸し、其終る處を知らずと

福山法華寺

師弟相續
貫首、學頭職

本山と末寺

門流派生

傳ふ、德治元年土人、經石及佛像を感得し、法華堂を建つ、後福山に移す法華寺是なり。

上代の宗門制度

身延・比企・中山等大寺の主職は師弟相傳へて相續せられ、その住職を貫首と稱し、末寺の徒弟は悉く貫首の附弟となりて本山に居食し、學頭職ありて教育の任に當れり。此等附弟は傳道によりて創建せし各地の寺院及其信徒を擧げて本山に屬し、本山は其等末寺・信徒間に起りし法義異解の審判權及び末寺住職の進退權を有して末寺を統率す、而して此等諸本山は教義・法制其他により て各門流の別を唱へ、各門相競ふて其特色を發揮し宗弘に努めしかば、急速なる進度を以て各地に傳播せり。

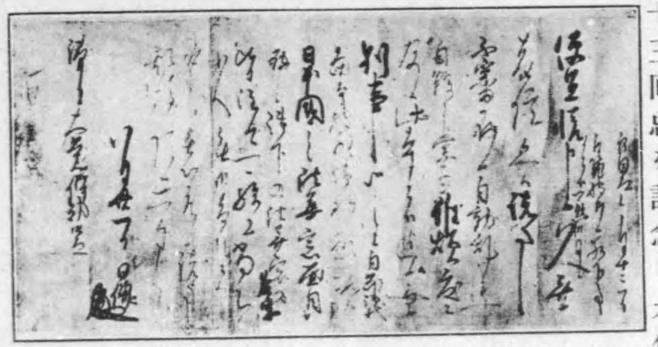
第三章　本宗の西傳

日像上人の上洛開教

上洛天奏の事は聖祖御一代の宿願なり

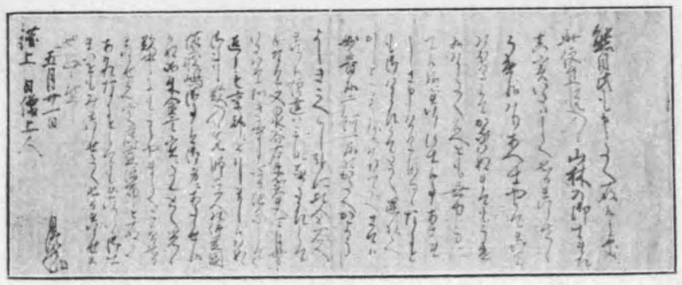
き、日朗上人其意を稟けて未だ果さず、法孫日像上人師命により、聖祖十三回忌を記念し、永仁二年春鎌倉を發し、まづ身延に詣で、佐渡の化跡を拜し、能登に上陸し、瀧谷の眞言宗天平寺滿藏を説破して寺を領す妙成寺是なり。越前に入りて大道妙泰寺を創し、江州を經て入洛す時に二月十五日歳二十六。五條堀川柳酒屋の主、まづ改宗して名を法實と云ふ。次で六條坊門室町の公方大工藤右衞門兄弟受戒す、四月二十八日王城の東門に帝都開教を宣誓す。また洛北松ヶ崎天台宗歡喜寺實眼歸伏し、寺を妙泉寺と改め、德治元年上人を請して大擧傳道し、全村悉く本宗に歸し、大に滿都の人目を驚かせり。然るに異教徒の讒訴により翌二年

永仁二年
瀧谷妙成寺
【繪解】京都妙顯寺所藏大覺に與へし日像上人の消息
開教宣誓
松ヶ崎傳道



都を追はれ洛の南西、鶏冠井眞言寺實賢を論伏し、寺を眞經寺と改む、延慶三年再び放たるゝや深艸眞言宗極樂寺良桂を改宗せしむ、今の寶塔寺是なり。尋で嵯峨大覺寺の宮妙實上人の入門あり、元亨元年後醍醐帝より地を賜ひ、今小路に龍華院妙顯寺を創す、京都に於ける我宗道場の嚆矢なり。建武四年四月帝また勅願所の綸旨を賜ふ後年「宗號の綸旨」と稱するは是なり。法叔日法・法弟日輪上人等遙に賀狀を贈る。

鶏冠井布教
深草寶塔寺
我宗道場の嚆矢
勅願所綸旨
【繪解】京都妙顯寺所藏日澄上人の消息
日興門下の西化



本宗の西漸

正安の頃より興門の日尊上人は山陰・山陽に行化し、元亨年中日華・日仙上人等は土佐讃岐に掛錫し、又日像上人の上洛は延いて其法弟諸師西化の端をなす。延慶三年日範上人上洛して法兄日像上人の法勞を慰め、丹波に遊化し、荒

福智山常照寺

山村眞言宗金胎寺の僧と角論して終に改宗せしむ、今の福知山常照寺是なり。又日澄上人は相州小田原蓮昌寺より上洛して日像上人の法效を賀し、歸途尾州熱田に傳道して本遠寺を建つ。建武四年天日上人の門下が京都二條西洞院青柳に本門寺を創めしは京都に於ける本宗道場の第二次なり。

熱田本遠寺

本宗道場の第二次

*本門寺、青柳の地に在りしを以て、これに屬せし僧俗を、世人稱して「青柳門徒」と呼べり。然るに室町時代に入り、應仁の兵亂に際して寺を丹波龜岡に移し、のち織田氏の天正四年再び京都に歸せり、今の北野宥清寺なりと傳ふ。

日目の天奏企圖

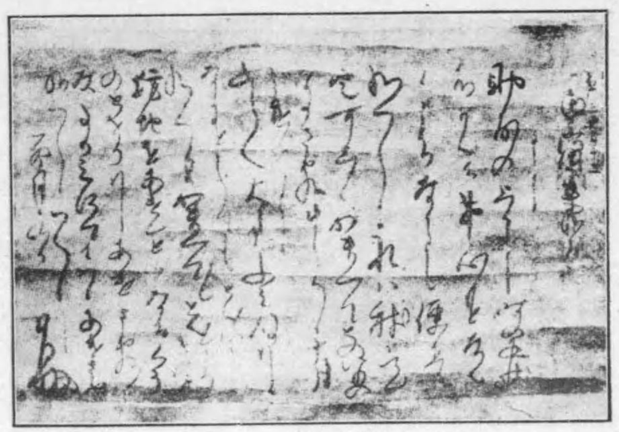
第四章　關東諸門流の狀勢

日興上人滅後に於ける富士門流

正慶二年日興上人遷化せるや高弟日目上人、大石寺を日郷上人に讓り、十一月師の遺命に基き、日尊・日郷上人を隨へ、上洛天奏の途に上る、然るに美濃垂井に至つて

本宗道場の第三次

【繪解】日目上人の消息



遷化す、よつて日尊上人遺骸を奉じ上洛して之を鳥邊山に葬り、次で天奏を果し、再び中國に轉教し、復た京都に歸り、曆應二年六角油小路に上行院を創す京都に我宗道場ある第三次なり。日郷上人駿州に歸りしが、大石寺大衆等は日道上人を後職に推して日郷上人を排斥す、重須本門寺日代上人其不法を諭せしも肯かず終に日道上人大石寺に住す。よりて日郷上人は南條時綱の援護により建武元年同國小泉に久遠寺を創し、次で房州保田に妙本寺を建つ、後南條時長、上人を大石寺に還住せしめんと計りしも成らず、貞和元年上洛天奏し、光明院の詔勅を受く。是よりさき日妙

日道大石寺に住す

小泉久遠寺

保田妙本寺

日代擯斥せらる

西山本門寺

【繪解】京都妙顯寺所藏日印上人の消息

上人は師日華上人の開きし鰍澤蓮華寺に住せしが重須の檀越石川家の出なるより本門寺及び、大石寺僧衆相結んで建武元年正月法義の異亂に詫し、日代上人を本門寺より擯斥して日妙上人を住せしむ、日代上人は康永二年大内安清の外護により西山に本門寺を創して之に徙る、應安元年に至り、石川家との和義就り再び重須に還住せりと傳ふ。

日印上人の分立と三箇重寶　日朗上人の資日印上人永仁五年鄉里越後三條に青蓮華寺を創す、後日朗上人に請ふて長久山本成寺と改む、之に三長三本を加えて「朗門の四長四本」と稱す。又東島に妙蓮寺を開き、文保元

鎌倉殿中問答

松葉ヶ谷本國寺

會式を別修す

本成・本國兩寺一主

大輔公日祐の上洛天奏

正東山日本寺

朗門の四長四本

年角田に妙光寺を創す。元應元年師に代りて伊羅瞰律師と鎌倉殿中に問答して大に我宗の面目を施せり、翌年師の喪により、松葉ヶ谷に本勝寺を建つ、後本國寺と改む、上人之に據りて私かに獨立の志あり、比企谷の日輪上人が曾て日朗上人より讓られし兩山三箇重寶を、日輪上人の生母上殿妙朗尼より受け、元亨元年十月之を奉じて法弟日行上人等と共に本國寺に會式を別修す、是より比企名越兩寺の和親漸く疎し。嘉暦三年重寶を本成寺に移し、本成・本國兩寺一主の制を立てゝ日靜上人に付す。

中山本妙寺の隆盛　下總佐倉の城主千葉胤貞、日高上人に歸依し、其二子を出家せしむ、日胤・日貞上人是なり、正和三年胤貞の弟大輔公日祐上人本妙寺三世を嗣ぐ、曾て日高上人天奏をなせし志を紹ぎ、數〻上洛天奏す、延文元年の如きは弟子日尊と共に京都六條河原に刑せられんとす。尋で下總中村に正東山日本寺を建て、又相州六ッ浦の荒

鎭西の開教
正西山光勝寺

井光善を教化して武州杉田に妙法寺を創す、胤貞偶、懷良親王に隨ふて鎭西に下るや上人肥前松尾に正西山光勝寺を開き、其寺職を西海惣導師職と稱す、蓋し九州に本宗あるの嚆矢なり。上人又聖祖の遺文を身延及京都諸山等より寫取し大に學事を奬勵せしかば名匠一時に輩出して門流大に榮ゆ、法華問答正義抄(二十二卷)は法弟日全上人が建武・康永の間に亘りて注せし所、次で寺職を辨公日尊上人に讓り、貞治年中下總飯高に行化し眞言宗圓靜寺を領す、近村風を望んで改宗し、又中村德成寺了海を論伏す。

日全の正義抄

【繪解】中山法華經寺安置日祐上人の像

中山の隆盛

胤貞は寺領を寄せて外護し、日全・日憲上人等は日惠・日英上人等を教育し、日胤・日貞上人等西海惣導師職となりて闡教に從事し、嫡弟日尊上人は日祐上人の行化に隨伴し、日經上人は山務を處理して內治を

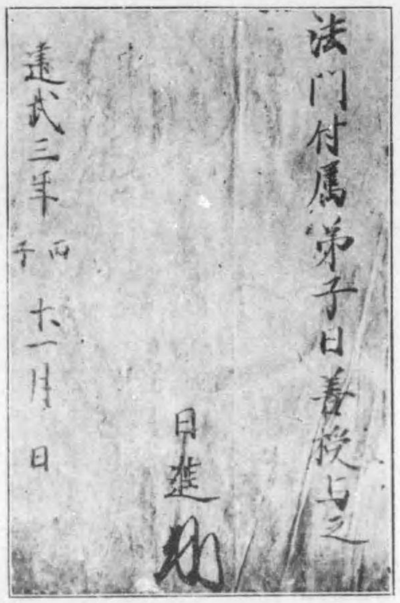
助けしかば、終に末寺千を以て數ふるに至り、歷世中無比の教績を收め、寺觀の美亦其極に達せりと云ふ。

中山の四院家制

日尊上人其後を克くし、法宣院二世日貞・淨光院開祖日經・安世院開山日慧・本行院開祖日堯の四師を擧げ、學事を督し、貫首を補佐して寺務に參與せしむ。已後之を「四院家」と稱し、西海惣導師職も此四院家より交代に就職する事とせり。

日進の久遠寺經營

【繪解】東京府下堀ノ內妙法寺所藏日進上人筆金綱集の奧書



身延の狀況　日進上人は日祐上人と年を同ふして久遠寺三世となり、方丈・庫裡等を建て伽藍始て整備す。又下總道野邊に妙蓮寺を創して聖母妙蓮の菩提に資す。俗弟日善上人は雜司ヶ谷より入山

學頭日海

し、法子日臺・日院上人相續て久遠寺に住す、其間山務の顧問たる事三十餘年、其著に「三國佛法弘通次第」あり。日院上人の時、學頭和泉房日海上人あり、もと天台の學匠なりしが本宗に歸し、衆徒の爲に台・當の學を講ず、中山の學僧日祝、小室の日顯上人等其聽徒たり。應安二年より講ぜし「三種教相」の「見聞」（十卷）は尚身延に傳へらる、又其著「始行位抄」（十五卷）は上人の學博きを知るに足る、後茂原妙光寺四世たり。

日祐日進に對し師資の禮を執る

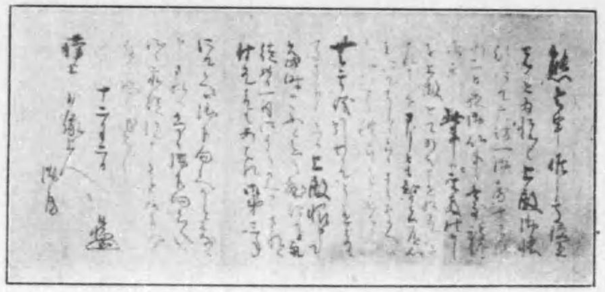
中山との親善　日祐上人は中山を以て久遠寺の配下末寺なりとし、且つ日進上人が聖祖の直弟なるを以て師資の禮を執れり、されば建武二年には本妙寺の一尊四士を改造し身延に持して點眼を請ひ、觀應二年本妙寺御影堂を上棟し、翌年眞間の御影堂を建つ、其都度日進上人を導師に請し、其他信徒を率ひて身延に詣せし事前後三回に及べりと云ふ。

兩山及平賀の狀勢　正應四年日輪上人、日朗上人の讓を受く、師に仕へて至孝なり、下野宇都宮妙正寺、相州大磯妙輪寺等四十八ヶ寺を開創す。四世日山上人性豪邁、學台當に通ず、天台の學匠慧海、上人に論破せられ名を日饒と改む。

日饒改宗

三長三本の諍

【繪解】京都妙顯寺所藏日輪上人消息

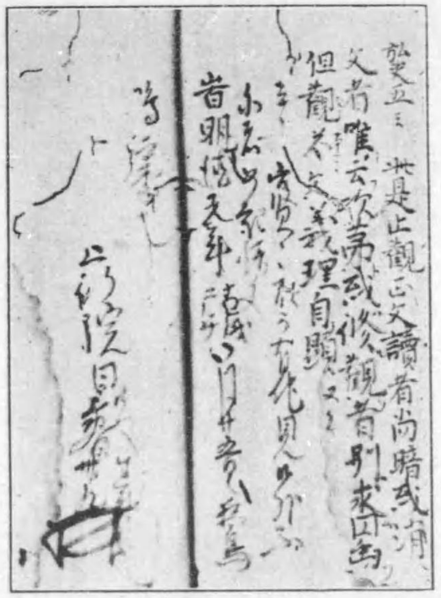


平賀本土寺は兩山の配下に屬せしが日願上人の頃より朗門三寺中の根本道場なりと主張し、池上の寺衆亦聖祖鶴林の靈跡なりと稱揚し、各其由緒を誇張し、地位を諍ふて共に本寺比企ヶ谷の命に服せず。此時に當り日山上人遷化して主なし、兩山の大衆胥議し、永德元年身延七世日叡上人を迎ふ、上人は曾て日輪上人に師事し、日山上人と忘年の交あり、よりて上人請に應じ兩山を兼職して、三山一主の制を始む。

三山一主制

日叡上人の刷新　當時各門流互に唯授一人の法義と稱し、固く

法義の傳承を許さず



【繪解】甲州身延山所藏日叡上人筆・惠心流相傳八帖見聞集第三卷の奥書

三山の統一

中山日尊の反對

外護大に努む。

中山との干係　然るに中山の日尊上人之に反對し、上人が三山の兼職は法脈の傳承を濫すものとなし、日叡上人を詰責す、當時諸山皆な門流の別を嚴守し、知識相承によりて各〻法義を傳承せしを以てなり、身延・中山の和親是より漸く破れんとせり。越えて明德元年偶〻上他門流の人に祕して傳承を許さず、諸山確執の弊風漸く甚しきを慨し、まづ三山の隔壁を撤廢し、法義の融合統一を斷行するに及び、平賀・池上の寺衆亦鎭靜す。狩野修理亮上人の教化により入道して叡昌と云ふ、爾來檀越として

法服着不論

總埴谷の城主景正、其子日英上人の爲に妙宣寺を建て開堂の式を行ふあり、本寺中山及眞間の兩貫首、施主の望により、始て法服・七條を用ふ、日叡上人以て謗法衣なりと稱せしかば、豫て道交ありし眞間の日滿上人遂に中山に背きて身延に從へり、茲に於て中山對身延の諍となれり。日尊上人は鎌倉幕府に訴へ、日叡上人と對論に及び、身延方終に墮負に決し、眞間再び中山の配下に歸せり、是より兩寺全く絶交せり。

兩寺絶交す

日海の謗法

茂原及小室との干係　當時茂原の日海上人廣く自他宗に勸財して六萬貫を得、黃金の塔を造りて寺觀を飾る、事身延に聞へしかば日叡上人康應元年日海上人を招致し、謗施受用の罪過を譴責す、然るに其資日悟上人深く之を含み、名を寂忍と改め、一門徒を起して身延より獨立せんと企てしが、寺衆分裂して其志を果さず、復た身延に謝罪して配下に歸せり。

寂忍門徒

小室の改派

妙實の歸宗

【繪解】岡山蓮昌寺所藏大覺大僧正の消息

小室は從來日興門流に屬せしが、妙法寺五世日尊上人、日叡上人の爲に其本迹勝劣說を論破せられ、終に身延門流に改派し、開山日興上人を除歴し、以後日傳上人を開祖となせり。

第五章　京都諸門流の發展

妙實上人畿內中國の傳道

後醍醐帝の皇子大覺寺の宮と傳へらるゝ妙實上人は、私に北條氏を滅して王政を復古せんとの志を懷けり此時に當り、日像上人の法界唯一佛、王佛冥合の說を聽き、本化の敎によりて人心を收め、復古の大業を精神の方面より徹底せしめんと欲して遂に入門せられたりと云ふ。嘉曆年中備中竹ノ庄の領主伊達朝直の懇請によりて行化す、朝直の祖父朝義聖祖の敎化により本宗に歸し爾來我宗を信ず、朝直、妙實上人の來錫を喜び外護最も努め、領內眞言宗七ヶ寺を本化の道場となし、領民に令して悉く改宗せしむ、次で上人は泉州佐野に轉敎し、淡ノ輪六郎を敎化して妙光寺を開き、元德年間備前牛窓に法華堂を創し、元弘年中播州苔繩城主赤松圓心を說きて美作小原に大聖寺・慈眼寺等を建つ。進んで伊福に眞言宗福輪寺良遊を

伊達朝直の扶宗

松田父子の外護

論伏し、其檀越富山城主松田元國・元喬父子亦改宗し、寺を妙善寺と改め、元喬又蓮昌寺を建てゝ上人に獻ず。曆應二年元喬備前八郡を併有し、居城を金川玉松に移すに及び、城域に道林寺を創し、領内に令して皆な改宗せしむ。

備前法華

「備前法華」の稱爰に起る、此外泉州和氣に中谷則正は妙宣寺を、多田頼貞の子頼仲は備前濱野に松壽寺を建て、斯くて三備作州の宗風漸く盛んとなれり。

四條門流

斯くて日像上人の讓を受け妙顯寺に住し、曆應四年光嚴上皇より四條櫛笥の地を賜ひ、妙顯寺を移せり。故に四條門流と稱す。延文三年朝廷より聖祖に大菩薩、日朗・日像上人に菩薩號を贈賜せられ、妙實上人に大覺の名を賜ひ、官大僧正に任ぜられ、寺職を「四海唱導師職」と稱するに至り、寺基初めて定まれり。

霽成兩派の諍

妙覺寺の分立　永和四年妙顯寺五世朗源僧都遷化せらるゝや、寺衆兩派に分れ、日成上人等は日實上人を後職に擬し、僧衆の一部は日霽上人を擁して互に諍ひしが終に日霽上人妙顯寺に住せり、茲に於て日成上人等は曾て日像上人の教化に與りし小野妙覺なるもの の舊別墅に就き、妙覺寺を創し、日實上人を迎えて開山とす、是れ四條門流分裂の濫觴なり。

妙覺寺創立

六條門流

【繪解】京都本國寺所藏三位日靜上人が其資日傳に與へし讓狀

本國寺の移轉　妙實上人と時を同ふして日印上人の資に日靜上人あり、其俗甥足利尊氏の外護により、貞和元年、鎌倉本國寺を京都六條堀川に移す、故に六條門流と云ふ。同四年三個重寶を本國寺に移し、光明院より聖祖正嫡の綸旨を受く、爾來足利氏累代の外護厚く、寺運益〻發展して、終に妙顯寺を厭倒するに至れり。又相州米ヶ濱法華堂を金ヶ谷に移して大明寺と改め、法華堂舊地に龍本寺を建てゝ奥ノ院とせり。延文二年上人の資日叡上人は鎌倉本國寺の舊地に妙法寺を開く。上人は護

三浦の大明寺

妙法房日叡

良親王の御子楞嚴法親王にして、妙法寺は父君の菩提に資せし所と云ふ。

第六章　日興門流の發展　日什上人の獨立

日興門流の教勢

久成房日尊上人の資日尹上人は奥州會津實成寺に住して東北の傳道に從事し、日大上人は京都上行院にありて美作・備中・出雲・石見に行化し、殊に出雲檜山・平田地方の眞言宗寺院を改宗せしめたるもの尠からず、終に「山方法華」の稱あるに至れり、又京都木辻に上行院、夷川西ノ洞院に住本寺を開く、上人の資日源・日

【繪解】京都要法寺所藏日大上人筆攝時抄下卷の奥書

山方法華

住本寺

玄妙能化の改宗

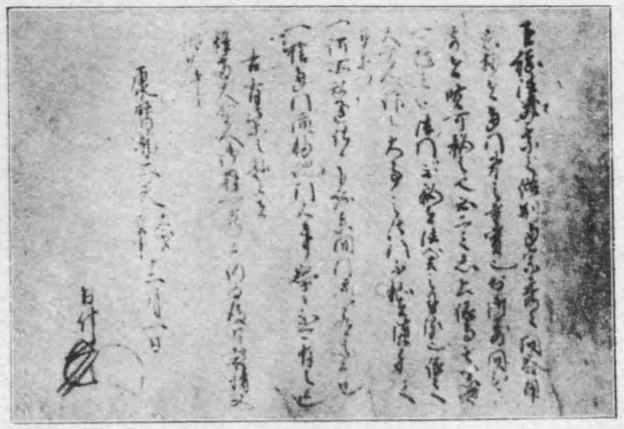
上洛天奏

要上人等は日尊上人の化跡たる伊豆に布教して實成寺・廣宣寺・妙蓮寺等を建つ。

日什上人の獨立

上人はもと叡山慈遍僧正の學弟にして玄妙と號し能化たりしが、偶〻聖祖の『開目鈔』『如説修行鈔』を拜して一悟る所あり、康暦二年六十七歳にして弟子五人と共に、中山日尊上人の門に投ず。翌永德元年日尊上人の代理として上洛天奏し二位の僧都に任ぜられ、洛中弘通の勅を賜ふ、翌年重訴せしも要領を得ず、其間富士・身延等に詣り、求道の誠意を陳べて教籍の拜閲を請ひしが、知識相承による唯授一人の深祕法門と稱して許されず、上人深く此弊風を慨し、至德元年三たび上洛し自らの名によりて

【總解】眞間弘法寺所藏日什上人起請文

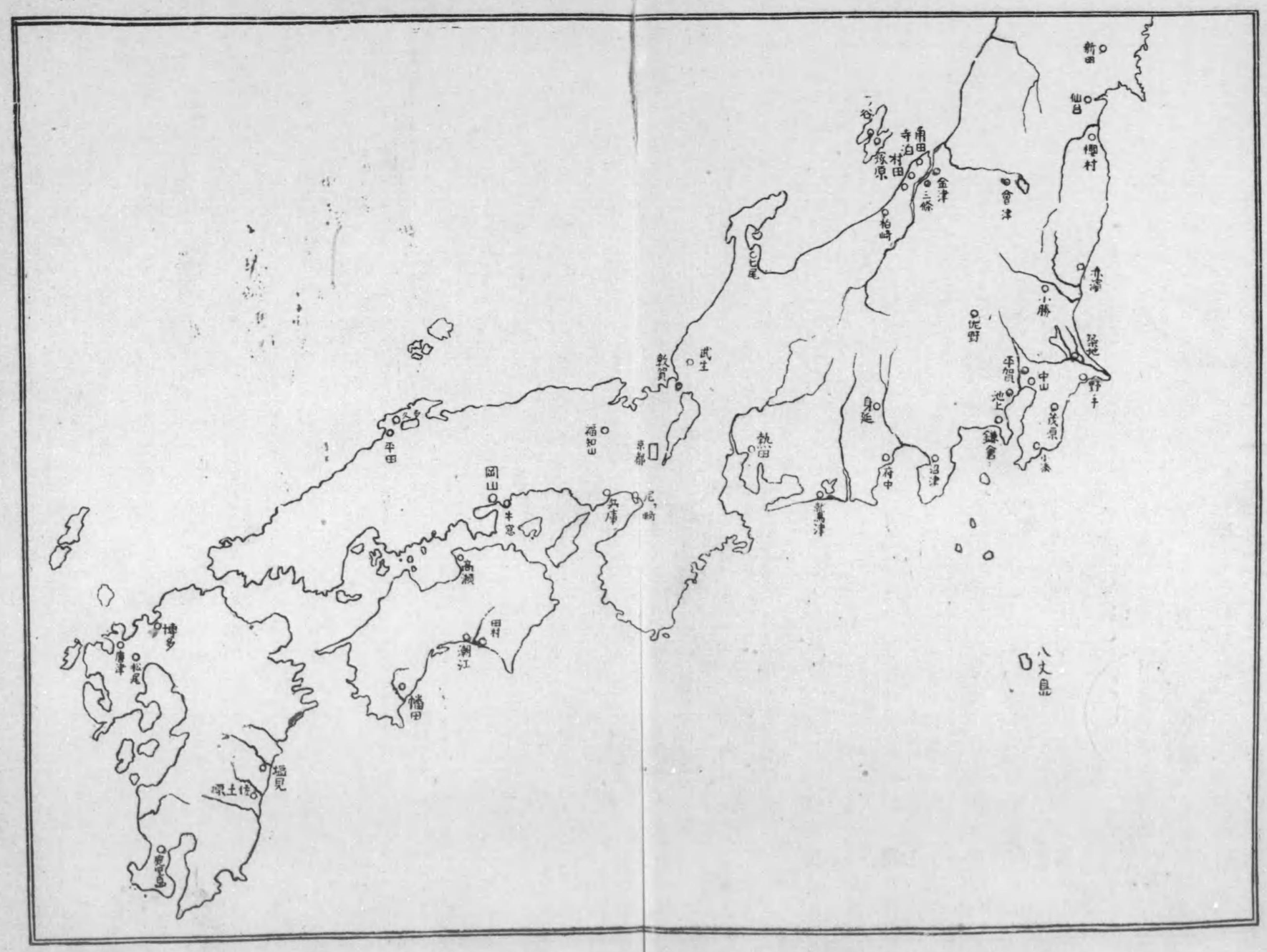


一派開創

什門流

天奏す、此時に當り妙顯寺は叡山徒の爲に破却せられ、日霽上人難を丹波知見に避け居たり、上人乃ち相共に幕府を諫曉せん事を計りしも應ぜず、翌年遠州見附に玄妙寺・吉美に妙立寺を創し、會津に妙法寺を開き、鎌倉埋橋に本興寺を建つ、明德元年京都綾小路堀川に妙滿寺を建てゝ帝都の法陣とし、終に直授經卷相承を主義綱領とし、本勝迹劣によりて一派を創唱す、翌年三月死を決して義滿を面訴し、其翌年一旨三通の置文を玄妙・妙滿・妙法の三寺に留め、日金・日妙・日穆・日全・日義・日仁を六老僧と定め、若松妙法寺に寂す。

聖祖滅後百年前後に於ける宗勢發展圖



日什門流又は妙滿寺派等と稱せり、今の顯本法華宗是なり。

第二期　室町時代

第七章　叡山と本宗　什門の狀況

比叡山と京都の本宗

京都に於ける本宗は日像上人の開教已來漸次發展しつゝありしが、前期の中頃北條氏滅亡と俱に國政の中心京都に移るや、諸門流其主力を京都に向つて集注し、本國寺の移轉によりて更に一勢力を加へ、年と俱に隆盛の域に向ひしかば、叡山の僧徒之を嫉み妨害を加へんと欲せしも本國寺は足利氏の外護あり、妙顯寺亦始め皇室の御歸依を受けしかば敢て之をなさゞりき、然るに足利氏の勃興と俱に皇運漸く衰へしに乘じ、終に永德年間妙顯寺を破却せり、以後叡山の干渉迫害は常に妙顯寺に向つて加へられき、

宗門の主力京都に集注す

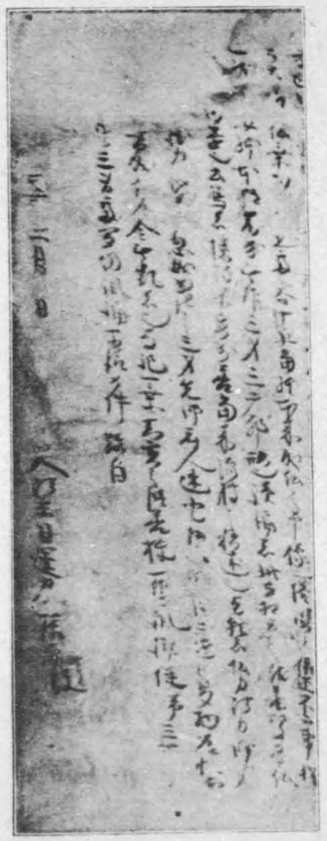
叡山の迫害

寺主日霽上人は丹波知見村に避難し僧衆各所に散じ、遂に日譽上人は弘經寺を、妙智上人は妙願寺を、定嚴上人は妙教寺を開くに至る、かくて日霽上人は明德四年義滿より三條坊門の地を得て再建せしも山徒元の寺號を許さず、よりて鎌倉比企ヶ谷妙本寺の號を分稱する事により辛ふじて其許諾を得たりと云ふ。然るに應永の初年山徒また法華宗の名を用ふる事を咎む、日霽上人乃ち後醍醐帝の勅願所綸旨により僅かに事なきをえたり。

應永の宗號論

日什門流の狀況　什門六老僧中、日妙上人は玄妙寺に夭折し、日義上人其後を補し、日穆上人は鎌倉本興寺に住す、日什上人遷化に際し、日義上人妙滿寺に轉職し、日全上人は玄妙寺を補す、然るに應永四年日義上人寂せしを以て日仁上人妙滿寺三世となる。是より後妙滿・玄妙・妙法の三寺を體(たい)の三個寺、妙立・本興・本光の三寺を用(ゆう)の三個寺と稱し此等の六寺は輪番に住職するの制を採れり。

體用六箇寺輪番制



【繪解】上總東金本漸寺所藏日運上人筆敬白文の一節

日仁日實の諫曉と法難

轉派せし玉春房日行及び河合國安(くにやす)等と共に應永五年六月死を決して室町新邸義滿に直訴す、曾て日什上人直訴極諫せしも義滿尚之を寛容せしが再び此事ありしかば終に怒つて日仁・日實兩師を捕えて大に迫害し、念佛を强請せり、然れども上人等所信を主張し敢て屈せざりしかば、許されて歸る、此時日運上人は法命相續の使命を帶びて妙滿寺にありき、上人はもと碑文谷法華寺の僧なりしが日實上人と俱に改派せり、のち妙滿寺四世となる、五世日舜上人は三條油小路に善如房日仁上人は嘗て駿州岡宮光長寺東坊より改派せし祐泉房日實、身延門流より

妙泉寺開創

妙泉寺を開けり。

第八章　六條門家の分出

日陣・日傳と本迹の勝劣を諍ふ

【繪解】越後本成寺所藏應永十八年七月二十三日、日陣上人が高弟一乘房日信に與へし本尊の花押

日陣上人の獨立

日靜上人寂するに及び、本國寺を高弟建立院日傳上人に、本成寺を圓光房日陣上人に分讓せり、然るに應永四年日陣上人、本國寺に法華經を講談して盛んに本勝迹劣の說をなす、日傳上人一致を主張して諍へり、是よりさき日陣上人の資日乘上人遠州鷲津本興寺五十五箇の難條を列ねて日陣上人に送り、終に兩寺全く絶交せり。茲に於て日陣上人は其資日登上人に命じ、同十三年四條堀川に本禪寺を開かしめて

鷲津本興寺五十五箇の難條

及べり。應永十一年日傳上人は「本迹問答高廣義」を著し、五十五個の難

本禪寺

陣門流

帝都の法城とし、獨立して一派を創む、日陣門流又は本成寺派と稱す、今の法華宗是なり。

本滿寺

本滿寺及本國寺

本滿寺は日傳上人の資玉洞妙院日秀上人が其父近衞關白藤原道嗣の別墅に就て創立せし所。かくて日經・日嚴の兩師は相續で本國寺に住す。然るに寺衆日嚴上人を喜ばず、遂に當時叡山に遊學せし日聰上人を迎ふ、よりて應永二十一年日嚴上人を事務の貫首とし、日聰上人を法門の貫首となし「學道魁」と稱す、日聰上人乃ち日印上人の殿中問答を記念して、翌二十二年正月二十日學道講を創む、爾來「廿日講」と稱して、毎年之を行へり。永享四年日曉上人學道魁となるや、其師日肝上人曾て日傳上人と不和なりしより、寺衆之を斥けんとす、よりて日肝上人を捨つべき誓狀を日曉上人に入れしめて事落着せり。

廿日講の起原

第九章　四條門流の消長

妙本寺大衆の紛擾

寺主日霽上人の寛大なる措置は曳いて衆徒の放縱を來たし、寺規漸く紊れしかば、應永六年日存・日道兩師は其俗甥日隆上人と共に內野に艸庵を結びて別居し、七世月明上人住するに及び寺衆、日霽・月明兩派に分れ、存・道・隆三師は大成房日慶・大法房等と共に日霽派の領袖たり、同十七年三師は月明上人の非行十ヶ條を擧げて諫めしかば月明上人怒りて三師を追放す、存・道二師は越前敦賀に下り、日隆上人は越後本成寺日陣上人に親炙して本門の要義を學ぶ。同十八年月明上人、大僧都に任ぜらるゝや、山徒快とせず、再び妙本寺を破却せり、月明上人難を丹波知見に避け、妙光房を京師に留めて再興を計らしむ、上人會、若狹小濱妙興寺に行化す、存・道二師聞て至り、起請を入れて上人と和せり。妙光房等は柳酒屋妙汝・小袖屋經意等の外護により、妙顯寺の舊地四條櫛笥に再建して立本寺と稱し、月明上人の俗弟迹本院具圓上人之に住す、然るに圓融房舜叡等三十餘人之を喜ばず、去つて五條大宮に本佛寺を創して之に據る、月明上人之を和解せんと欲して上洛せしかば、本佛寺衆、起請を入れて歸伏し、立本寺衆反つて月明上人に背き、裏辻家の末族を迎へ、日實と改名して立本寺に住せしむ、よりて月明上人本佛寺を妙本寺と改め、尋で立本寺を返さしめんとせしに、妙光房等は、叡山の末寺に屬せりと稱して應ぜず、具圓上人また妙本寺に歸り、立本寺終に分立せり。

霽明兩派の諍

存道隆三師と月明

立本寺大衆の分立

諸寺の分出

是よりさき妙本寺破却に遇ふや、宗學上人は出で妙瞰寺を建て、後ち一如房日成上人は久成寺を開きしが兩寺共に廢絶せり。又大成房日慶上人は大法房等と綾小路大宮に假寓し、存・道・隆三師と相計り、嘗て日像上人の建てし妙法蓮華寺の再興を企つ、應永二十二年日隆上人五條坊門に本應寺を創するに及び、三師之に移

妙本寺破却と諸寺分出

本應寺

妙蓮寺の別立

れり、よりて日慶上人は柳酒屋の外護により、四條綾小路に一宇を建て、卯木山妙蓮寺と稱せり。かくて伏見宮榮仁親王の末子を迎へ名を日應と改めて貫首とし、法義他に異なりと稱して自立せり。

八品所顯說

日隆上人の獨立

日隆上人は本應寺に據りて盛んに八品所顯の說を唱導しつゝありしが、應永二十五年妙本寺學僧、千如房忠賢の仲裁により、月明上人と和し、本應寺に具圓上人を迎へて三師また妙本寺に歸れり。然るに幾くならずして再び月明上人と本迹を論ず、妙本寺大衆怒て本應寺を破却せしかば日隆上人乃ち河內國三井に行化して本嚴寺を創し、同二十七年攝州尼ヶ崎の領主細川滿元の歸依により本興寺を開きて根據とす、かくて存・道二師相續きて內野艸庵に遷化せしかば、永享元年艸庵を改築して本應寺を再建し「四帖抄」を著して洛中諸山に回達し終に一派獨立を宣言せり、尼ヶ崎流、八品派等と稱す、今の本門法華宗是なり。尋で存・道兩師を妙蓮寺歴世に列すべき

尼ヶ崎本興寺

八品派

【繪解】攝津尼ヶ崎本興寺所藏日隆上人筆四帖抄の末文

本能寺と改む

日朝と會談す

光長寺の改派

事を主張せしも、日慶上人之に反對す、此より兩寺交を絶てりと云ふ、同五年更に寺を六角大宮に移して規模を擴張し、本能寺と改む。上人が本果院日朝上人と會し、所懷の法義全く合致せるを喜び、遂に「十三問答抄」を遺せしは同七年の事なりき、日朝上人は岡崎宮光長寺東坊五世にして富士門徒たりしが、之に力を得、盛んに其說を宣敎し、終に光長寺一山を改派せしむ。かくて日隆上人は淡路・備中・讃岐・宇多津・備前牛窓等に轉敎し、又兵庫久遠寺を一致門流より改派せしむ。

上人は上野國桃井の領主、桃井尙儀の子、越中射水郡淺井に生る、十二

著述三千帖

【繪解】本興寺開山堂安置上人在世に酒井淨傳の刻みし木像

歳遠成寺主慶壽院に就て出家す、字は深圓、應永五年上洛して日霽上人の門に投じ慶林房日立といふ、のち日隆と改む。寶德元年尼崎に歸り筆策に從事す、著述三千帖と稱せらる、「本門弘經抄」(百十三帖)「本門宗要集」(六十六卷)「御書文段」(五卷)「私新抄」(三十卷)等は其主なるものなり。

應永の新條目

妙覺寺の不受條目　不受不施は諸門流の通規なりしが、放縱なる時代影響を蒙りて漸く亂れ、僧侶は謗法者の供養を受け、檀信徒亦他宗寺社の勸進に加入し、敢て謗法罪を感ぜざるに至りしかば、妙覺寺日成上人之を慨し、應永二十年新條目を定め、謗施受用・謗者施與

本覺寺

を嚴禁して宗風の挽回に努め、後ち日遵・日延上人更に王侯は信謗兩者より除外すべき事を追加して不受不施の意義・範圍を明かにせり。又日延上人は三條猪熊に本覺寺を創せしが、其資日住上人の時に至りて、再び妙覺寺に併合せり。

錄内錄外の名稱

邪徒の僞防

祖書の錄内錄外　祖書は中山日祐上人によりて其大半蒐集せられし事を傳ふるも、未だ錄内・錄外の稱ありしを聞かず、門流漸次に派生し、本迹の論亦盛んとなり、其間祖書を僞造して自門の法義を助成せんと企つる者あるに至りしかば、五大部其他の御書を加へて一百四十八通を「錄内」と名け、口訣相承類の遺墨を集めて「錄外」と稱せしは應永の頃なるが如し。本成房日實上人が寛正二年に著せし「宗旨名目」(二卷)に其名稱を見る、然れども未だ其蒐集者を詳にせず。古來錄内外の稱は聖祖大小祥忌に六老僧の定めたるものと傳ふるは、唯だ名を六上足に嫁して邪徒の僞防に備へしに外ならずといふ。當時祖書を

傳ふるもの甚だ稀なりしかば、永享・寛正の間に亘りて、妙覺寺日延上人、其資本覺寺日住上人相續で身延・比企・池上・中山等の關東諸山、其他各地に祖文を蒐集せられたり。

日延日住の祖書蒐集

第十章　中山・身延及隆・興兩門の狀勢

中山門流の發展

日尊上人の門に英才輩出し、嫡弟日運上人は第五世を續ぎ、日堯上人は本行院を開き、埴谷妙宣寺の妙親院日英上人は法宣院に住し、又西海惣導師職となり、明德四年鎌倉に妙隆寺を開き、應永年間下總小菅妙福寺・飯塚妙朝寺・大寺長福寺・關宿實相寺等を創立し、今島田唱行寺五世日正上人は天台より改宗し、西海惣導師職に擧げられ、肥前佐賀に觀照院を開き、法服論の時は日英上人と共に數、身延と折衝の任に當る、日正上人の俗弟青蓮房日中上人は「當代比類なき學匠」と稱せられ、「法華問答正義抄」に十八帖の科文を付し、三

妙親院日英

青蓮房日中

【繪解】中山法宣院所藏日英上人が其資日國日親に與へし消息

十餘帖の類文を著す、のち上洛弘法して妙行寺を開く、妙覺寺正行院日源上人はその門より出づ。

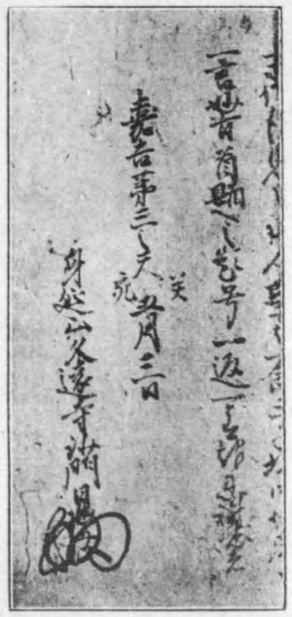
應永二十九年日薩上人在職僅に數月にして遷化し、日有上人七世となる。久遠成院日親上人は日英上人の門より出でて一宗の惰眠を覺醒し。日祝上人は日親上人の法兄日國上人の資にして諸山の不和を調停す。日中上人と共に皆な關西に向つて教線を展開せり。

關西宣教

身延門流と永享法難

日億上人を經て成就院日學上人嗣ぐ、學才兼備の譽あり、京都に學養寺を開きて門流の法陣となす、門下に玉泉房日傳・一乘房日出あり、日傳上人は數、上洛し室町幕府を諫曉して

日傳の諫曉



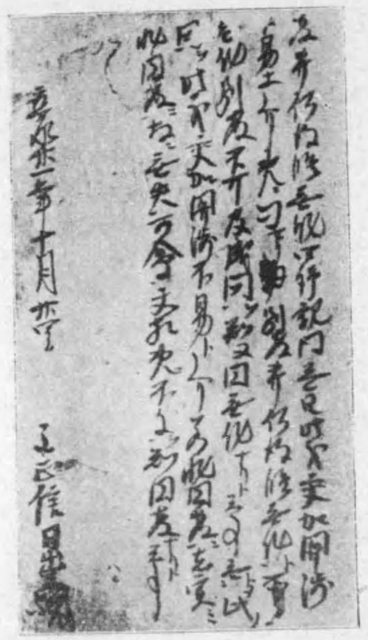
【繪解】甲州身延山所藏日學上人筆肝心問答要集の末文

一乘房日出

はもと天台の僧にして上野國上稲葉檀林に學び、正信法印と稱し、のち武州仙波檀林の能化となりしが、日學上人の教化に伏して改宗す、應永二十八年伊豆に行化し、三島の眞言僧を説破して遂に本覺寺を領す。次で甲州東八代に布教し、眞言僧了宥法印を改宗せしめて光福寺を得。

永享法難

又數〻鎌倉に出でゝ法皷を擊つ、永享八年五月上人は鎌倉妙隆寺日親上人の資、大進律師日妙上人と共に塔ノ辻天台宗金剛寶戒寺心海と法論して墮負せしむ。心海之を怨み、管領持氏に讒す、持氏乃ち日蓮義禁名あり、永享四年將軍義教が持氏の動靜を窺はんとして富士に狩するや、清見ヶ關に直訴し、翌年また上洛追訴せりと云ふ。日出上人



【繪解】甲州身延山所藏日出上人寫本の末尾

本覺寺

心なる傳道に感じ、小町夷堂の地を寄す、上人就て本覺寺を建つ。

妙蓮寺日忠

日隆門下の諸師　日隆上人の門下に日信・日登・日與・日典・日學・日忠上人等あり、日信上人は本能寺、日登上人は尼ヶ崎本興寺を續ぐ。常住院日學上人はもと三井園城寺の學頭たりしが日隆上人の教化に伏して本能寺にあり。十乘房日忠上人は其俗弟にして、のち常住院の號を襲ふ、妙蓮寺の學室道輪寺を構えて衆徒の爲に開講す。日學上人は斷の命を發せしかば、我宗諸門流の僧俗先を爭ふて求刑するもの六十餘人、持氏其處置に惑ひ、遽かに禁令を解きて歸らしむ、時に六月二日、稱して「永享法難」と云ふ。持氏日出上人の熱

【繪解】京都妙蓮寺所藏日忠上人本尊の自署花押

本能妙蓮兩寺和解す

永享元年已來本能・妙蓮兩寺の不和を解かんと欲し、文正元年「兩門和合決」を書して其意を述べ、終に文明十五年妙蓮寺は、存・道・隆三師を其歴代に列する事を承認して本能寺と和解し、日忠上人擧げられて妙蓮寺に住す。其著に「似玉抄」(二卷、又云御直談抄)「本尊抄見聞」「當體抄見聞」「修行抄見聞」等あり。金剛院日與上人は本興寺六世となる、關白一條兼良の爲に要品を講じ、又「法華經抄」(四卷)「要藏開示錄」等の著者として世に知らる。

日典の改宗と布教

種子島の開教　定源院日典上人は種子島の產、もと律僧にして義賛房林應と稱し南都遊學の歸途、日隆上人に歸伏改宗す、曾て淡路妙經寺日良上人と師資の契を結び、種子・屋久・永良部三島開教の事を約せしが、寛正二年種子島に歸り、强折の化導を布く事三個年、領主及

日典の殉教

島民之を怨嫉し、遂に上人を井底に投じ、石埋となして殺害す、歳六十三。同五年其資日良上人舊約を履行し、種子島に趣き、茶道の宗匠として領主に親近し、終に改宗せしむ。後ち本能寺七世金剛院日增上人渡島するに及び、領主乃ち西表に本源寺を創し、次で三島の住民に令して悉く歸正せしむ。

種子屋久永良部三島の圖

大石寺日有

日興門流の狀況　永享・文明の間に大石寺に日有上人、重須本門寺に日淨上人、房州保田妙本寺に日安上人等あり。日有上人は永享四年上洛天奏し、本能寺日隆上人に會して其著「四帖抄」の贈呈を受けたりと云ふ。一派の義學に通じ、學徒其門に集りしもの多し、「化儀抄」百二

大石寺對重須小泉の諍

十一個條」は一門の儀相を規定せるものにして、白袈裟・薄墨素絹を定服とせしは上人の時にありと傳へらる。上人常に大石寺は本堂正意、重須本門寺は御影堂正意、大石寺は根本道場、本門寺は其隱栖所なりとの説をなせしかば、文明十四年重須日淨上人は保田の日安上人・信乘房日遵上人及び重須の檀越井出妙行等と大に之を難詰し、次で重須本門寺・小泉久遠寺兩寺一統の契約を結べり。保田十一世日要上人は碩學の譽あり、「御書見聞」を著す。

第十一章　鐺冠日親上人

對外傳道

上人は應永三十二年、西海惣導師職に撰ばる、僅かに歳十九。肥前唐津に法蓮寺、博多に法性寺等を開き、攝津梶折梶原天台宗金仙寺を改宗せしめて一乘寺と號す。途を山陰に採るや、出雲楯縫の地頭、多根幸賴を教化し、多久村禪宗光徧寺を改めて大慶寺となす。永

本法寺創立

享法難は恰も上人が京都綾小路東洞院に本法寺を創せし年にあり き。永享九年十月鎌倉にありては持氏、心海を導師として部下戰死者の爲に法會を修し、萬部經を讀ましめんとす、本宗諸門流亦一千部を配當せらる、上人乃ち他宗同座の讀經は宗禁なる事を管領家に陳述し、什門の本興寺心光房日正上人亦此旨を申べて、別修せり。然るに六條門流の妙法寺獨り同座讀經せしかば鎌倉の本宗僧俗大に之を憤慨せりと云ふ。次で上人上洛し、同十一年「立正治國論」を義教に呈して極諫す、翌年再び死を決して諫めんとし復た「治國論」を再書しつゝあり

【繪解】京都本法寺所藏本尊中の日親上人自署花押

義教を極諫す

義教の迫害

しが、事義教に泄れ、幕府、上人を捕えて獄に投じ、數〻火焔・凍氷を以て之を責め、强ゆるに稱名念佛を以てせしも上人反つて題目を高唱せしかば、舌を切り、火鐺を冠せしめたるも神色自若たり「鐺冠日親」の名洛中に傳はる。本阿彌光悦の祖清信、上人の開導によりて本法寺檀越と

鐺冠の法厄

東條法難

なりしは此時に在り。文安元年泉州堺より西して播州東條村を過ぎり、他宗徒の爲に刀杖の難を蒙り、弟子二人爲に殉難す。長享元年狩野叡昌の女、理哲の外護を得て本法寺を三條萬里小路に再建して伽藍を整備せり。「折伏正義抄」「埴谷抄」「傳燈抄」「本法寺縁起」等の著は史家の珍重する所なり。

本法寺再建

宗内革新と諸門流干係

上人の不受不施は極めて峻烈なり、謂く不信者の施物を受くるは謗法なる事、理在絶言なり。然るに施者の王侯なると臣庶なるとによりて、信謗兩施を分つと云ふが如きは、道理の許さゞる所。況や當時の諸山は顯榮・門閥よりの施與によりて寺門の面目を施すものとなすに至りては斷じて許すべからずと云ふにあり。

日親の不受不施論

比企谷の謗法を改悔せしむ

永享二年中山の檀越曾谷滿繁の弟にして、平賀日饒上人の資なる圓林房日福上人をして、比企谷が鎌倉管領家の祈願所たる事を日行上人に停廢せしめ、同五年には鎌倉妙法寺日肝上人の謗施受用を論詰し、又中山日有上人の謗法を諫めて遂に破門せらる。濱法華寺日傳上人とは數、叡山戒壇の踏不を論じ。什門本興寺日正上人と木像造立を諍ひ、終に什門一派木像造立の起源を作らしめ。京都妙本寺衆徒と不受不施を論じ、意氣軒昂、侃諤の辯鋒、敢て當るものなく。漸く軟弱に傾きつゝありし宗風に、一大警策を與へたり。

中山日有に破門せらる

宗内を覺醒す

第十二章　一致諸門流及什門の人物

諸山競ふて布教講學に勵む

一致諸門流の人物

聖祖强折の化風を傳へし諸師が、不惜身命の傳道は著々其功績を收め、諸山勢力の增大すると俱に、各門流相競ふて門子・學徒の育英に意を注ぎしかば、共に傑出せる人物を出せり。

諸門流の人物

四條門流には本覺寺眞如院日住、妙覺寺正行院日源、濱門流には法華寺唯本院日傳、身延の行學院日朝、平賀の妙高院日意、六條門流には鎌

倉妙法寺日澄上人等あり。少しく遅れて中山より日祝上人。此外比企ヶ谷の日調、中山の日院、六條の日圓、四條の日具上人等の出づるありて愈〻宗門の盛運を齎らせり。

日傳の活動

日住上人は本覺寺祖日延上人の資、師意を紹ぎて、諸山調停・祖文蒐集を以て知られ。日源上人は妙行寺日中上人に就學し、「講演法華義抄」(二十三卷)「御書音義」(二卷)「四宗要文」等の著あり。日傳上人は當時京都に本迹勝劣の論盛なるを聞き、康正二年上洛し、妙滿寺・本能寺等を歴訪して和融せんと欲せしも就らず、妙本寺具能上人は寺寶を送りて其法勞を慰す、上人が妙本寺を除歴せられしは之が爲なりと傳ふ。其著「妙法弘行本迹問答抄」は濱一流の本迹論なり。

平賀の日意

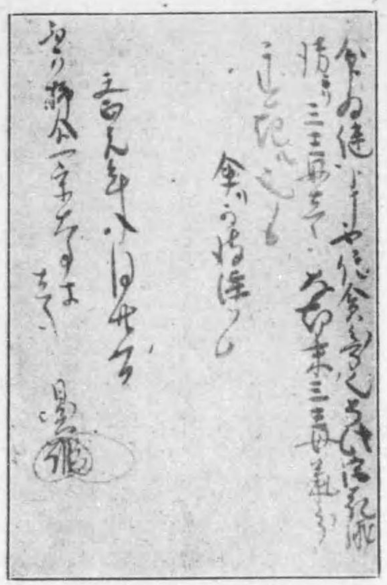
平賀の日意上人は身延日朝上人と武州仙波檀林に同學の友たり、圓林房日福上人の資にして、芝二本榎承教寺祖日圓上人と法の兄弟たり、文安三年平賀本土寺に住し、總の上下に行化し、印旛郡和田妙勝寺を開き、香取郡澤村眞淨寺を改宗せしめ、上總小西の郷主原行朝の歸依を受け、長祿二年其居館を正法寺となす、文明二年印旛郡彌富の城主原景廣の外護により長福寺を開きて之に居る、同四年京都立本寺學僧日慈・駿州村松海上寺僧日圓・池田の僧日精等の爲に本尊抄を講ず。

小西正法寺を開く

長福寺に學徒を教ゆ

日堯の雄圖

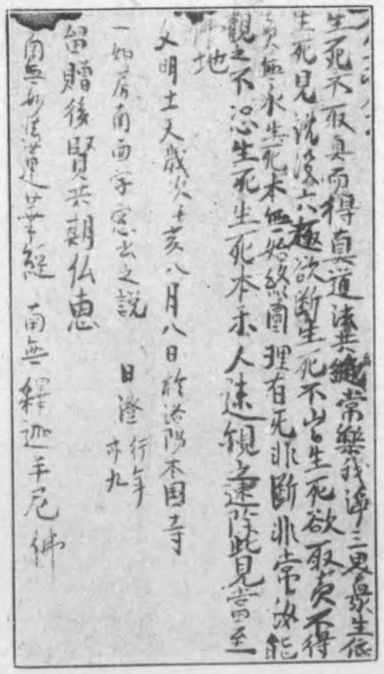
六條及び日澄上人　本國寺成就院日圓上人の門下英才あり、嫡弟日堯上人は豫て日持上人の行跡を敬慕し、入唐弘教を志し、明應七年職を日了上人に讓り、尼ヶ崎長遠寺に其準備をなしつゝありしが不幸にして遷化す。天台の僧教傳は日圓上人に論伏せられ改宗して粟田口に正法寺を開き。一如房日澄上人字は啓運、圓明院と號せり、學識衆に秀で



【繪解】京都本國寺所藏日圓上人筆安國論見聞の奥書

啓運日澄

台當の學に通ず、鎌倉妙法寺に住して浮華を好まず、其著「注畫讃」五卷は師日圓上人の報恩に擬せし所。文明十一年小田原の遊化に際し、伊豆三島國分寺學融・學乘の師弟共に上人に歸伏し、圓明寺を創して捧ぐ、上人又別に啓運寺を開く、延德二年信者の爲に法華經を講ず、「法華啓運鈔」五十五卷は文龜三年その講案を整束せしものなり。什門鎌倉妙國寺慶陽院日悅上人其講說を聞き本迹勝劣の義を以て難ずるや、上人乃ち「本迹決疑抄」二卷を著して之を反詰す、永正元年叡山の僧圓信「破日蓮義」を出し、京都本法寺日憲上人之と筆戰す、上人聞て「日出台隱記」を作つて之を扶く。同三年伊豆韮山郷主江川英盛、上人の道譽を聞き、爲に本立寺を創して開山とす、「助顯唱導文集」七卷「本迹決要抄」三卷「神道祕決」四卷「嘉會宗義抄」等を著す。



【繪解】稻田海素師所藏日澄上人引導文の末尾

日悅と本迹を諍ふ

韮山本立寺を開く

日朝上人と身延

上人字は鏡澄、日出上人の資なり、初め仙波に學び後叉叡山に登り、京都に眞如院日住上人に就學し、諸宗の教義に通ず、享德三年甲州石和に弘通して門弟四人と共に杖木の難を受く、寛正三年日延上人の後を受けて身延に住す。文明六年久遠寺を今の地に移して諸堂宇の造營に努め、又鎌倉本覺寺に聖祖の舍利を分祠して「東身延」と稱す。富士下方瀧泉寺は元弘元年震災の爲に廢寺となりしが、明應年間其再興を志し、檀越岩越氏を勸めて駿河府

【繪解】甲州身延覺林房安置、明應四年五月備中法眼一條鷹丸が日朝上人五十八歳の時繪像を寫刻せしもの

久遠寺を移轉改築す

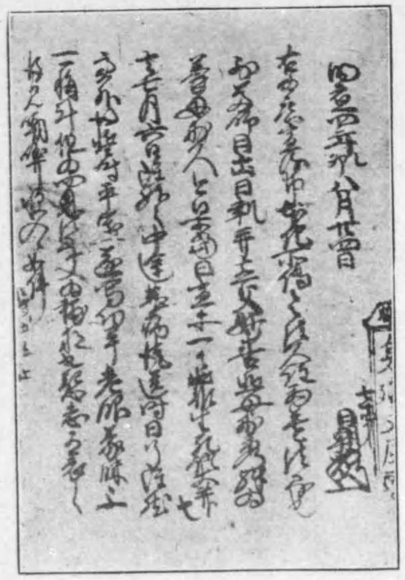
東身延

駿河感應寺

中に感應寺を創す。其他開創の寺院甚だ多し。又學に志厚く、衆徒をして日海上人の「三種教相見聞」を轉寫せしめたるは應仁元年にあり。されば上人の學譽を傳へ聞て負笈する者甚だ多く、日住上人は中山の學僧本成房日實上人の遺書及濱門流の祕書を持して中山より來り、日等上人は台東兩密の口決書類を蒐め、日聰上人は比企谷流の口傳書を持參し、日譽上人は富士門流・中山・茂原等の珍書を將來し、又もと叡山同學の友たりし圓教院日意上人來つて宗義を角し論破せられて改宗す。茲に於て上人は叡山の論議に倣ひ毎年三月二十八日の立正會、毎月三日及十三日等の聖日には必ず宗義の討論を行ふ事とせり、「立正會

各門流の祕書身延に集る

日意の改宗



【繪解】甲州身延山所藏日朝上人筆補施集の内勸發品第二十八の奥書

宗義の討論會を起す

著述

身延中興の三師

【繪解】身延山所藏永正十三年十月圓秀日實に與へし日意上人本尊の自署花押

西身延妙傳寺

問答」四十九卷、「三日講問答」百二十三卷、「例講問答」二十七卷等は上人自ら其應答評決を記錄せしものなり。長享年中片阿澤覺林坊に退き筆策に從事す、「補施集」百七十九卷、「法華朝演抄」三十六卷、「法華艸案抄」十二卷、「一代五時記」十八卷、「弘經用心記」二卷、「四宗要文」三卷、「元祖化導記」二卷等五百五十卷の多きに達せり。

上人非凡の精力を傾け各地の行化・寺院の開創・久遠寺の移轉・門下の育英及著述に盡し、法子日意・日傳兩師亦相續で其後を克くせしかば身延の教勢益〻隆盛となれり、故に日意・日傳兩師を合せて「身延中興の三師」と云ふ。十二世日意上人は文明年中、京都西洞院綾小路に妙傳寺を創し教祖の聖骸を分ちて「西身延」と稱し、次で伊勢桑名に顯本寺を開き、又先住地たる妙蓮寺を天台より改宗せしめて壽量寺と號せり。

什門と上總の七里法華

妙滿寺十世寂光院日遵上人は各地

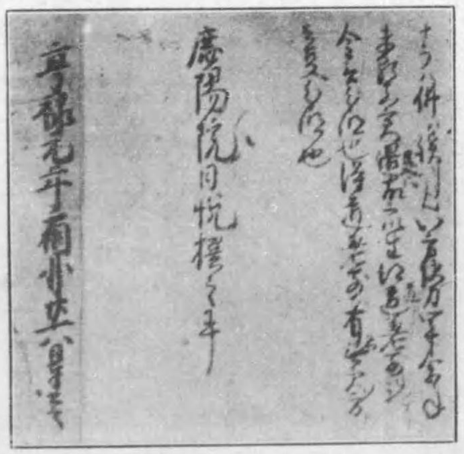
に遊化して他宗に當り、中正院日存上人は「本迹對論用意抄」三卷を著して諸門流に對し、慶陽院日悅上人は鎌倉にありて妙法寺日澄上人と本迹を諍ひ、其著「直説口作抄」は傳へられて身延に存す。圓頓房日泰上人は日遵上人の門より出で、心了院と號す、文明十年の頃上總に行化せんとして船中に酒井定隆

【繪解】身延山所藏日悅上人筆經中難問大事の奥書

【繪解】上總東金本漸寺所藏日泰上人が酒井小太郎に與へし消息

日泰の上總布教

酒井定隆の外護



を教化し、上總濱野に本行寺を開く、定隆はもと足利成氏に仕へしが、のち里見義成に賴りて東上總の大半を領し、長享元年土氣城主となるに及んで、其地に本壽寺を建てて日泰上人を

請し、又眞言宗極樂寺を改宗せしめて善勝寺と號せり。翌二年終に領内七里四方に令して三百餘個寺及其檀越を悉く改宗せしむ、後人「上總七里法華」と稱せり。

七里法華

第十三章　寛正盟約の前後

關東の諸山兩山一主の舊制に復す　身延中山の和睦

各門流の干係と狀勢　比企ヶ谷妙本寺は身延日億上人兼職せしが、比企ヶ谷の僧衆、其資日行上人を迎へ、三山兼職を廢して兩山一主の舊制に復せり、永享二年中山日有上人は日親上人が圓林房日福上人をして比企ヶ谷の管領祈願所たる事を停廢せしめたるを以て、日行上人と音信を開始するに至り、又院家安世院を身延に遣はし、法服を着せざる事を約して日學上人と和し。日院上人繼ぎて中山に主たるに及び、日學上人更に其法弟日延上人を中山及眞間に遣はし、先約を履行せん事を申入れしが、幾もなく、中山・眞間共に破約して法服を用ひ

中山方の破約

しかば、また互に相反目するに至れり。

京都の各門派

又京都にありても、本成寺日陣上人は本國寺より別立し。本國寺は足利氏の外護を恃み御讓狀に據りて一宗の正嫡と稱して數、四條妙本寺と諍ひ。妙本寺は、ほか叡山の壓迫と俱に立本寺・本能寺・妙蓮寺等の分立あり。而して本能寺は妙蓮寺と好からず、立本寺は本能寺と不和なり。其間日親上人は中山より來り不受謗施を唱へて數、妙本寺・本國寺等と論諍し、一山一寺分裂割據して確執益、甚だし。されば身延・六條の兩門は年と俱に發展せしも、中山・比企ヶ谷・四條等はまた往年の隆盛を見ざりき。

一山一寺分裂割據す

宗學の開放と一致勝劣　本宗の中心勢力が京都に移ると俱に宗學も身延・中山等と相對して京都に起れり。而して一時諸門流間に封鎖せられし宗學も、前期に於ける身延日叡上人の革新、日什上人の獨立等によりて稍や開放の機運を促がし。永享の頃より一部學者

宗學京都に起る

の間に漸く交渉を生ずるに至れり。妙覺寺日延上人は身延に御書を寫し、其資日住上人亦數〻關東諸山に祖文を蒐むるあり。中山の學匠日中上人は所謂「關東がゝり」の宗學を京都に齎らし、妙覺寺日源上人之を禀けて、日護・日亨上人及立本寺日禘・妙願寺日能・弘經寺日健上人等に傳へ。又日住上人は「上がゝり」の學説を身延日朝上人及日健・日會上人等に授け。文明年間には立本寺學僧日慈上人は關東に遊歴し、下總彌富に日意上人、身延に日朝上人等より宗學を承けたり。

關東がゝり

上がゝり

宗學の興起と一致勝劣

斯の如き東西宗學の開放交渉は漸次諸山の隔壁を崩潰して本迹一致説に據れる諸門流間の連絡團結をなさしめ、其と俱に本勝迹劣を力説する各門流に對して漸く阻隔を生じ、所謂一致・勝劣兩派の色彩一層鮮明となれり。

本覺寺日住の直訴

叡山の威嚇

寛正の盟約

寛正六年十月將軍義政、北山鹿苑院に詣づ、本覺寺日住上人乃ち「妙法治世集」を呈して直訴す、事叡山に泄れ、横川楞嚴院の衆徒、機に乘じ、洛中本宗寺院破却の旨を十九個寺に報ず、茲に於て一致方の諸山及勝劣方上行・住本兩寺等凡そ二十個寺、本覺寺に會して其善後策を講じ。先づ各自に其返牒を作ると俱に山門奉行布施貞基に就て破却の實否を糺さんとす、時に本宗の信者飯尾之種、義政に理非を辯明し、且つ山門奉行をして山徒の不法を諭し事の虚實を糺問せしむ、然るに三塔の大衆等、曾て之を知らずと答へ、僅かに事なきを得たり。

飯尾之種の援護

然れども一宗の諸山孤立せるの互に不利なるを覺り、且つ此近因をなせし日住上人は其師日延上人が嘗て身延・中山の不和を解かんと欲せし宿志を想ひ、又飯尾之種・布施貞基等の勸により、遂に一宗の和睦を提議す、當時日親上人と中山日院上人との間を調停せんとして上洛せし月藏房日祝上人・立本寺學頭法性院・妙蓮寺學頭佛性院日慶上人・六條門徒明靜房等大に之に贊同して發起者となり。翌七年二月、

一宗和睦の提議

盟約の條項

盟約の嚆矢

本迹は一體の事、誘法の寺社に參詣すべからざる事、强折伏を以て正意となす事等の盟約を締結せり、稱して「寛正の盟約」と云ふ。是れ實に一致・勝劣兩門の間に結ばれし盟約の嚆矢なり。又妙覺寺・立本寺が妙本寺と共に三具足山と稱して一致門流に歸せしも此時にありしが如し。

山徒の嗷訴

關東諸山の調停

かくて横暴なる山徒は鎭壓せられ本宗洛中諸寺の團結漸く堅く、教勢益〻振ひしかば、山徒之を嫉み。文明元年七月再び山門奉行に嗷訴し、また追訴して本宗の處置を迫りしが、飯尾之種の斡旋によりて落着せり。茲に於て益〻日住上人は關東諸山の不和を解き、擧宗一致以て他に對するの必要を思ひ、終に文明三年關東に下り、身延・中山・比企ヶ谷等の間に調停の勞を執る。身延日朝上人は曾て日住上人より法義の傳承を受けしに免じてその調停を一任せり。同六年重ねて日住上人は關東に下り、身延・中山・兩山等の間に調停全く

日住の下關調停

關東諸山の和親就る

就れりと云ふ。

身延六條の法嫡諍

調停已後の都鄙諸門流

文明十四年六月、六條の信者は法嫡の事より端なくも身延信者と口論をなし、轉じて兩寺の諍となり、尾州清洲城に各〻代僧を出して法嫡の正閏を論じ、六條方は御讓狀を左證として身延方を墮負せしめ、又身延は中山の依然法服を用ふるを知り、和義再び破れんとせしかば、同十七年日住上人八十歳の老軀を以て三度び關東に下つて其調停を計りしが、終にまた元の如くならざりき。此間本國寺は身延を挫きし勢に乘じ正嫡の事より四條門流の諸寺と不和を生じ、妙蓮寺は本能寺と和して日隆門流に歸し。降つて明應五年妙覺寺・立本寺は妙蓮寺・本能寺・妙滿寺等と本迹を諍ひ、盟約全く破れたり。

日住三度び下關し調停に力む

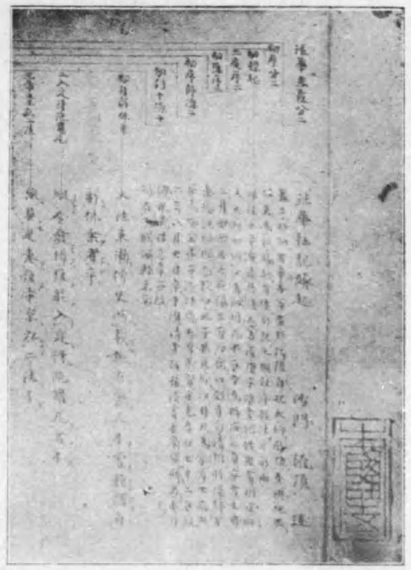
四條門流の諸寺

妙本寺の移轉

妙本寺日具上人

瞻山日具上人は月明上人の門人にして具能上人の除歴せられし後を受けて妙本寺に住す。文明五年妙本寺を五

條大宮より三條西洞院に移して伽藍を修備す。明應六年偶〻吉田社の神職卜部兼倶、本宗の番神を勸請する事を難ずるや。當住日芳上人の請により、其答書を作りて兼倶に復す、之によりて上人博學の聞え洛中に傳はり、翌七年遂に僧正の官に任ぜらる、其著「澗亭函底抄」三卷「義山致谷抄」二卷は妙本寺一門深祕の法義を筆述せしものなり。



【繪解】京都本隆寺所藏日眞上人筆玄義科註の卷頭

日眞上人の獨立　日具上人の門下に大經房日眞上人あり、中山中納言藤原親通の子にして但馬城崎に生る。初め妙經寺日全上人の資なり。大林房日鎭上人等と妙本寺にありて四條流の祕書を研鑽し數〻本勝迹劣の說を唱へて寺衆と諍ひしが。長享二年泉乘房日儼能乘房日佳城所房日恕等と一大諍論を惹起す。當時日具上人は日芳上人に付法して備中野山境智寺に隱栖せしが、其裁決を日具上人に求めしかば、上人乃ち日眞・日鎭上人等を諭す所ありしも肯かず。寺衆三十餘人と共に妙本寺を去りて本能寺に移り、次で六角西洞院に本隆寺を創し、日隆門流に屬せしが、のち本能寺日增上人と護持此經の文釋を諍ふ事三個年、大永二年終に本能寺と絶交して一派を創唱せり。眞門流、又は本隆寺派と稱す、今の本妙法華宗是なり。

日眞の分出

本隆寺の創立

一派獨立

第十四章　宗門の隆盛と天文の法亂

教育の進渉　從來本宗の宗學は貫首若くは學頭によりて各自の大衆に授くるに止まりしが、學徒教育の事業一段の進歩を來たし永正年間、立本寺日禘・妙願寺日能・弘經寺日健上人等相計りて妙覺寺・立本寺・弘經寺等に諸寺の僧衆を集め、輪次に祖書を講じたり、是を「永

永正の輪講

松崎檀林

正の輪講」と云ふ。

此と時を同ふして下總松崎顯實寺常寂院日耀上人は松崎檀林を開きて台當の學を講ず。上人はもと天台の學匠なりしが、日院上人の頃、中山に投じて改宗せりと云ふ、御書抄（二十五卷）はのち如上の禘・能・健・耀四上人の講錄を集めたるものなり。

松永久秀、太田三好家等の歸向

本國寺の隆昌

六條の日了上人は松永久秀、扇谷上杉の臣太田持資等の歸依あり、又三好一家の歸向淺からずして山勢愈榮ゆ、十三世日遵上人は持資の子にして資康の弟なり、永正十一年資康の子資高は輪藏を本國寺に建造し、長祿元年持資が武州豐島城内に建てし小堂を改築して法恩寺と號し父法恩齋資康の菩提に資せり。

【繪解】東京法恩寺安置太田持資の像

法恩寺

新興の頂妙寺

寛正の盟約に斡旋せし月藏房日祝上人は文明五年京都に弘通所を設け、土御

細川勝益の外護

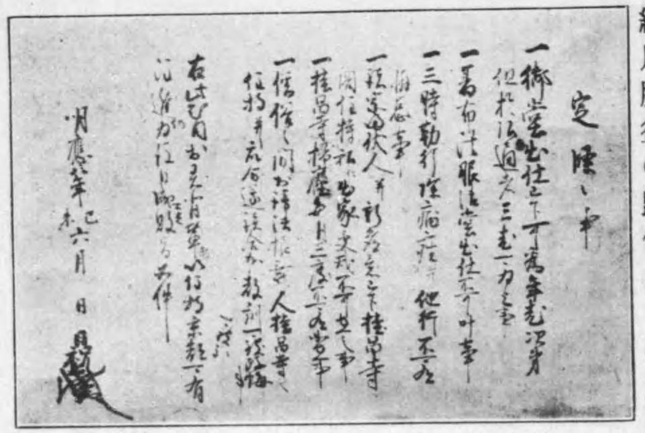
頂妙寺建立

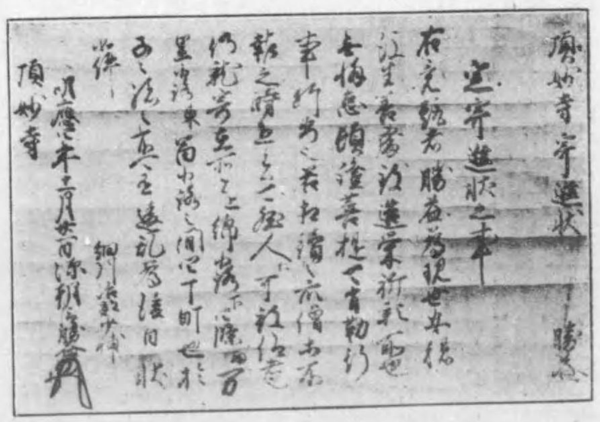
【繪解】京都頂妙寺所藏細川勝益の寄進狀

【繪解】頂妙寺所藏日祝上人筆の條目（上）

頂妙寺の移轉擴張

門帝は弘通の綸旨を賜ひ、又土佐の太守細川勝益の歸依あり、明應四年四條富小路に頂妙寺を新建し、勝益の主足利義高歸依して祈願所となす。文龜元年勝益の任國土佐國田村に妙國・細勝の兩寺を開き、永正六年將軍義植の命によりて頂妙寺を新町通長者町に再建





京都宗門の隆盛と叡山の迫害加重

【繪解】京都本圓寺所藏日如上人の消息

規約の條項

して規模を擴大せり。

大永の規約　京都の本宗は年と倶に隆盛に趣き帝都の大半既に本宗に歸し、勢ひ益〻盛んとなるに從ひ叡山徒の迫害は愈〻加重し來れり。茲に於て寛正の盟約は破れたりと雖も再び團結して之に對抗するの必要に迫られ、大永元年八月まづ一致・勝劣兩派の通規たる不受謗施の契約を結んで分裂を纏め。尋で常に本國寺が誇唱する法水嫡流の主張を廣布の時まで保留する事となし。同二年十二月比企ヶ谷妙本寺より蓮成院日如上人の臨席を請ひ、四條・六條兩門流、致劣兩派諸寺の間に、比企ヶ谷妙本寺は日朗上人の遺跡たるを以て法理一味の上は眞俗共に往詣

細川高國の外護

三度び頂妙寺を改築す

妙顯寺の舊號を用ふ

本願寺を討ちて之に勝つ

山徒法華宗號盗用の訴をなす

すべき事を規約し、以て其團結を再新せり。之を「大永の規約」と稱す。

天文の法亂　新たに起りし頂妙寺は管領細川高國の外護厚く、大永二年二世日言上人は權大僧都に任ぜられ、次で義晴の命を請ふて、高倉通椹木町に地を得、三たび高國頂妙寺を改築し、伽藍の結構更に舊觀に倍せり。本國寺亦三好家の尊崇甚だ高く。加ふるに妙本寺は曾て叡山の干渉によりて妙顯寺の號を稱し得ざりしが、日芳上人舊號に復して妙顯寺の名を用ひしかば、山徒の怨嫉愈〻高まれり。此時に當り、細川晴元、一向門徒と隙あり。天文元年本宗徒は晴元の軍に加はり、近江の佐々木定頼及叡山僧兵と共に山科本願寺を襲撃して之に勝ち、其勢ひ日に加はる。山徒之を喜ばず、機を得て本宗を討たんと欲す。同四年七月山徒重ねて法華宗號盗用の訴を義晴に出し、遂に兩宗幕府に對決するに至る。乃ち妙顯寺日廣上人、門人實成房をして勅願の綸旨を讀ましめて之に勝てり。然るに翌五年三月偶〻上總茂原妙光

松本久吉華王房を難詰す

寺の檀越松本久吉、叡山西塔華王房の法談を難詰す。茲に於て山徒、義晴に上書し、日蓮宗徒追放・寺院破却の裁許を請ひ、援を其檀越佐々木定頼等に求め、七月二十五日大擧して我宗徒を襲ひ、戰ひ三晝夜に亘る。全都二十一個本山、其他大小堂塔悉く火を放ちて之を燒く、妙覺寺日兆・上人・卜部兼永等洛中宗徒の大半此難に殉ず、殘徒僅かに身を以て泉州堺に遁がる、是を「天文の法亂」と云ふ。

【繪解】天文法亂山徒本宗徒兩軍對陣の圖

山徒大擧して本宗徒を擊つ

第十五章　法亂後の宗門狀勢

亂後の京都宗門

かくて我宗徒は天文八年京都に還住せんと欲せしも叡山徒これを許さず、同十六年六月、宗徒に對する法談の外は、他宗徒に布教をなさゞる事を條件として幕府に上書し、又叡山に對しては佐々木定頼を介して毎年日吉祭禮の料金百貫文を納むる事を約し辛ふじて還住の承認を得たり。

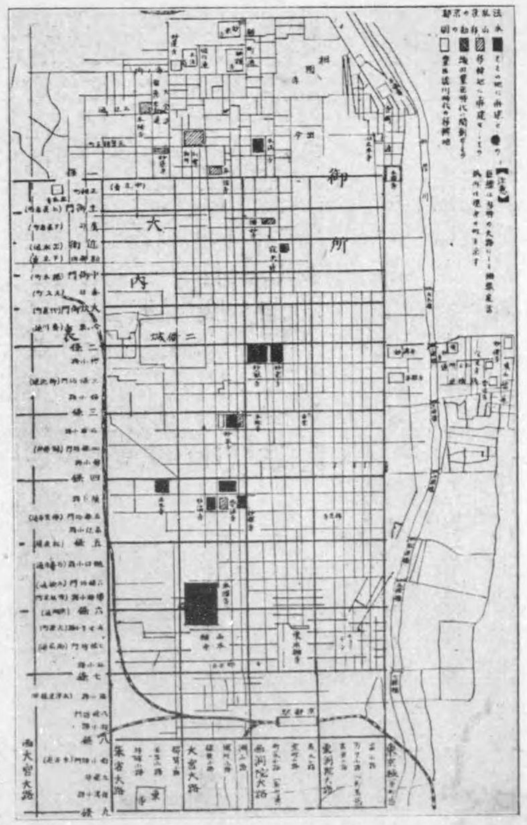
山徒の許諾を得て京都に還る

諸寺の再建

茲に於て妙顯寺日廣・本國寺日助・頂妙寺日言・立本寺日經・本禪寺日覺・上人等は夫、舊地に伽藍を再建し、本法寺は一條戻橋に・妙覺寺は押小路衣棚に・本能寺日承上人は四條西洞院に・本隆寺は西陣に・妙蓮寺は大宮元誓願寺町等に地を更えて造營せり、又上行院・住本寺は併合して新たに要法寺と稱し、綾小路堀川に建てられ、弘經寺・大妙寺は妙顯寺内に、寶國寺は本國寺内、學養寺は妙傳寺内に攝屬せられて二十一

十六箇本山に減ず

【繪解】法亂後に於ける京都本山移動の圖



しを以て、其影響は實に全國の本宗に與へし一大打擊なりき、されば此によりて宗勢全く一頓挫を來たせり、是より各門流の英才相競ふて伽藍の再建・教育の復興を計りて宗勢の挽回に努めたり。

京都勝劣門流の人物　日尊門流には保田の日我上人と東西相

要法寺日辰

【繪解】京都要法寺安置日辰上人の像

本隆寺日諦

本成寺日覺

應じて廣藏院日辰上人あり、住本寺日在上人の資にして學德衆に秀で台當の學に通ず、天文十四年北野の經藏に入り、又數〻富士諸山に史蹟を探り重須・西山兩本門寺の和義を計る、日在上人を扶け上行・住本の兩寺を合して要法寺となす。其著「二論義得意抄六卷」「法華訓蒙抄三卷」「造佛論義」「讀誦論議」「御書見聞」「負薪記」等あり。本隆寺には日諦上人あり、日眞上人の嫡弟にして、其著「涌出品講談三卷」「自我偈講談五卷」は學者の珍重する所なり。其資日映上人は天文十二年九月、日陣門家と法義相等き故を以て本禪寺日覺上人と通用の契約を結べり。又本成寺には日覺上人あり

て本禪寺を再興す。後奈良帝の御歸依を受け、紫宸殿の高座に法華經を講じ、大僧正に任官し、菩提心院の號を賜ふ。「發心共轍」（十一卷）、「愚格集」（三卷）等を著す。本能寺には日承上人あり、伏見宮貞敦親王の第六子にして本能寺を再建し、結構莊麗を極め、三十二坊の支院ありしと云ふ。後年明智の反逆に際し兵燹に罹りしは是なり。是より本能寺は本國寺と共に寺運最も榮ゆ。

本能寺日承

法亂前後の關東各門流

濱門流

資日弘上人を迎ふ、上人は上杉憲實の孫なり、幼少なりしかば大坊日忍上人代務補佐する事四十餘年、天文七年北條氏康、上杉氏を鎌倉に攻む、よりて上人は其資にして憲政の子なる日南上人を具して難を越後國村田妙法寺に避く、法華寺兵燹に罹り、のち大坊の日近上人其舊地に實相寺を建つ。身延は寶聚院日傳上人、日朝上人已來企

身延門流

【繪解】身延山所藏天文十一年初秋法祐房日堪に與へし日傳上人本尊の自署花押

畫せられし祖師堂を落成し、又武田信虎の歸依により永正二年甲府に信立寺を開き、其子信玄亦外護の力を加ふ。善學院日鏡上人に至り天文十九年日興門流甲州東漸寺教運房日感、上人の學德に伏し、寺と共に改派せり。弘治二年西谷に退き寺僧の教養に其餘世を送れり。後世の西谷檀林是に濫觴す。日叙・日整上人を經て慈雲院日新上人に至る。中山は日覩上人を經て日侃上人に至り、天文二十年若宮の妙蓮山法華寺を正中山本妙寺に併合し、正中山本妙法華經寺と改ため、法華寺の跡を奥之院とし、又聖祖より傳承し來れる祈禱修法は代々の主職、唯授一人と定められしが、深信の師には百日修行の上、之を相傳する事とせり。

中山門流

【繪解】下總中村日本寺所藏大永七年十二月行木の日源に授けし日侃上人本尊の自署花押祈禱修法の相傳

日興門流は、大石寺日鎭上人、重須本門寺の號は本門戒壇建立の後に用ふべし、未前に用ふるは門祖の本意ならずと主張せしか

日興門流

大石寺對重須小泉の諍

保田妙本寺日我

ば永正十二年本門寺日國上人は小泉久遠寺日繼上人と共に領主今川氏親の裁決を請ふ、氏親本門寺の號を公認する事によりて落着せり。當時保田妙本寺日要上人の資に日我上人あり、要法寺日辰上人と共に日目上人系統中の雙璧と稱せらる、然れども其學説稍や一派宗義の正準を失するの譏あり。偶、本行房日耀上人、重須に住せんとするや、大石寺及西山本門寺の衆徒、上人を斥けんとせしかば、日我上人重須・小泉兩寺一統の先約を守り、日耀上人を扶けて之に住せしめ、更に重須は御影堂正意、小泉は本堂正意、能所一統の契約を結べり。かくて永祿十一年信玄、

【繪解】堀慈琳師所藏日我上人筆寫本の奥書

重須御影堂小泉本堂の契約

今川氏を駿州に擊つや重須の日出上人をして戰捷を祈らしむ、事今川氏に泄れ、上人爲に獄に投ぜらる、此時に當り日我上人の資日義上人、重須僧衆の請に任せ、自ら名を日殿と改めて之に住せしかば、日我上人其不法を怒り、重須・小泉の和親破れんとす、元龜三年寂仙房日因上人の仲裁により、日殿上人誓狀を小泉に入れて和す。

本國寺對勝劣門流の諍

第十六章　永祿前後の宗門　佐渡の教勢

永祿の規約　永祿三年本國寺釋迦堂の再建落成式を行ふや、本禪寺を始として、洛中諸門流の間に、三箇重寶の一なる本國寺立像釋尊は僞物、御讓狀贋作の説起りしかば、本國寺は之を以て寛正の盟約を破りて自讃毀他せるものとなして、幕府に訴へ、檀越松永久秀等を恃みて、諸門流と諍ひしが、終に同七年佐々木霜臺等の仲裁によりて和解し、八月二十日今村紀伊守は十六山の代表者を召集して、法華一

規約の條目

【繪解】京都本國寺所藏三好長慶の狀

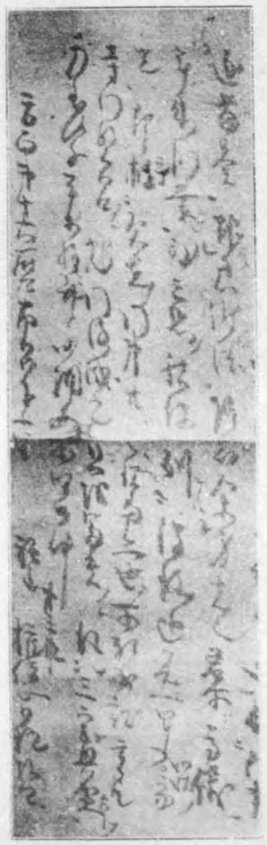
爲政者により締結せしめらる

部の肝心上行所傳の妙法に一味同心すべき事、自讃毀他停止の事、衆徒及び檀越を誘取すべからざる事等を約せしむ。之により妙顯寺は本能寺祖日隆上人の靈牌を造立し、本能寺日承上人この好意に對し、日像上人の遺跡たる妙顯寺に參詣すべきを誓へり。寛正・大永兩度の規約は單に僧侶の間に於て結ばれしが、茲に至り、爲政者によりて契約せしめらる、以後幕府は其規約を公認し、且つ本山會議を以て我宗自治の機關となさしむ。是を「永祿の規約」と云ふ。

堺の本宗と三光無師會　泉州堺は當時肥前の平戸、薩摩の坊ノ津と共に貿易港として大に繁えたり。天文法

油屋日珖

亂已後本宗此地に發展し、教學の中心、またこゝに移れり。頂源寺日沾上人の資に龍雲院（後改佛心院）日珖上人あり、堺の油屋常言の子、故に「油屋日珖」と云ふ。廣く諸宗の學に通じ、又才氣あり、弘治元年法叔日言上人に次で京都頂妙寺に住す。永祿規約の發議及其成立に與りて力ありしと云ふ。天文法亂の爲に荒廢せし宗學の復興を企て、永祿八年まづ同志正覺院日航・要行院日統上人等と頂源寺に御書を集めて校合す。日統上人が日健上人の講錄を取要して「統抄」（三卷）を作製せしは此時にあり。



【繪解】京都頂妙寺所藏日珖上人筆諷誦文草稿の末文

宗學の復興を企つ

かくて日珖上人は堺の妙國寺を創し、上人に歸伏改宗せし叡山の學

三光無師會

僧、山光院日詮・常光院日諦上人等と計り。永祿十一年妙國寺の傍に講堂を設け、三師輪次に主伴となりて台當の學を講究せり。是を「三光無師會」と云ふ。舜孝・尊秀・一如院日重上人等その聽徒たり。「文句無師」（二十五卷）は日諦上人の門人日嚴上人の聽講錄なり。

一ノ谷妙照寺

【繪解】妙照寺の景、中央の最も高き草葺の堂は聖祖御在謫の跡に建てしものと云ふ

佐渡の教勢　一ノ谷妙照寺は聖祖、始顯の曼荼羅及本尊抄を書し給ひし靈跡にして、文永年中近藤清久、一宇を創し建治元年聖祖に請ひ、妙照寺の號を得て法燈相傳へしが、明應九年偶〻回祿し、爾後二十六年開殆ど廢絶の姿なりしが、大永五年駿州重須本門寺日國上人渡島し、聖跡の衰頽を嘆き、緣を募りて終に再建し、其十二世に主たり。

河原田妙經寺

河原田妙經寺は文永九年聖祖の檀越中興信重法華堂を創せしに始まる、幾もなく中絶せしが應永三年相川の人にして當時鎌倉にありし圓妙院日清上人、島に歸り、信重四代の裔、勝重を說き、再興して妙經寺と號せり。寛正三年和泉鄉に移轉改築せしが文明四年燒失し、天文の初年能登の人日進上人之が再建を企て、池上の佛壽院日現上人の援助を得て京・堺の間に勸化し、弘治元年終に今の地に移建せり。

塚原三昧堂

塚原は一ノ谷と共に聖祖留錫の地なりしが、僅に一小草堂を存せしのみ、天文二十一年京都妙覺寺日護上人の門人大泉房日成上人來りて三昧堂を改築し、更に祖師堂を創建して其面目を一新せり。

第三期　織田・豊臣氏時代

第十七章　信長時代の宗門

信長の宗教政策

信長と本宗　信長は一向一揆によりて宗教團體の強固なる團結力ある事を知り、且つ海外文明の輸入せん事を望み、私かに耶蘇教によりて漸次人心を收攬統一し、其教徒を利用して將來爲す事あらんと欲し、茲に新來の異教を外護して佛教を排擊せり。殊に本宗は曾て信長が叡山を擊つに方り、其援助を我宗徒に求めたるを拒絶して、信長の怨を買へり。されば、我宗徒は互に輕舉妄動を誡め、只專信長の忌非・激怒を避けん事に留意し、遂に天正三年京都十六山の代表者相議し、輕卒なる法論を停止する事、止むを得ざる時は諸寺の承認を得べき事、宗論の時、問答者は諸寺の推薦による事、法論に要する經費は

我宗信長の怨を買ふ

天正の盟約

宗論の動機

直接關係者と諸寺との折半負擔たるべき事等を約せり。是を「天正の盟約」と云ふ。

安土宗論　信長豫て我宗を怨みしが、天正七年上野國新田淨土宗最惡寺靈譽玉念近州安土正福寺に宣教して我宗を難ずるや、本宗の信者建部紹智・大脇傳介、法席に之を詰責す、靈譽乃ち僧侶と論ぜん事を求む。信長聞て時至れりとなし、南禪寺景秀・法隆寺專覺及十界因果居士を判者に擧げ、豫め在意を含め、本宗をして負地に墮さしめん事を謀る。本宗は天正の盟約に基き、頂妙寺日珖・妙覺寺常光院日諦・妙滿寺久遠院日淵上人を問答者に擧

【繪解】近江安土淨巖院の景

信長我宗を墮負せしめんと謀る

安土淨巖院に對論す

げ、妙顯寺大藏房を執筆者とし、其他妙國寺普傳日門上人隨伴し。靈譽、安土西光寺聖譽貞安記錄者智恩院の僧助念等と安土淨巖院に對論す。織田信澄・菅谷長賴・堀秀政等之が奉行たり。然るに判者及奉行等は信長の意を體し、强ひて本宗墮負の判決を下さんとせしも服せざりしかば、公儀を輕しめし罪名により、日珙上人を拘禁し、日門・紹智・傳介を斬し。且つ本宗墮負せし事、向後他宗と法論せざる事、及特恩によりて一宗の撲滅を赦されし事等の誓狀を信長に入れしめて其結末を告ぐ、時に五月二十七日なりき。

信長我宗に恥辱を加ふ

【繪解】國柱會所藏日門上人筆の一遍首題本尊

宗風の變調　天文法亂に一頓挫をなせし本宗の氣勢は、漸くにして恢復の緒に就かんとして復た此法厄に遇ひ、意氣全く銷沈して一時殆んど生色を失へり。宗門の氣風是より一大變調を來たし、强毒の折伏熄みて攝受の化導行はれ、宗乘内に埋もれて台學興り、かくて宗門は守成の時代に入れり。

宗門の守成時代

檀林の創設　要行院日統上人は永祿九年、堺より下總飯塚光福寺に歸り、天正元年學徒の爲に台當の學を講ず、稱して「飯塚講肆」といふ。曾て叡山同學の友たりし立本寺日經上人の資、經藏院日生上人亦、洛北松ヶ崎に講筵を張りしが、講肆の事を聞き、同五年盟友文甫日尊上人と共に來りて其業を扶く。妙顯寺日堯・身延日道上人等三十餘人飯塚に隨ふ。然るに、同七年、日統上人不幸にして遷化せしかば、日生上人講務を紹ぎ、のち故ありて内山村及飯高村に移り、日尊上人

飯塚講肆

【繪解】京都立本寺所藏文祿三年三月妙善尼に與へし日生上人本尊の自署花押

松ケ崎檀林

講務を繼ぎ鄕主平山刑部の外護により、講堂・衆寮を建て、妙雲山法輪寺と稱し飯高檀林と改む。又日生上人は京都に歸り、翌八年松ケ崎檀林を開けり。この兩檀林を「關東・關西の根本檀林」といふ。

關東關西の兩根本檀林

眞門の日修上人

京都本隆寺に承悳日修上人あり、日諦上人の資にして證誠院と號す、前、豫州の太守源、經孝の爲に「眞流正傳鈔」（又云青藍抄、六卷）を著せしは恰も安土宗論の當時にあり。近州八幡本妙寺普傳日門上人斬せらるゝや之を兼職す。其間宗要活套集」「遺金鈔」「宗旨弘通抄私記」等を著す。其門の教學は殆んど上人によりて大成せらるると云ふ。又和漢の學に通じ、名を公卿の

【繪解】京都本隆寺所藏日修上人の像、その賛は要法寺日性上人の筆なり

眞門の教學大成者

間に馳す、「安國論科註」は正親町帝の叡覽に供せしものなり。門徒後不輕院と諡し、一派の「中興」と尊稱す。要法寺圓智日性上人はその學弟なりしと云ふ。

勝頼重須の靈寶を沒收す

日健日春靈寶を駿府に諍ふ

重須・西山の諍

駿州西山本門寺日春上人は豫て重須の靈寶を得て、西山の由緒を莊らん事を欲して武田勝頼に謀る。天正九年勝頼乃ち重須の靈寶を沒收せり、重須日殿上人其返却を請ひしも要領を得ず、翌年三月勝頼、織田氏の爲に擊たるゝに及び、甲州の商人岡田宇賀右衞門此靈寶を持して駿府に避難せり。重須後住日健上人之を聞て駿府に到る。西山の日春上人亦來りて之を得んとし、茲に兩者の諍となりしが、家康の判決によりて靈寶を重須に歸せり。日興上人八通の遺書及二個相承は此時に紛失せりと傳ふ。

第十八章　秀吉の佛教擁護と本宗

本宗漸く活路を得

寺院多く移轉す

【繪解】京都頂妙寺所藏法華宗弘通公許の狀

本宗漸く面目を施せり

秀吉と本宗

秀吉は信長に反し、耶蘇教を禁じ佛教によりて人心の歸向を得んと欲せしかば、本宗茲に漸くその活路を得たり。天正十一年秀吉居城を大阪に築くや、本宗寺院のその地に創設せらるゝもの多く。次で京都内野に聚樂第を建て、我宗の寺院に移轉を命ずるや、頂妙寺日珙上人「徴案書」を秀吉に捧げ、安土宗論に於ける信長不當の裁決を訴へしかば、秀吉乃ち日珙上人を召して信長の非政を謝し、我宗より入れし誓狀を還し、且つ民部卿前田玄以をして宗弘の令狀を法華宗中に下さしめ、本宗始て其面目を施せり。

興門諸山の干係

大石寺は西山と提携して重須と對峙し、重須は小泉及保田と結んで之に當りしが、日殿上人已來また小泉と不和を生じ、次で西山と靈寶を諍ふて四分五裂の有樣となれり。要法寺は日辰上人の當時大石寺を除く諸山と親密なりしが、其高弟日賜上人の時に至り全く之に反し、天正十五年大石寺日主上人と互に本尊を交換し、石要兩山一寺の盟約を結び、世出共に相違なき事を誓へり。是よりのち大石寺は代々要法寺より入山する事となれり。

富士諸山の分裂

石要兩山の和親

【繪解】下總中村日本寺安置突瓦の像、右は聖祖、左は富木日常

日珙の中山改革

中山の三山輪番制

中山十代日倪上人節制度なく、頻りに寺寶を散失せしかば、佛心院日珙上人之を憂ひ、天正十六年日倪上人を

下總中村日本寺に隱退せしめ、其資日典上人をして之に代らしむ。「立正安國論」「撰時抄」及交互の尊像、此時日本寺に移されしといふ。然るに日典上人亦猥りに靈寶を賣却せしを以て、文祿三年日珙上人、關東奉行家康に訴ふ。家康乃ち日典上人を長州萩に竄し、次で日珙上人を住せしむ。上人の資に京都項妙寺日曉・本法寺日通・堺妙國寺日統上人等あり。茲に於て日珙上人家康に計り、以後中山の主職は此三個寺より輪番に勤むる事となす、是を「中山の三山輪番」と云ふ。

三山輪番制

檀林の勃興

足利氏の末期戰國時代より織田氏を經て豐臣氏に至り。外は社會の秩序漸く恢復し、內には日禎・日重・日乾・日遠・日裕・日圓上人等護法の學匠出ずるありて、意を育英に注ぎ、各地に檀林を起して教育に力めたり。天正十八年本國寺日禎上人、寺衆の願により境內に求法院檀林を設け、本滿寺一如院日重上人を請して開講す。日重上人の法子寂照院日乾・心性院日遠上人等之が聽徒たり。此と相前後

求法院檀林

小西檀林

【繪解】甲州大野本遠寺所藏日重上人の像

沼田檀林

中村檀林

して上總小西正法寺日悟上人亦學寮を起し、日生上人の門下通王院日裕上人を京都より迎えて講を開かしむ、小西檀林是なり。文祿三年には隆門の日乾上人、上總大沼田妙經寺を中興して沼田檀林を起す、勝劣派檀林の始なり。

飯高檀林は日尊上人池上に住し、身延日新上人の資日道上人其化主となりしが、慶長四年日賢上人遷化の後を補して身延に住す。茲に檀林の學徒、化主の後補を諍ひ、一は本滿寺日重上人を擧げ、一は首座の慧雲院日圓上人を推す。日圓上人聞て快とせず、飯高を去りて北場淨妙寺に隱る。次で中村日本寺日侃上人の後を受けて住するに及び、學徒

【繪解】下總中村日本寺所藏日圓上人本尊の自署花押　西谷檀林　宗門の最高學府

の望によりて講莚を張る、のち稱して中村檀林といふ。かくて日重上人は飯高檀林の化主に擬せらるゝや、其資日遠上人をして之に代らしむ、時に歳二十八、檀林の教規上人によりて整備す。又法兄日乾上人に代りて身延に住するや、同九年西谷檀林を起せり。就中飯高檀林最も榮え、小西・中村之に次ぎ、德川時代に入りて終に宗門最高の學府となれり。

村雲日秀尼の外護　日秀尼は秀吉の姉にして、木下彌助（のち羽柴一路と改む）に嫁し、秀次・秀勝を生めり。京都本國寺日禎上人の教化によりて遂に本宗を信じ、天正十八年安土御殿の一部を本國寺に寄せて客殿とし、次子秀勝文祿元年征韓の役に陣歿せ

【繪解】京都東山善正寺所藏土佐光興筆日秀尼の肖像　善正寺を建つ　村雲御所

しかば、翌年身延の本堂・方丈及唐門を再建して追善に擬し、同四年秀次高野に誅せられ、夫一路亦逝去せしかば、翌五年終に本滿寺日乾上人に就て剃度し、瑞龍院妙惠日秀尼と稱す。洛西嵯峨に善正寺を開きて秀次の冥福に資し、求法院檀林の化主日鋭上人之が開山となり、慶長五年、寺を京都東山に移せり。日秀尼の寂後、居館を瑞龍寺と改め、爾來世〻衣冠の女をその主職とせり「村雲御所」茲に濫觴す。

第十九章　受不受兩黨の諍　佐渡及九州の宗門

受不受諍論の顚末　豪毅なりし宗門の氣勢は安土宗論により退嬰軟化し、信仰なき檀越は其外護を恃み、僧侶は其意を迎へて往

不受不施論の起因

々之に阿諛する者あるに至れり。されば一部學者の間に不受不施論の起りしは此傾向の反動にして、又宗制復古の叫びなりき。關東には池上の日惺上人、飯高の日尊上人、小西の日詔上人、及禪那院日忠上人等ありて、京都妙覺寺日典上人の資佛性院日奥上人、妙滿寺常樂院日經上人等と東西相呼應して其論漸く盛なり。此時に當り偶、京都方廣寺大佛千僧供養の事あり、文祿四年九月京都各山の貫首、本國寺に會し出仕を決議す。獨り妙覺寺日奥上人、他宗同座の讀經は謗法なりと反對して終に出仕せず。茲に於て本滿寺日重上人は妙顯寺日紹・本法寺日通上人等と受不施の義を主張して日奥上人に當り、

【繪解】大阪正法寺所藏日重上人の消息

大佛の千僧供養

日奥對日重等の受不受論

日奥の主張

日惺・日尊上人等は妙滿寺日經上人と共に日奥上人に聲援を與ふ、次で日奥上人は宗風の腐敗墮落を憤慨し、自ら妙覺寺を去りて丹波小野村に退き。謗施不受は一宗の通規、他宗同座の讀經は宗禁なる事、及方廣寺大佛は應身始成の佛にして無作三身の本佛に非ざる旨を以て數、秀吉を諫曉せしかば、秀吉大に激怒せり。かくて受不施方の上訴により、慶長四年家康、上人を大阪城中に召し、妙顯寺日紹・堺妙國寺日統上人等と對論せしめ、終に公命違背の罪名によりて對馬に謫せらる。

【繪解】京都紫竹常德寺所藏該寺檀越後藤德乘に與へし日奥上人の消息

大阪城の對論

受不施側の見界

茲に於て日重上人等は安土宗論に鑑み、強ひて宗規の正純を守らんとして反つて一宗の全滅を招くも亦祖意に非ざるを思ひ、且つ日奥

慶長の盟約

上人一派の所論亦稍や極端に失するの嫌ありとし。爾後公儀の出仕に缺席すべからざる事、公武の施物に對しては信謗受不を論ずべからざる事等を約せり。是を「慶長の盟約」と稱す。

日典の渡島宣教

佐渡の狀況

天正の初、京都妙覺寺日典上人來りて島内各處に宣教し、大に宗門の氣勢を高めたり。妙經寺日進上人の資日仁上人は更に京都・堺等に勸化して伽藍の修備に盡し、御松實相寺を改築し、又石田村に法福寺を創立せり。妙照寺は十四世日能上人の時燒失し、十五世日堯上人は國主の忌非に觸れて遷化し、爾後五十餘年間殆んど廢寺の姿なりしが。天正十二年日誘上人

【繪解】塚原三昧堂及聖祖が最蓮房に本門戒を授けられしと傳ふる戒壇

妙經寺日仁妙照寺の隆替

阿佛妙宣寺

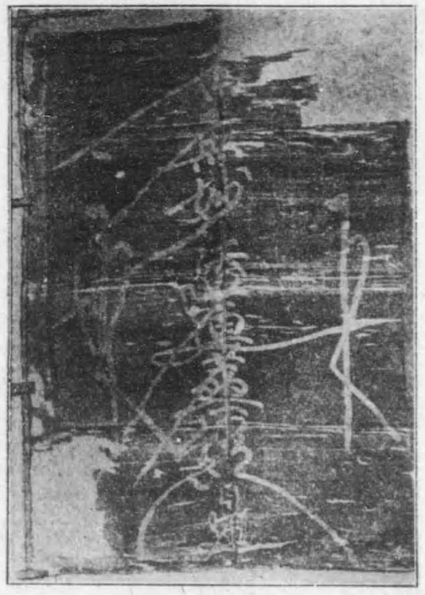
在職永年、刻苦して寛永十年の頃漸く再建せり。阿佛妙宣寺は從來本間家の外護を受けしが、天正十六年、上杉景勝は寺地を寄せ、景勝の臣島主直江兼綱は寺田を附す。同十八年日典上人は景綱に計りて三昧堂の領田を得て正教寺と號し、のちまた根本寺と改む。

三昧堂寺號を稱す

九州の宗門

加藤清正と九州の本宗

九州の宗門は中山日祐上人の行化に始まり、次で保田妙本寺日鄕上人の門下日叡上人の日向高富に定善寺を開くあり、室



大に活況を呈す

【繪解】京都本國寺日禎上人筆清正の征韓軍旗

本妙寺日眞

町時代鎧冠日親上人の傳道ありて漸次發展しつゝありしが、清正の外護を受くるに及んで、大に活況を呈し來れり。清正深く本宗を信じ、天正十六年肥後に轉封せらるゝや、曾て大阪に創立せし本妙寺を熊本城内に移し、發星院日眞上人を請して開山とす。文祿元年征韓出陣に際し、本國寺日禎上人の戰捷祝禱を受け、日眞上人は日禪・日就・日榮・日順等十人を率ゐて之に從軍し。慶長元年九月歸朝の後、豐後鶴崎法心寺・川尻法宣寺・熊本妙永寺等を創め、又肥前大村の邑主純信の歸依によりて本經寺を開き、「高麗遙師」と通稱せらるゝ本妙寺三世本行院日遙上人は、島原に護

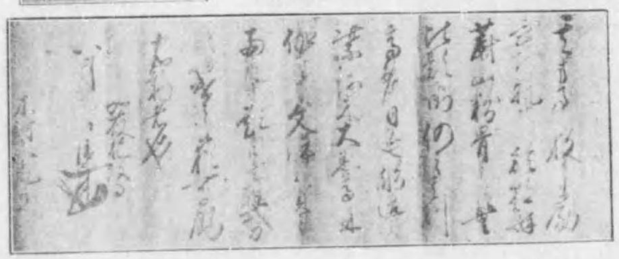
日忠日慧の傳道

【繪解】熊本本妙寺所藏日眞上人の像

【繪解】京都本國寺所藏加藤清正の書簡

【繪解】熊本本妙寺所藏高麗遙師の筆蹟

國寺を建つ。慶長七年京都妙覺寺僧唯心院日忠上人は博多に布教して切支丹徒イルマン等の迫害を受けしが、妙典寺檀越鳥井數馬等の援護により、終にイルマンを論伏し、國主は問答勝立寺を建てゝ上人の功蹟を賞す。日眞上人の資本瑞院日慧上人は



長崎に入り、耶蘇教に對して折伏傳道を行ひ、本蓮寺を開けり。

第四期　徳川氏時代　前期

第二十章　徳川氏時代の宗門概況

徳川幕府と本宗

公家佛教

佛教が最も巧みに國政に利用せられしは徳川時代なり。家康は用ゐて經世の要具となし、殊に切支丹防遏に最も適切なるものとせられ、茲に佛教は制度上國教として政治的保護を受くるの機會を得たり。且つ同一宗派内に於ても京都妙顯寺・本能寺等の如く深き由緒あるものと雖も歴史的公家佛教として幕府は敬遠主義を執り。其位地關東にありて、幕政を翼賛し、若くは之に反抗せざりし身延・越後本成寺・池上等に對しては厚き保護を與へたり。されば偶〻其發源地域を關東に有せし本宗としては比較的順境の地位に

關東佛教

ありき。蓋し中山の日珙・身延の日新上人等と家康との關係は本宗が保護を受けたるに與る所多し。檀林の如きも關東に起りし飯高・小西・中村・宮谷・三澤・細草等は各派の最高學府となり、京都諸檀林は其初等、中等程度の教育道場たるに止まれり。

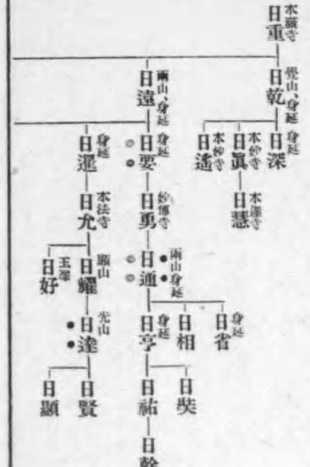
幕府と宗門制度

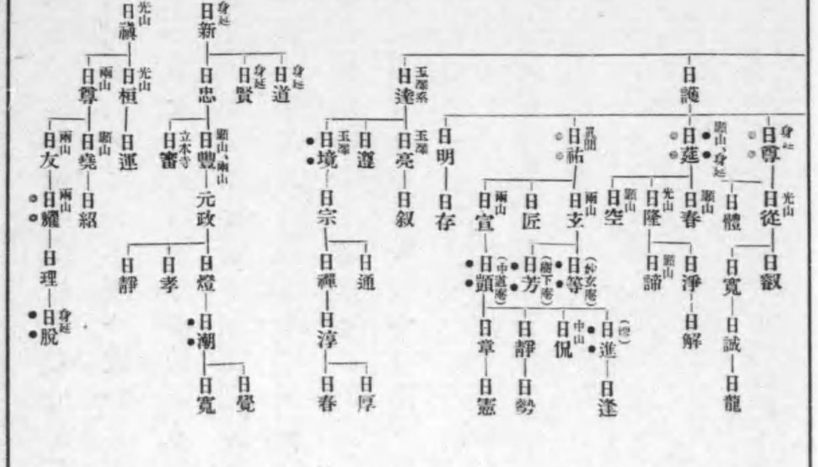
相續寺法變改の原因

從來諸本山は多くの末寺を有して別立し、各、山法山規によりて門末寺院を統治し、歴代の貫首は輪番交代制を採りし妙滿寺派等を除く外は、血統若くは嫡弟によりて相續せられ、恰も一本山一宗の狀態なりしが。中山は既に三山輪番の制を開き。又本國寺の一塔

【繪解】甲州大野本遠寺所藏日遠上人の像

頭より身を起し、堺三光無師會に學びし日重上人、及びその上足日乾・日遠上人等の明匠出て、就中日遠上人の一門最も榮え、宗門巨刹の大部分は殆んど此等三師の門葉によりて網羅せらるゝに至り、且つ寛永十二年幕府始めて寺社奉行を設け、秩序回復の施政方針に基き、僧侶學行昇進の次第、寺院の階級・傳道等に關する法度を出すや、檀林修學の程度を以て寺職資格の唯一標準となし、而も本山本寺の特權たりし末寺住職の進退權は元より、本山自らの就職權すら、檀林より生ぜし「谷」又は「法類」に移りて、茲に相續寺法一變するに至れり。





〔注意〕
兩山は比企、池上。顯山は妙顯寺。光山は本圓寺。覺山は妙覺寺の略號にして左側に黑點を施せるは法類の祖にして、二重點は谷祖を示す。

本山特權の推移

役寺末頭

又幕府は諸宗本山に命じて江戸に役寺を置かしめ、以て各宗統治の連鎖機關とせり、本宗一致勝劣兩派の各本山は役寺若くは末頭を定め、幕令をその所屬本山及び末寺に傳達し、又本山はその末寺に傳ふべき山規寺法を便宜上此役寺、末頭に托して觸れしめたり、故に是を觸頭と稱す、茲に於て本山が一宗に對して有せし特權は漸次觸頭に歸し、終に本山は唯だその所屬寺院を統率し、學事を督勵するに止まり、宗政に關しては却つて觸頭のもとに就くの有樣となれり。

觸頭

寺院の階級

寺院階級と就職資格　僧侶の寺院住職及び榮轉は、其標準を凡て檀林修學の高低に採り、同一程度の修學者は年齢夏臘の順により て昇進せしめたり。一致派は身延久遠寺を惣本山と稱し、他を單に本山と云ひ、同じく本山と稱する中にも一檀林の成功者に限りて住職すべき必然の關係を有するものと、數箇の檀林より順次に住寺しうべき本山との兩種あり。後者を無所屬本山と呼びて之を區別せり。本山のもとに附庸本寺及び諸末寺の別あり。附庸本寺に支配・觸下の二種あり、前者は本寺の直豁に屬し、後者は觸頭の配下にあるものを云ふ。諸末寺に四階級あり。御朱印寺は觸頭と共に本寺に准ぜられ、本寺と等しく、檀林玄文兩能化より之に住し、聖人寺は玄能已上、平僧寺は玄文兩部の所化、塔頭は集解部已上の者之に主たるの通格なり。又妙滿寺派は本山妙滿寺の末寺を直末と呼び、觸頭の支配に屬するものを江戸配下と云ひ、直末の末寺を又末と稱し、又末の下に衆徒末あり、また直末の中、上總十箇寺は幕府の觸書を觸頭より受けて派内寺院に傳達し、幕府の諮問其他に就て評決するの役寺にして是を評議寺と稱し、宮谷檀林の首座より順次之に住し、其在職中、文能を成功せし者は輪番に本山妙滿寺に晋山するの定めなり。

本成寺派は本山・聖跡・平寺・塔頭の次第にして、塔頭は玄義部の所化、平寺は文句部の所化、之に住し、聖跡は三澤檀林文能成功者之に就職し、

年蔕順に本山本成寺に榮轉する事とせり。

伽藍佛教

宗門氣魄の消長　斯の如く諸般の制度確立し、寺院は朱印寺領を得て伽藍日を追ふて整備し、山色年と倶に榮え、僧侶は「寺請帳」によりて民衆の戸籍權を掌握し、檀林の教育は益〻盛んとなり、元祿享保の間に亘りて幾多の偉僧賢哲を出し、伽藍佛教としては正に黃金時代を再現せり。

宗義と幕政

然れども由來平民的宗教として折伏の化導法により、民衆の自覺喚起を唱導し來りし本宗は、幕府の懷柔政策に捕はれてその箝制を受け、終に宗門精神は墮落を餘儀なくせらるゝの結果となれり。卽ち幕府は信教の自由を拘束して民臣の改宗を禁じ、言論の自由を塞ぎて他宗徒に對する折伏傳道、自他宗僧侶間の問答對論を嚴禁せしかば、僅かに文書によりて筆戰を交はせしに過ぎず。加ふるに檀林の授けし教課の大部分が天台學なりし事は引いて宗學漸衰の因となり、會、宗義を說く者は反つて異端視せられ、かくして宗門の氣魄は殆んど去勢せらるゝに至れり。されば內は宗粹の沒落を慨し、外は幕府の壓制に反抗して興りしは不受不施なり。日英上人は僧風の軟弱に流れしを嘆きて鳴瀧に退き、元政・日中・本妙律師等は自ら範を示して僧規を振作し、而して宗學の復興に努めて祖道の宣揚に盡せし師に日導・日明・日輝上人等あり。德川治世二百六十餘年宗門の氣魄は實に斯の如くにして累殆の間に持續せられて明治に及べり。

文教奬勵

檀林の數二十を算す

第二十一章　德川氏初期の宗門

檀林教育の隆盛　德川氏の文教奬勵によりて我宗の教育も亦大いに盛んとなり、終に關東・關西合して二十の檀林を算するに至れり。寬永年間、顯壽院日演上人は京都に東山檀林を、日乾上人は本阿彌光悅の子光瑳の請によりて鷹峰檀林を、妙傳寺日勇上人は日通上人

と計りて山科檀林を起し。承應年間には紀州感應寺日祥上人は鷄冠井檀林を創む。又天和・元祿の間に勝光院日耀上人は水戸に三昧堂檀林を、池上の日玄上人は南谷檀林を開けり。勝劣各派には元和八年什門の佛眼院日純上人、上總宮谷本國寺に宮谷檀林を始め、之に次で本能寺智泉院日達上人は上總に細艸

【繪解】甲州大野本遠寺所藏日乾上人の像

勝劣派の檀林

【繪解】上總東金本漸寺所藏日純上人寫本の末尾

檀林、洛南に大龜谷檀林を開き。萬治元年には本隆寺妙雲院日承上人、洛南に小栗栖檀林を設く。此中宮谷・小栗栖最も盛んなりき。斯の如く相競ふて學弟の教育に勵みしかば、元祿・享保の頃に及んで諸派共に傑出せる人物を出せり。

日經の强折伏

孤立の狀態となる

法難の原因

慶長法難

京都寂光寺祖日淵上人と時代を同ふして妙滿寺に日經上人あり、盛んに强折伏の化導を布き、又不受不施を唱へしかば、一致派諸山を始め、妙滿寺一派に至る迄、家康の忌非に觸れん事を懼れて上人を疎外せしかば、全く孤立の狀態となれり。慶長十三年尾張に布教し、淨土宗熱田正覺寺・緒川善導寺等と筆戰し、正覺寺澤道は日經上人より送りし二十三箇條の難問書を以て江戸增上寺源譽によりて幕

【繪解】京都上行寺安置日經上人像

寒松の仲裁

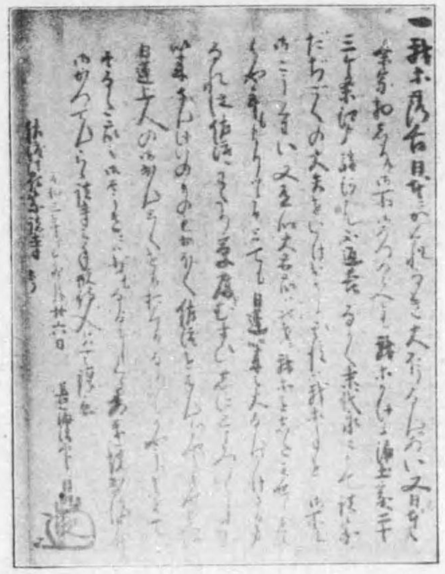
江戸旅舍の遭難

府に出して之を訴ふ。足利學校の寒松之を仲裁せんとせしも日經上人肯かず。十一月十五日終に江戸城に淨土宗側と對論する事に決す。日經上人心中私に死を決して其日を待ちしが、其前夜淨土宗の信者等日經上人を歐打し重傷爲に死に瀕せしむ。茲に於て弟子等其理由を述べて問答の日延を請ひしも家康肯かず、强て登城せしむ。將軍秀忠・淺野長政・上杉景勝・增上寺源譽・幡隨意等臨席し、源譽の資廓山・了的二人問答の任に當り、高野山賴慶之が判者たり。廓山乃ち瀕死の日經上人に問難し、其答ふる能はざりしを以て淨土宗勝利と決し、翌年日經上人は弟子五人と共に京都六條河原に刑に處せられ、弟子日玄爲に死す。時に二月二十日なり。之を「慶長法難」と稱す。

【繪解】國柱會所藏日經上人の消息

瀕死の日經墮負と決せらる

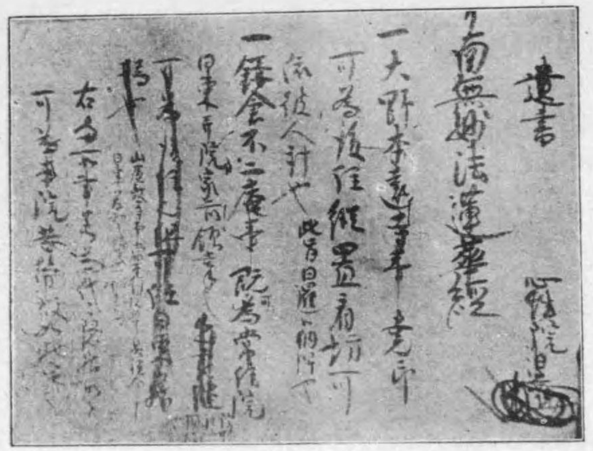
六條河原の刑劇刑



家康の暴令

日遠の憤慨

【繪解】稻田海素師所藏日遠上人遺言狀



法難の影響

茲に於て家康は身延・池上・京都諸山に命じ、念佛無間の文、經釋になき旨の誓狀を徵す。然るに身延日遠上人大に憤慨し、更に增上寺源譽と問答せん事を請ひしかば、家康怒りて上人を阿部川河原に磔刑に處せんとす。家康の側室おまんの方（養珠夫人）、深く我宗を信じ、且つ上人に歸依せしを以て、上人の難に殉ぜんとす。家康乃ち人をして上人を說き、他の諸本山と俱に誓狀を入れしめて僅に落着せり。又

お勝の局改宗す

大野本遠寺

お勝の局は玉澤妙法華寺の檀越たりしが、爲に家康に憚り、終に淨土宗に改宗し。日遠上人は刑餘の身を慮り、久遠寺を辭して甲州大野に隱退せり。本遠寺はお萬の方、上人の報德に擬して建立する所なり。

勝劣派の人物

當時、要法寺に日性・本禪寺に日邵・日求、什門に日乘・日啓上人等あり。日性上人は本隆寺日修上人の門に學び佛學及和漢の書に通じ、公卿・禪僧等其講下に參ず、重・乾・遠三師、寂光寺日淵上人等と道交あり、圓智の號は後陽成帝より賜はる所、御書註（十八卷）は本隆寺日修上人の安國論科註に開目抄已下を續補せしもの、又（大藏纂要百卷）の著あり。日邵上人は姫路藩主池田輝政夫人督姫の歸依あり、慶長七年其供養米によりて攝津中筋の村民を救ひ、一村悉く改宗せしめ、本禪寺日求上人は寛永六年四月再び本隆寺日證上人と兩寺通用の約をなし、又童蒙懷覽抄を著して一派の義學を宣揚せり。日乘上人は宮谷檀林第二代の化主日信上人の門より出で、宮谷に化主たる事二回、上總東金本漸寺・京都妙滿寺に歷住し、碩儒林羅山と議論を上下す。其著に玄義考拾記（十卷）文句攬綱（十卷）信行要道義等あり。此と同時に品川問答に淨土の意傳に勝てりと傳へらるゝ本光寺日啓上人ありて何れも當代一流の人物なりき。

圓智日性

【繪解】京都要法寺所藏日性上人の肖像

本禪寺日邵

乾龍日乘

【繪解】上總東金本漸寺所藏日乘上人の消息

本光寺日啓

第二十二章　檀林の組織　祖書の刊行

檀林の學級教課　檀林の學級は凡そ七部に分れ名目・四教儀・集解・觀心を小部又は下四部と稱し、六個年にして修了せしめ。又玄義・文句・止觀の三部を大部と云ひ、玄義に新・中・古の三級ありて四個年を要し、文句部に十ノ側より二ノ側まであり、學生の數に應じて側の數を增減す、四ノ側已下は一ノ側毎に五十人、三・二ノ兩側は二十四人を定員とし、二ノ側を最上級とし首席一名を部頭と云ふ。止觀部を又は中座と稱し、始めて祖書を兼學せしむ。十八人ありて首席者を中頭と云ひ、別に教師の授業を受けず、互に主伴となりて止觀御書を研究し、文句部と共に修業年限に制限なし。而して授業期間は初め休業期なかりしが、寛永二年の頃より春秋二期に分ち、春は二月より五月迄、秋は八月より十一月迄凡そ百日間を夏と稱し、休業期間を夏間と云ひ、又授業日を物讀

下四部
大部
中座十八人
授業期間
夏及び夏間

日、其に出席するを勤席と唱へたり。

教師には五老・四老・三老・二老・一老の五人ありて上座又は首座と稱し、五・四・三老の三人は次第の如く名目・四教儀・集解の教授を受持ち、二老は板頭と稱して專ら檀林の庶務を執り、觀心部の講授は中座の學生をして代講せしめ。一老は玄義を教授す故に玄能と云ふ、玄能の上に檀林長あり、之を化主又は能化と稱し、文句を講授するを以て文能とも云ふ。而して板頭は一個年卽二夏を任期とし、他は凡て一夏交代にして、五老は順次に中座より入り、玄能は板頭勤了者の先輩より化主は玄能中の長薦者より推薦せられ、化主を勤了せし者を關東にては「江戸先聖」京都にては「函本」と呼べり。

又妙滿寺派の宮谷檀林は名目・條箇・集解・指要・玄義・文句の六部に分ち、文句部は御書兼學にして之を側座・中座・上座に區別し、側座大衆は中座十八人と共に能化の對告衆たり、上座の中、下席三人を部頭と云ひ、

上座五人
板頭
玄能
化主
江戸先聖
函本
勝劣流各檀林

上五人を五老とし、一老の上に能化あり。三澤檀林は條箇・集解・玄義・文句の四部とし、文句部を側座八人、列座八人とし、列座の中、下四人を中座、上四人を上座と稱し、文句部頭・條箇講者・集解講者・玄義講者と呼び、玄義講者を又は板頭と云ひ、板頭の上に能化あり。上總の細草、大沼田、京都の大龜谷、小栗栖等は多く此制に倣へりと云ふ。

檀林の建築物

檀林は概ね講堂・玄義寮・方丈・板頭寮及數棟の所化寮より成り、化主は方丈に、玄能は玄義寮に、其他三・四・五老は所化寮に分宿して學生を監督す、此場合を指南頭と稱せり。

谷の起源

飯高三谷

中村兩法脊

谷と法類

檀林には「谷」と稱するものあり。谷とはもと飯高・中村等の檀林所在地の小字なりしが、寛永の頃日耀上人が飯高村字中臺谷に龍眠庵を建て、次で日祐上人は城下谷に向城庵を、日通上人は松和田谷に松和軒を造るあり、是を「飯高三谷」と云ふ。之と相前後して日境上人は中村東谷に眞如庵を、西谷に日奠・日莚上人等の觀月庵を築くあり。是を「東西兩法脊」と稱し、其門下を之に寄宿せしめ、各自の主義・學説によりて指南せり。終には諸他の檀林も之に倣ひ、學徒策勵の爲に指南を分ちて谷と稱するに至れり、かくして谷とは學系を異にせる所化寮を意味するの語となれり。のち一谷に數棟の所化寮漸次增築せられ、從て其創設者を中心とし、其學系に屬せる數個の學徒團體を生じたり、之を「法類」と稱す。されば飯高・中村・宮谷等には一谷に數個の法類あるに至れり。

谷の意義

法類

京都六檀林と飯中兩檀林

諸檀林干係及程度

京都六檀林は其學課の程度同一なりしかば寛文元年の六檀林會議に基き、互に連絡をとり、生徒の轉學を許るし、教師の融通を計れり、關東檀林中特に、飯高・中村兩檀林と連絡ありて、山科の出身者は飯高松和田谷に、松崎は身延西谷檀林と共に中臺・松和田の兩谷に、池上の南谷檀林は城下谷に、求法・東山は中村東西兩谷に、鷹ヵ峰は東谷に、鷄冠井は西谷に轉學し得べき特殊の關係を有せ

程度の高低

勝劣派檀林

り。而して飯高・中村は小西檀林と共に他の八檀林に比して程度高く、八檀林の玄能は飯中兩檀林の文句部二ノ側に、また化主は中座に相當せり。又宮谷檀林は什門一派の經營になり、細草檀林は興・隆兩門派合同檀林にして、三澤檀林は陣門の獨營たり。京都小栗栖檀林は要法・本隆兩寺の共營なりしが、のち陣・什・隆三門派之に加はり勝劣派合同檀林となれり。隆門は別に大亀谷檀林を有せり。されば一致派檀林との間には殆んど關係なかりき。

錄外御書

祖書の蒐集及版行

祖書は所謂錄内百四十八通に漏れしもの多々ありしが、天正十一年彫像に巧なる中正院日護上人「三寶寺御書」二十三卷を集め、文祿四年には日重上人「本滿寺御書」二十卷を輯錄し、次で重・護兩上人更に「御書續集」三卷を共編せり。然れども此等は錄内御書と共に皆な寫傳なりしが、慶長十四年日乾・日遠上人錄内五大部を椅橛に付して一百部を公刊せり、故に「百部摺本」と稱す、蓋し祖書刊行の嚆矢

祖書刊行の嚆矢

錄外御書の創刊

錄外の調卷定まる

なり。又嘗て圓妙院日澄上人の集めし錄内御書ありしが、元和元年京都本國寺より出版す、之を「本國寺版」と云ふ。寛永年間に入り、房間より發行せられしものに「中島版」・「庄右衞門版」・「勘左衞門版」あり。而して錄外御書の上梓せられし最も早きは慶安二年の「他受用御書」七卷なりと云ふ。次で寛文二年「治右衞門版」に至り、二百五十九通・二十五卷と定まれり。同九年市兵衞・勘兵衞等また錄内・錄外を一時に版行せり。「妙蓮寺御書」は當時日感上人がイロハ順に配列編輯せし錄外祖書なり。

第二十三章　不受論者の活動と遭難

形勢一變す

不受不施論の再燃

日奥上人慶長十七年赦されて歸京し、翌年所司代板倉勝重、不受不施公許の令を發布するや、妙顯寺日紹上人京諸山を代表して日奥上人に改悔するに至りて不受の論再び興り、日奥上人は「宗義制法論」三卷を著して日乾・日遠上人等を非難し、池上の日

關東諸山の不受論者

本法寺日因の自伐

【繪解】日樹上人の墓　信州下伊奈郡上飯田村字池上に在り

池上中山對身延との對論

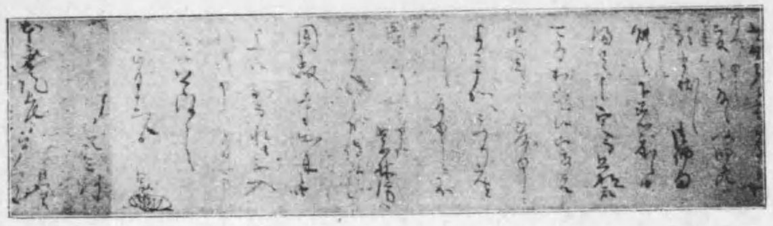
樹・中山前住日賢・小西化主日領・平賀の日弘・碑文谷法華寺日進上人等、日奥上人と相呼應して不受不施を唱ふ。此時に當り、中山の日來上人は不受の名を利用して輪番制を廢せんと企て、院家・寺僧等を煽動し、慶長十八年輪番當職本法寺日因上人の入山を拒止す、日因上人其凌辱にたえずして、肩輿の内に自伐し、日慈上人の公訴により漸く鎮靜せり。會、寛永三年十月、將軍秀忠の室、淺井氏逝去の事あり、池上日樹・中山日賢上人は共に其諷經に出席せず、且つ其施物を拒みしかば「富樓那遲師」の稱ある身延日遲上

不受側處罰せらる

【繪解】東京根津大恩寺所藏日賢上人配所三河より消息

日經の轉教

幕府の迫害



人は前住日乾・日遠上人等と日樹・日賢上人等を奉行所に訴え、同七年天海・崇傳・林羅山等を判者として對論に及び終に不受側墮負に歸し、日樹上人を信州伊奈に、日賢上人を三河に、日領上人を奥州相馬に配流し、妙覺寺を日乾上人に、本門寺を日遠上人に與へたり、是を寛永年度の受不受論と稱す。

刑餘の日經上人　日經上人は刑餘の身を以て丹・波の知見・若狹の小濱・加越の國境釜谷等に流浪轉教せしが、當時前田利家の臣、三ノ輪長好、上人を敬待し、利家の子利長は、長好を通じて上人に歸依し、金澤に本覺寺を建つ。然るに幕府數、上人追放の事を利常に迫りしを以て、上人自ら越中富山に去り、家志村隼人の歸依を受け、正顯寺・安立寺を建て、佐渡に航せんと

欲せしが、途にして遷化せりといふ。

末流の遭難

上人の門下日秀上人は慶長遭難已後、京・阪・堺の信徒を督し、京都五條上行寺・大阪生玉前堂閣寺を開き、又日壽上人は京都高辻に久遠寺を、日堯上人は堺に要行寺を、日顯上人は若狹小濱本行寺を開けり。又蓮照院日淨上人はもと池上門流なりしが嘗て岩代二本松に日經上人の教化によりて改派し、慶長十二年江戸に常檢寺を開き、又兩總の地に布教し、慶長法難已後、關東の法將として大に教

【繪解】怨閑日淨上人の墓、下總響田村に在り（國柱會所藏）

門下の活動

【繪解】怨閑塚、下總響田村字十文字原に在り（國柱會所藏）

日淨の遭難

田の開拓に努め、下總野田本滿寺に住し、更に本覺寺を開き、法弟東横川方墳寺日尙上人と共に盛に折伏の化導を布き教功大に擧れり。時に代官三浦監物之を怨嫉し、寛永十二年九月、日淨上人及檀越等六人を捕えて十文字原に磔刑に處し、次で本滿寺・本覺寺を燒却し、又日尙上人を伊豆に流し、方墳寺及千澤村圓立寺を燒けり。

十文字原の磔刑

第二十四章　文書上の宗論

幕府の問答對論禁止

淨土宗との論戰

德川氏が佛教各宗の間に行はれし問答宗論の、害ありて益なきを察して之を嚴禁せし他の一面に、出版事業の發達せるに連れ、我宗内學匠の欝勃たる宗弘の觀念は發して文書の上に表はれ、是より淨土宗・眞宗・及華嚴宗等と數、文書上の筆戰宗論行はるゝに至れり。慶長年間、日遠上人は「無得道論」を著して淨土宗を破し。實慧は「摧邪興正集」三卷を以て之を反駁し。佛性院日奥上人は「斷惡生善

論を作て實慧を難ぜり。

眞迢對不受論者の筆戰　眞迢はもと京都妙蓮寺日源上人の資にして中頃圓韓と字せり。初め宮谷檀林に入り、のち飯高に禪那院日忠上人に就き、又中村に轉學し、京都に歸りて妙蓮寺に住せしが、所感ありて叡山に去り、改宗して舜統院と號せり。寛永十四年「破邪顯正記」五卷を著し、越て承應三年其資眞陽の名を以てまた「禁斷日蓮義」十二卷を出して我宗を破するや、相馬の日領・其資日遵・三河の日賢・本滿寺觀妙院日存・三浦大明寺日航・池上の日現・蓮華院日題上人等の不受論者は一齊に之を反駁せり。

眞迢の改宗

不受論者の應戰

眞迢は、のち江戸神田東光院に住し、權大僧都に任ぜらる、其著と稱する「名目抄」六卷は日忠上人の手記にして、又「玄義捃釋」十卷は中正院日友上人の筆策を公刊せしものといふ。

改宗後の眞迢

第二十五章　宗門の全盛期

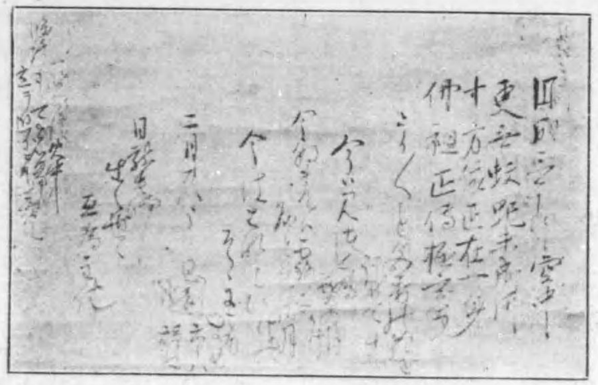
宗運の隆盛　受不受の論は內より起り、外は眞迢の改宗ありて一面甚多事なりしが、養珠夫人は身延に聖祖の眞骨堂を建て、日乾上人の說に基き駿州貞松に蓮永寺を創立して六老日持上人の遺跡を再興し、甲州に本遠寺を開き、圓是院日耀上人を外護して飯高檀林の講堂を再建す。又七面山に登りて女人登詣の端を開きしは人の能く知る所。其子紀州賴宣は和歌浦に經石を埋めて寶塔を建つ。淸正の女にして賴宣の室なる瑤林院夫人また本宗を信じ、其子光貞は和歌山に報恩寺を創め。其室天眞院夫人は明本の大藏經を身延に納め、經藏を建て。越前の國主前田利家の室壽福院夫人は身延に五重塔、奥ノ院祖師堂、

名門の外護

【繪解】甲州大野本遠寺安置養珠夫人の像、七面山踏分け立像と稱す

檀林教育の發達

京都妙顯寺客殿を再建し、能登瀧谷妙成寺、金澤經王寺等を修備するあり。加ふるに檀林教育の發展は許多の學匠・碩德を出し。內外相應じて教法の護持に努めしかば宗勢大に盛んとなり。就中本宗の中心たる身延・池上等は德川一家に厚き歸向を得たりしを以て山色益〻榮え、中山は三山輪番制の開始と俱に別に副傳師を置きて祈禱修法の相傳を司らしめしが、十四世日逮上人寛永十一年四月副傳師日祥上人に命じ荒行堂圓立坊を別立して傳法の道場とせり、日遼上人を經て遠壽院日久上人に及んで行堂を遠壽院と通稱するに至れり、正保元年更に智泉院を創立し修法を日住上人に分傳し、以てそ



【繪解】京都立本寺所藏日審上人の辭世

一宗の黃金時代

の斷絶に備へたり。又京都には「後代富樓那」の名を博せし立本寺日審上人ありて、後水尾上皇・八條智忠等其教化に與れり、所謂「壺日審」是なり。上人の門より出でし日念上人は江戸深川淨心寺にありて東西共に傳道盛んに行はれ。茲に再び一宗の黃金時代を現出せり。然るに隆盛の極反つて腐敗隨落の端をなす、蓋し不受論の勃興及本化律の興起茲に因由す。

本覺院日英

【繪解】京都立本寺所藏元和九年三月存心日曉に授けし日英上人本尊の自署花押

法華三昧及本化律　寛永年間、本覺院日英上人は法華讀誦三昧を唱導し、寛文・元祿の間に京南深草に元政上人あり、身延西谷に日中上人ありて本化律を起せり。日英上人は妙覺寺日典上人の資、博學宏才にして重・乾・遠三師に敬重せらる、嘗て身延登詣の歸途飯高に過ぎる、時の化主日忠上人、其學德を畏憚し、敢

【繪解】京都市外深草瑞光寺所藏元政上人自贊の肖像

深草の元政

【繪解】日孝上人の自署

大中院日孝

して、法華讀誦三昧を修せり。

稍や遲れて元政上人出ず、上人は池上日豐上人の資なり、常に日英上人の高風を敬慕し、寛文元年深草に瑞光寺を開き、本化の事戒を唱え、持律頗る嚴密なり、性寛仁大度にして苟も道に志す者は宗の自他を隔てず、僧俗の別なく、悉くて面せざりしといふ。晩年鳴瀧三寶寺に隱れ、三衣一鉢、午を過ぎて食せず、持律嚴正に

三大寶策の一

【繪解】元政上人の墓深草瑞光寺内に在り

其掛錫を容るせり、上人和漢の學に通じ、詩文・醫道に達せしかば、交友甚だ多く、立本寺日審・本法寺日德・野呂の日講上人、其他禪僧・儒官と道交厚し。上人至孝にして八十一歳の老母を身延に伴ひしは人の能く知る所。「身延行紀」は此時の紀行文なり、「草山集」三十卷は本宗の三大寶策の一と稱せらる。「如來祕藏錄」「草山要路」は本化律の法規を示せるものなり。遺言して墓碑を造らず、僅かに竹三竿を植えて埋骨を表せしむ。門下に慧明日燈・大中院日孝上人等あり、日孝上人は臨池の技を以て世に知らる。爾來其末流自ら別種の風を傳へて今日に及べり。

溪舌律院

元政上人莫逆の友たる正住院日中上人は元祿年間、身延西谷に溪舌律院を構え、標して「不盡讀持堂」と稱せり、本化律を持ち、一生二食にして終る。

第二十六章　第三回の受不受論

幕府の不受論者對策

徳川幕府の施政方針

徳川氏は足利氏已來荒亂せる國政を紹繼せしを以て、社會秩序の整頓を施政の方針とせしかば、諸般の次第階級を嚴にし、思想言論の自由を控塞し、新義異流を嚴禁せり、然るに慶長の頃より不受の論起り、寛永の初年再び其勢漸く盛んとなれり。

幕府の懷柔策

幕府は之を以て新義の異流とし政綱に馳反するものとして、爾後不受論者を嚴罰すると俱に、受不施側に對しては常に過分の恩遇を與へて、所謂懷柔の策を採れり。次で同十三年寺社奉行を設置すると俱に法度を本宗諸本寺に出して末寺を統治し、不受論者を取締らしむ。

寛文の盟約

然れども不受不施の論は依然として宗内に存し、寛文年間三たび其論起りしかば、同五年八月京都十六本寺は永祿の先規に基き、寛永の法度を遵守し、公營の法會に出仕すべき事を決議し、又向後寺職の際は國主の供養を異議なく受用すべき誓狀を本寺に入れしむる事とせり、之を「寛文の盟約」と云ふ。之より、のち幕府は盟約及十六山會合を公認し、其決議に權利を與へ、違反者は幕府之を處斷する事とし翌六年終に不受不施禁止の嚴令を發したり。

十六山會合の公認

不受不施禁令

受不施側の訴上

關東諸山不受不施を唱ふ

正保・慶安の頃より平賀の日述・小湊の日運・碑文谷の日晴・上總興津の日遵・谷中感應寺日誠上人等ありて、不受不施を唱え、又當時中山の院家等は不受の名を利用して永輪番制を定むるありしかば、身延日境上人・池上日豐上人・瑞輪寺日體上人等承應元年幕府に訴え、頻に其處斷を迫り、寛文二年身延日奠上人は、嘗て家光薨去の際、日述上人等の會葬せざりし事を擧げて幕府に訴え、更に加

日境日豐幕府に訴ふ

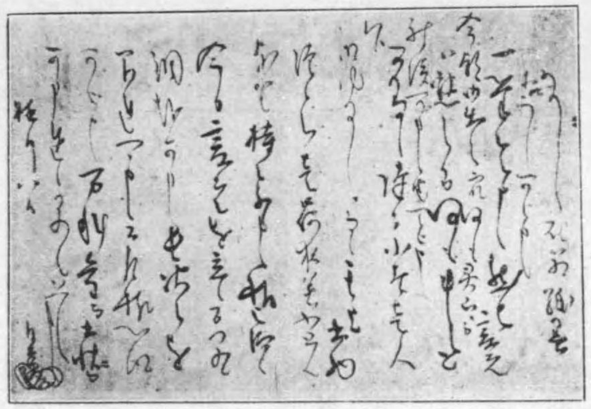
日奠の重訴

幕府の壓迫

【繪解】上総東金本漸寺所藏妙滿寺日英上人の消息

不受派内の軟派

悲田新受



賀爪忠澄によりて訴請す。當時中山の寺僧再び不受を唱え、本通院日允上人之を公場に訴ふるあり。よりて同五年幕府は諸寺に令し、寺領及飲水行路に至るまで悉く國主の敬田供養なりとの手形を徵集す。茲に於て不受黨内に軟派を生じ、小湊日明・碑文谷日禪・谷中日純上人等は、寺領等を以て悲田供養と解して幕府の命に應ぜり。これを「悲田新受」と稱す。然るに平賀日述・興津日堯・雜司ヶ谷日了上人其他京都妙滿寺日英上人、六波羅常行寺住僧等この命を拒みて各、謫せらる。

日講上人と悲田派及内信黨

寛文六年下總野呂檀林化主日講上人、「守正護國章」を製して幕府を諫め、「破奠記」を著して身延の謗法を詰り。玉造檀林の日浣上人之に呼應せしかば幕府兩上人を捕えて流刑に處す。「錄内啓蒙」三十六卷は日講上人日向佐土原の配所に著はす所。各地不受不施側の諸師、幕府のかゝる苦肉策に憤慨して絶食・自仭・入水せし者甚だ多し。時恰も備前國主池田光政は熊澤蕃山を用ゐて儒道を興し佛教を排擊し、其領内本宗寺院の廢絶せられしもの數百に及び、同八年には同國佐伯本久寺日閑上人及矢田部村民河本仁兵衞等六人を江戸に召して斬首

不受硬派の領袖

【繪解】岡山縣金川本覺寺所藏日講上人像

苦肉の策に憤慨す

池田光政の排佛

【繪解】播州妙立寺所藏日浣上人筆泰行所提出の訴狀末文

矢田部の不受不施

多く悲田派に轉ず

し、其親族二十八人を流し。又備中庭瀬の僧日悅上人等を江戸に毒殺せり。されば純正不受不施論者は此等の迫害にたえずして、漸く悲田派に轉ずる者多きを加ふ。茲に於て日講上人は「小兒問答」「破鳥鼠論」等を著して大にその變節を詰る。上人の徒は「內信黨」と稱して信仰の節義を固守せり、然るに天和年中、本尊の事に關し黨內、津寺派・日指派の兩派に分れて相爭ひ、貞享二年裁決を上人に乞ひしが。元祿二年日指黨終に分立せり。是れ今の不受不施派にして。又不受不施講門派は卽ち津寺派の末流なり。

內信黨の分裂

幕府悲田派を禁ず

初め幕府は悲田派が不受不施の變態なる事を知らざりしが、身延日脫・池上日玄上人の訴により、元祿四年悲田新義を停止し、其徒武・總兩州の僧俗七十餘人を伊豆七島に放流し、同十一年谷中感應寺日遼・碑文谷法華寺日附上人等を配流し、終に感應寺・法華寺・三田中道寺・千駄谷寂光寺等悉く天台宗に改宗せしめられ、法華寺は圓融寺と改名し、感應寺は卽ち今の天王寺是なり。

天台宗に改宗せしむ

第二十七章　元祿前後の宗門狀況

脫・省・享三師と身延

身延は日蓮・日通上人師資相續て住し、日通上人延寶七年遷化し、京都立本寺一圓院日脫上人、其後職に撰ばるゝや、當時京都紫竹に隱栖中の日蓮上人之に反對せしかば、日脫上人側の訴により、江戸に對決の結果、日蓮上人側の敗訴に歸し、爲に羽後秋田に配せられ、日脫上人三十一世となる、貞享年間支院三十六坊を增築し、諸堂宇を改修し、伽藍一新せり。又悲田派を訴上せし功により元祿

日蓮の反對

日蓮配流せらる

【繪解】日蓮上人茶毗處の塔　弟子日晴天和三年秋田八橋に建てし石塔にして高さ二丈三尺五寸幅三尺五寸の花崗石にて造りしもの

身延賜紫參内の權輿

身延永代紫衣を許され勅願寺となる

六年東山帝より紫衣を賜ひ、伊豫の松山城主松平定長の母堂養仙院夫人、吉良義央、及近衛家の外護により、上洛して天顔を拜す、是れ身延賜紫參内の權輿なり。智寂院日省・遠沾院日亨上人相續で歴世し山色益〻榮ゆ、日亨上人は寶永三年重ねて永代紫衣着用の勅許を得、同七年勅願寺と定められ、上人開創の京都岡崎滿願寺亦勅願寺となる。されば後世脱省亭の三師を以て「身延第二の中興」と稱す。

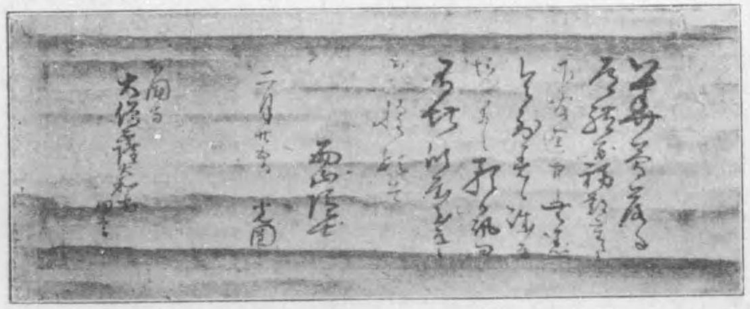
【繪解】京都本圓寺所藏德川光圓の書簡

身延第二の中興

光圓三昧堂檀林を創む

水戸・南谷兩檀林及池上

水戸久昌寺は延寶三年光圓公が其母靖定夫人の追善に擬して建てし所。その京都本圓寺に法華懺法會を修して孝志を竭せしも此當時にあり。又三昧堂檀



別種の校風生ず

【繪解】下總日本寺所藏日耀上人の消息

南谷檀林

池上紫衣の勅許を得

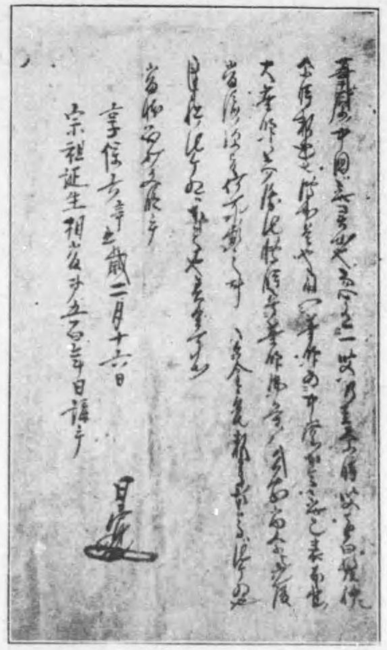
林は天和三年久昌寺内に創設せしに始まり、元祿六年勝光院日耀上人によりて檀規定まれり、歴代の化主は水戸家よりの招待により、飯高・中村・小西等の學匠を迎へ、又廣く各宗各派に開放して來り學ばしめ、達意的研究法を採り、學生に暈酒を許るし、自から別種の校風をなせり。

之と相前後して池上二十二世日玄上人は元祿二年比企ヶ谷照榮院を池上南谷に移し、立善寺南谷檀林と稱せり。其資日潤上人、池上に住せしが、寶永七年冬本門寺佛殿・祖師堂・方丈・客殿・庫裡等悉く燒失せり。二十四世日等上人に至り、將軍吉宗の寄附を得て、再建の業就り、中御門帝より紫衣の勅許を得

て、また池上大に榮へたり。

大石寺對重須の諍

勝劣各派の狀勢　天和・貞享の頃大石寺二十二世日俊上人は再び重須本門寺は御影堂、大石寺は本堂なりとの義を主張せしかば、元禄二年重須日要上人大に怒りて寺社奉行に訴ふ、日俊上人は事實無根の辯疏書を奉行に提出せしが、翌年幕府は大石寺當住日啓・隱居日俊上人及本門寺日要上人を召致し、向後互に誹謗せざる誓狀を入れしめて兩者の和融をなせり。大石寺二十六世日寛上人は「六卷抄」を著し、石山一派の義學、上人によりて大成せらると云ふ。之れと同時に雲州妙蓮寺に嘉典日悅上人、京都要法寺に日舒・

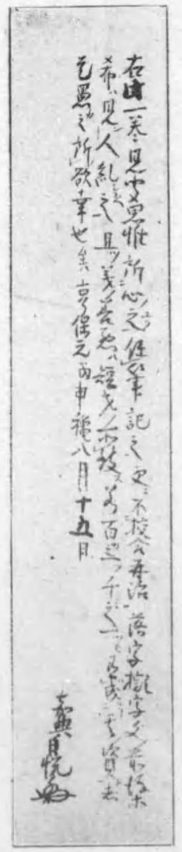


【繪解】堀慈琳師所藏日寛上人寫本の末文

大石寺日寛

嘉典日悅

日眷上人等あり。日悅上人は「本迹破邪決答」五卷を著して一致說を破し、其他「見聞取捨抄」六卷「本門永異抄」三卷等の著あり。日舒上人は「本因妙抄」「百六箇相承」に「對見記」七卷を附し、先住日饒上人と共に造佛論を主張し、日眷上人に至り享保六年門中に法令を發し、從來の一幅一體の勸請式を廢して一塔兩尊式の佛像を造立せしむ、是より佛像造不の論漸く興れり。永禄・寶永の間に隆門には尼崎本興寺圓成院日成上人、大本房日顯上人等あり。日成上人は學德秀で其說は一派學者の權威たり。日顯上人は家宣の夫人天英院の外護ありて本所小梅常泉寺の寺基を定む。當時陣門の江戸丸山本妙寺日宥上人は伊皿子長應寺日領上



【繪解】播州妙立寺所藏日悅上人筆見聞取捨抄の奥書

日眷の法令

佛像造不の論起る

【繪解】名古屋市長榮寺所藏日成上人本尊の自署花押

三澤檀林

人と計り、享保九年神奈川豐顯寺に三澤檀林を設け、越後本成寺日堯上人を開祖とす。大木戸・四谷・下谷・芝・白金・麻布の六法類此時に起れり。

飯高の三學匠

一致派學匠の輩出

延寶・天和の頃には本地院日匠・明靜院日堯上人は同廣日中上人と「飯高の三學匠」と並稱せられ、日堯上人は「法華淨心錄」を著し、日匠上人は鷹峰檀林の化主・本法寺・中山等に歴住し、建仁寺經藏に入り、其著「病導師」は俗衆勸信の良書として世に知らるる。什門寂光寺日孝上人の資觀如院日透上人は興津妙覺寺學妙日體上人と共に「飯高の義龍」と傳へられ、其著「顯本義」「本尊義」「事觀義」等あり。之と同時に「法華安心錄」の作者一音院日曉上人は京都蓮久寺にあり。尾州黑田法蓮寺久成院日相上人は「御書和語式」を撰し。京都妙覺寺妙有院日叡上人は了義院日達・修光院日精上人と共に「中村檀林の三法將」と稱せられ、「折辯無得道論」を出して智恩院岸了の「辯

【繪解】日透上人の自署

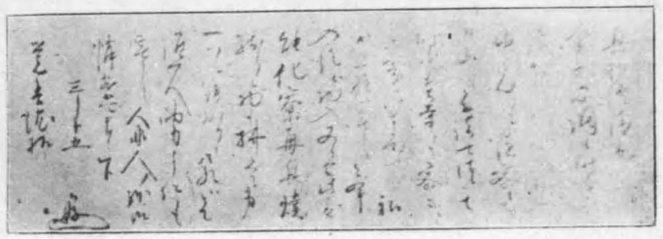
飯高の義龍

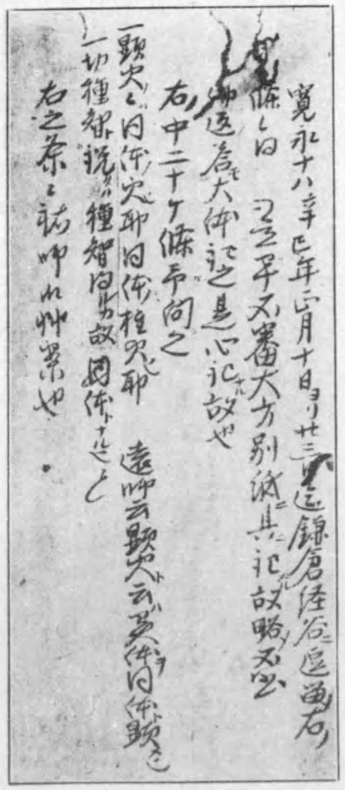
中村の三法將

扶老好師

【繪解】伊豆玉澤妙法華寺所藏日好上人消息三大寶策の一

【繪解】稲田海素師所藏日潮上人筆絶光雜記の末文（下）此書は眞間の日祐上人が其師日遠上人よりの聞書にして日潮上人の轉寫せしものなり





無得道論を破し、又歌道に通じ、頗る辯才あり、京洛の布教爲に大に振へり。少しく遲れて本通院日允上人の資に禪智院日好上人、鷹峰檀林化主に常在院日深上人あり。日好上人の著「錄內扶老」十五卷、「錄外微考」二卷は共に祖書註釋書中の白眉にして、學者の依用する所。日深上人の「峨眉集」二十卷は三大寶策の一なり。元政上人の法孫六牙院日潮上人は仙臺孝勝寺にありて伊達綱村の外護を

得、廣く諸山の寺誌・僧傳・古文書を蒐め、享保十六年「本化別頭佛祖統記」三十八卷の大著をなせり。

別頭統記

第二十八章　宗運の衰兆

享保已後の宗門

享保・元文の頃には日好・日深・日達上人等の學匠あり、日潮・日顯上人等の敏腕なる爲政者ありて尚ほ宗門の榮昌を保持せしと雖も、宗内一般の氣風は漸く惰弱に流れて全く緊張を缺ぎ、外か義敎との筆戰に脆くも遜色を呈露し。日達上人は諸門流と諍ひ、飯高の三谷は身延の寺職を爭奪して内訌絶えず。宗門衰微の兆既に此頃より萠し。是より宗運は漸落の狀態に向へり。

宗風緊張を缺ぐ

享保法難

上總行川妙泉寺檀越に不受不施の信徒あり、享保三年五月妙泉寺は本迹寺と計りて之を地頭筧半四郎に告訴し、信者十四人江戸奉行所に召さる。當時小石川關口の庵室にありし同派の上

妙泉寺の告發

總法頭淸順院日近上人は悅心・體運二師を法命相續者として關西に趣かしめ、地主茂右衞門・家守次郎右衞門等と共に召喚せられ。更に家守次郎右衞門の密告により、其關係者悉く幕府に捕はれ、翌年十月に至る迄、入牢毒殺せられし者日近・日融・日耀・日淨上人等僧俗二十八人。日信・友善・玄久・悅心・體運は流罪、地主茂右衞門等は入牢、其他追放、浪人となりし者八人なり、是を「享保法難」といふ。

幕府二十八人を毒殺す

三鳥派及七里法華の動搖

是よりさき大石寺日精上人の門下に三鳥院なる人駿河吉原に一派を唱ふ、世稱して三鳥派といふ、寶永三年其派の僧俗、多く幕府に捕はれて嚴科に處せられしが、享保三年再び同派の僧祖惠及之に歸依せし幕吏等ありしが、皆な刑せらる。元文二年上總長國村什門の信者行信なる者不受不施を唱導し、其勢漸く盛んとなり、七里法華の信者爲に動搖せしかば、什門の寺院之を幕府に訴ふ、よりて同四年其徒に令し、起請文を强要徵集して、之を鎭

行信不受不施を唱ふ

壓せり。

本宗側遜色あり

淨土教との諍論　淨土宗・眞宗との論戰再び興る、貞享元年一音院日曉上人「邪正問答」を著して淨土宗を破するや、淨土の松譽・乘譽、眞宗の義教等之に應戰せり。

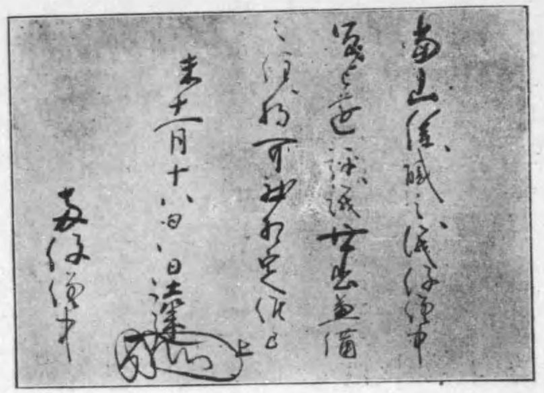
他宗との論戰

然るに本宗の旗幟反つて遜色あり。後期に入りて一妙院日導上人等五人盟約の事ありしも、蓋し之に憤慨せしに因る。中村の學匠了義院日達上人、鷹峰檀林に能化たりし當時、洛北紫竹淨土宗光念寺了海、會、本宗を難ぜしかば、重ねて淨土教との論端を開けり。其著「顯揚正理論」の中、語偶、華嚴の事に及びしかば、又華嚴寺鳳潭との論戰を生じたり。

了義院日達

上人は福島の人、もと興門要法寺派の圓融院日通上人の資、字は運智、水戸三昧堂に學び、化主日耀上人の門下となる、學識群に秀で、天台安樂律の祖靈空・華嚴の鳳潭と共に當代教界の三傑と推稱せらる。享保五年京都本圀寺衆徒の請により、中村化主より入山す。同十三年本圀

教界三傑の一人



【繪解】京都本圀寺所藏日達上人筆、可被遂之狀

他門流との諍

寺の山規を革新し、向後の主職は山內役僧の人才を拔擢互撰する事となし、鷹峰に止足軒を築きて隱退す。

日達上人對諸門流の諍　同十四年「高祖御讓狀註釋」を著して本圀寺付法正嫡の義を宣揚し、稍や他門流を蔑如するの筆勢あり、且つ六老日持上人・日像上人に評言を加へしかば、駿州貞松蓮永寺一心院日圭上人、仙臺孝勝寺日潮上人等大に憤り、身延日裕上人に訴えて「註釋」を破責し、各自門祖の冤を雪がん事を計りしが、日裕上人の慰諭によりて事なきを得たり。

されど立本寺廣性院日應上人は「諫迷治蟲錄」を、妙顯寺觀具院日諦上人は「規矩準繩錄」を著し、陣門の本有院日相上人は「御讓狀注釋辯僞」を

本迹雪謗の公刊

作り、共に日達上人に當る。よりて日達上人「獅子吼章」を以て三師の反駁に答へ。尋で寛保三年「本迹雪謗五卷」を公刊して他難を會通せり。然るに越後本成寺を以て本閑寺の末寺なりと書せしかば、陣門の諸師大に怒り、勝劣諸山亦之に共鳴し、寛文九年本成寺日俊上人が本閑寺日運上人と兩寺の本末を諍ひしに際し、共に本寺にして其間本末關係なき旨の公儀裁決を無視せし事、「雪謗」の公刊は寛文の盟約に違反せる事等を以て延享三年訴訟を提起す。幕府乃ち「雪謗」全部の原版を燒却せしめ、既刊の分は之を問はざる判決によりて事落着せり。然れども此公訴絶版により、反て「雪謗」の聲價を世に高めたりといふ。

雪謗の原版を燒却せしめらる

日潮日皎兩黨身延の寺職を爭ふ

飯高三谷の身延寺職諍　從來身延は飯高檀林の中臺松和田出身者中、交互に晋山し、城下谷出身は池上・眞間等を出世寺となせしが、享保十九年一月身延日竟上人遷化するや、日潮上人中臺谷出身として後職に擬せらる、時に松和田谷出身の能登瀧谷妙成寺惠光院日皎上人亦身延に主たらんと欲して日潮上人の入山に反對せり。當時池上に守玄院日顗上人あり、日潮・日皎兩師を仲裁して日皎上人を辭せしめ、其報酬條件として向後身延持職は三谷交代たるべき事を日潮上人に承認せしめ、元文元年日潮上人身延に住せり。然るに延享元年に至り、日潮上人突如職を退きて其資日寛上人に讓る。茲に於て日顗上人及城下谷出身者は日潮上人の違約を憤り、遂に公訴に及ぶ、身延方谷中瑞輪寺日永上人其衝に當り「城下谷出身、身延晋山の先例なし」との判決によりて池上方の敗訴に歸し、日寛上人住するに至れり。

池上日顗の仲裁三谷交代

池上方敗訴す

第五期　德川氏時代　後期

第二十九章　日導・日康上人等の革新運動

宗學衰頽の原因

檀林教育の方針は宗學に入るの階梯として、

先修台學の弊

まづ天台學を修得せしめ、然る後、正科たる宗學を攻究せしむるにありき。されば學課の配置も亦下四部より玄・文兩部に至る全學級の殆んど大部分に台學を課し、宗學は最上級たる止觀部に至り始めて之を研究せしめたり。然るに學徒の文句部已上に進級するもの甚だ尠きと、宗學を學生の獨學兼修科として教師之を授業せざりしとにより、正科たる祖書の攻究漸く廢れて台學偏重の傾向を生じたり。されば嘗て日奥・日經・日講上人等の出ずるありて、數、宗學の復興を叫び、又その不受不施論の如きも、一面宗門氣魄の表現たりしなり。

宗學衰頽の原因

宗學復興の叫

盟約の動機

日導上人等五人の盟約　されど其天台學なるものも亦漸く衰え、了義院日達上人遷化の後は強もすれば他宗の侮を防ぎ難きものあり、就中眞宗義教との論戰に其遜色を顯はせり。茲に於て中村檀林の學僧日芳・日導・日義・日到・日龍の五師大に之に憤慨し、寛延二年八月、下總並木光明寺に會し、自宗他派の宗義を研究して宗學の復興を計り、以て吾祖の妙化を顯揚せん事を目的とし、五人の間には祕密を存せざる事、他人に內約を漏らさざる事、未來生々世々を期し、若し殘存者一人たりとも此願を破棄すべからざる事等を誓約せり。

盟約の目的と條項

【繪解】大阪妙德寺所藏五人盟約書の末文

日導盟約を遂行す

日導上人の宗學復興　然るに日芳・日到・日龍の三師は不幸にして遷化し、「蒭蕘集」七卷の著者日義上人亦寂し、宗義宣揚、祖道復興の大任は獨り日導上人に遺されたり。されば上人常に學僧俗衆の爲に妙題・祖書を講じて專ら妙宗の宣傳に努め、又天明五年宗義の精要を筆して「祖書綱要」(二十三卷)と名く、「草山集」「峨眉集」と共に本宗の三大寶策と稱せらる、上人の遺命により愛弟日述・日亮上人及日義

三大寶策の一

上人の遺弟日運上人等相計り、日運上人の同學越後角田妙光寺日壽上人に遺著「綱要」の刪修を請ひ、享和元年「綱要刪略七卷」を出版せり。近代の學匠日輝上人は「寶策中の最寶策」と激賞す。

【繪解】熊本本妙寺所藏日導上人像

綱要刪略

日康上人の宗風革新　日導上人等と同時に大和郡山妙善寺に守要日康上人あり、堅く宗義を守りて折伏の逆化を布き、爲に其本山本圀寺の訴により、明和五年五月本圀寺學頭瑞雲院日應上人と江戸に對決の結果、獄に投ぜられしが、後宥免せられて京都に歸るや、宗内の腐敗を慨きて盛んに本山無間の折伏をなせりと云ふ。其著に「修行要路抄」あり。斯の如く宗制革新の運動は宗學の復興と相待ちて是より漸く盛んとなり、又隨て宗内台當兩學者の間に數〻係爭を惹起せり。

本山無間を叫ぶ

第三十章　宗門の人才　淨土教との論戰

勝劣各派　前期の終に當り什門には京都寂光寺本昌院日達上人あり、小栗栖の出身にして、其著「諷誦文の抄」は一派義學の中心たる什師諷誦文に注釋を加へて宗義を敷演宣揚せし最初のものなり、其他「當家本勝篇」台家本勝篇」等を著す。之と東西併び稱せられし品川本光寺合掌阿闍梨日受上人は宮谷檀林の出身にして關東方の

當台兩學者の諍

寂光寺日達

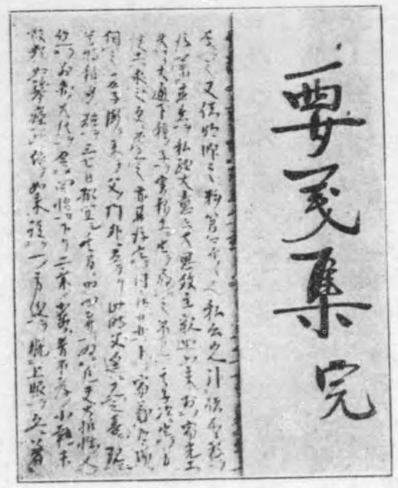
【繪解】京都寂光寺所藏日達上人自筆諷誦文抄の卷首

本光寺日受

學風を代表せし碩德なり、「本迹自鏡篇」「佛界綠起章」「我此土安穩記」等の著あり。

本義院日勇上人も宮谷より出でて妙滿寺百九代たり、其著「二教合璧論」は儒者新井君美の「鬼神論」を駁し儒佛合一を論道せるものなり。

興門には大石寺日因上人ありて「宗旨建立三四會合抄」三卷を著し、要法寺日全上人は先住日眷上人に反對して寶曆年中佛像を寶藏に退け、一幅一體の本尊に改奠し、不造像の義を主張せり。隆門には尼ヶ崎本興寺日憲上人、學識共に秀で、其著體內本迹



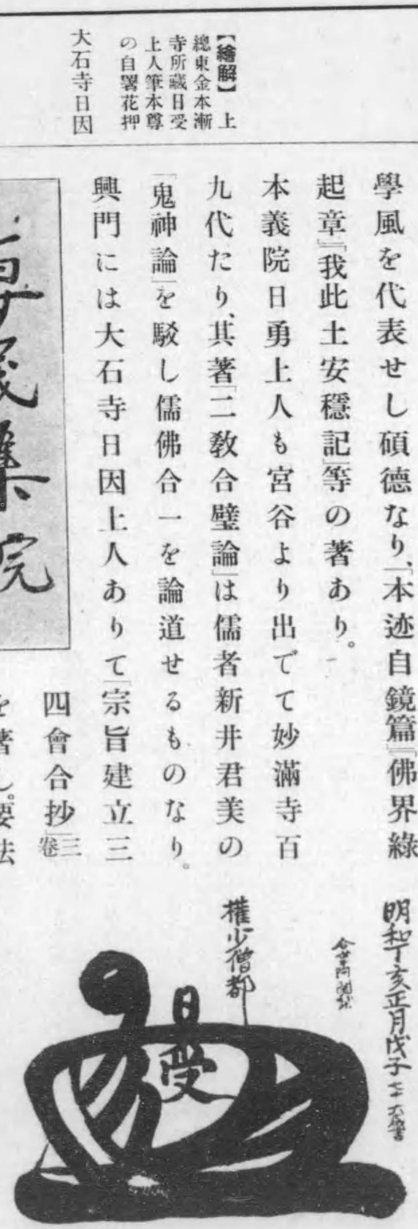
【繪解】上總東金本漸寺所藏日受上人筆木尊の自署花押

大石寺日因

日全の不造像斷行

【繪解】信隆日秀師所藏日憲上人自筆の著書

本興寺日憲



報智院日心

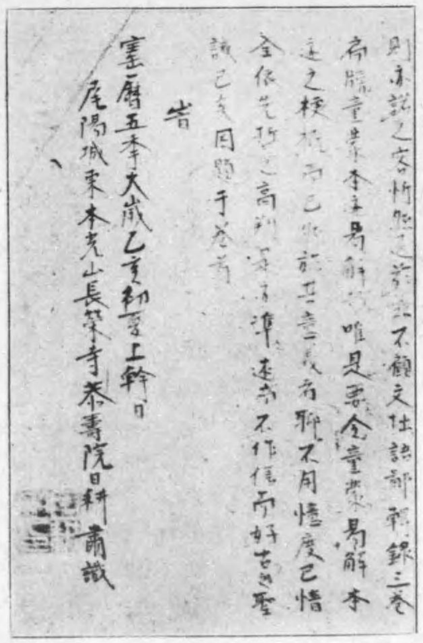
【繪解】名古屋長榮寺所藏日心上人が日耕上人に贈りし書簡の一節

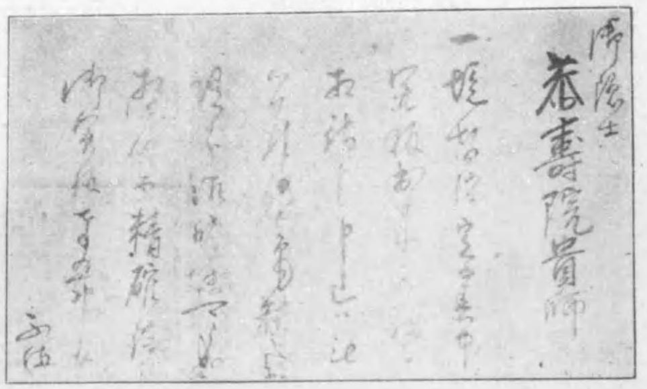
恭壽院日耕

【繪解】長榮寺所藏日耕上人自筆の著書

勝劣義」「正助合行盲狀記」「名字口唱決」等あり。

布教家として報智院日心上人あり、東西傳道の間「壽量品講說錄」三卷「宗祖御傳記演說抄」十卷等を遺せり。日憲上人と時を同ふして恭壽院日耕上人あり、明和三年「本迹境智論」三卷を著し、更に「本迹精確論」五卷を作りて日達上人の「本迹





雪謗」を破せり。

日鶴日稽の布教

一致諸門流　了義院日達上人の門下に智朗日賢・智觀日顯上人等の學者あり、又「勸信黃葉譚」の作者凌雲院日鶴上人、要敬日幹上人の同學妙幢院日稽上人等の布教家ありて宣教に努め、化益大に揚れり。

日諦日者の靈跡調査

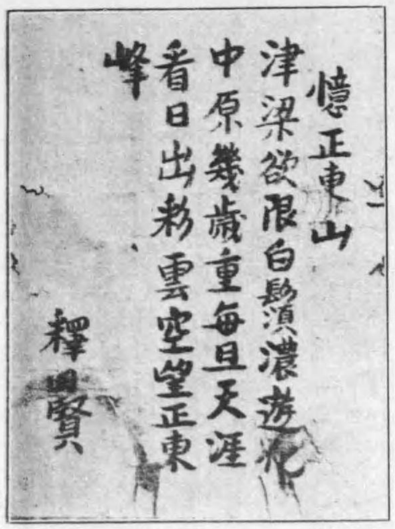
「境妙庵目錄」の著者玉澤の日通上人は持色ある史論家にして「祖書問答證議論」十卷、「玉澤手鑑」等を著し。身延日奠上人の法孫下總北場淨妙寺妙解院日透上人は明和六年「護法得宜論」三卷を撰して攝折並用を論道するあり。京都本法寺日貞上人の門下建立日諦上人は、將に來らんとせし聖祖五百遠忌の記念事業として、其學友玄得日者上人と共に聖祖の靈跡を巡拜して、安永八年「高祖年譜」「年譜攷異」三卷を撰し。其著「祖書目次」と共に出版せり。

淨土教との筆戰　寛延二年淨土宗玄翁大淑「邪啄猥鑠錄」を作て本宗を難し。又眞宗西派越中圓滿寺義教は「千五百條彈憚改」を出して、

我宗の形勢恢復せり

日芳上人の「訶責謗法抄」を反駁せしかば、大阪藥王寺南嶽・京都本瑞寺忍辱鎧日榮・什門の本義院日勇・智觀日顯・身延日裕上人の資、要敬日幹・越中高岡大法寺辨成院日曉上人等ありて之に應戰し再び我宗優勝の形勢となれり。

【繪解】稻田海秦師所藏日賢上人自筆の詩



義教との筆戰漸く終を告んとせし寶曆十三年眞宗山城八幡正法寺大我と論端を開き、池上正善庵日長・攝津尼ヶ崎長遠寺日選上人等之に對應しつゝありしが、明和七年江戸增上寺定月「獅子弦」を出し日賢上人等之を逆擊して終に沈默せしめたり。

てまた本宗に當り。中村の學生塵外院日生・不測院日琮・鷹峰能化智朗

第三十一章　革新機運の高潮

宗門の狀態

身延日唱上人　宗學の衰頽は信仰の墮落となり、曳いて本尊奠定の雜亂を來せし事、當時本宗各派の通弊なりき。されば身延四十六世守愼日唱上人の刷新運動も亦これに由來せり。上人宗學に精通し、道念堅固にして宗義の正純を守れり。安永三年久遠寺に住するや身延の雜亂勸請を慨して私かに革新の志を懷き、まづ近侍の門下に法門得意の爲に數、七面邪神の說を示し、又曼荼羅に「歴代如法弘經先德」の文字を用ひ、身延歴代中、特に日叡・日朝上人を撰書し、其下座に七面神を失へる當時にありては、斯の如き上人の言行に對し反つて怪疑を生ぜり。會、安永五年會式の前夜、七面山の社殿燒失し、死者數十人を出せり。上人以て邪神、正法の威に恐れ、宮居を燒きて去るものとなし、

身延の革新を志す

七面社燒失す

之を西谷檀林の化主日遵上人に語る。然るに七面神は當時檀林の鎭守として學徒の崇敬淺からざりしかば、化主日遵・五老博瑞日靜上人等全檀林の學徒、同六年四月日唱上人不受不施異流の訴をなし、江戸に對決して日唱上人敗訴し、牢中毒殺せられ、次で身延歴代を除かる。日遵・日靜上人亦謫せられしが、のち許さるると云ふ。

檀林學徒との諍

除歴せらる

不受論者の諫曉と法難　不受論者は幕府翼賛者と相對峙し、社會の裏面に潛行して常に絶えず。幕府諫曉も亦此一派より數、之を行ひしかば、幕府の處刑甚だ慘酷を極めたり。寛延五年飯高檀林の化主不染院日雄上人は日奥上人に私淑し「不受大綱決」「正法傳弘決」等を著し「立正護國論」を寺社奉行所に呈して諫曉せしかば八丈島に流され、越て寛政二年十二月嘗て不受を唱えし上總鷲山寺は受不施側を脱して隆門に轉派せり。京都無宿僧本妙院日珠上人は其資日得上人と共に「法華眞正行」を老中松平定信に捧げて不受不施立行を主張し、爲

不受論者の諫曉

鷲山寺轉派す

日珠日得の遭難

多古の不受不施法難

に三宅島に配流せられ、次で「天下安全抄」三卷を著して幕府を諫曉せんと欲せしが、其意を果さずして配所に遷化すと云ふ。之と相前後して下總多古に本正院日誓上人ありて不受不施漸く盛んなりしが、寛政六年幕府に捕はれ日誓上人は三宅島に流され、日雅上人等七人牢獄に毒殺せらる。少しく遲れて備中惣爪に日巡・日道上人等また不受を唱へ、享和二年其徒七人江戸に捕はれ、日巡上人は八丈島に謫せられ、日道上人已下六人皆毒殺に遇へり。

惣爪の法難

益原の内信黨

かく幕府は地方藩主と協力して其逮捕を怠らざりしが文政二年に至り、備前益原の内信黨大樹庵主日學上人を捕縛す、然るに信者等反つて捕吏を縛して上人を北がさしむ。郡奉行乃ち益原全村の戸主を捕へて岡山の獄に投ず、上人之を聞き藩に自首して其罪を贖ひ、村民は赦されて歸り、上人終に牢屋に化す。益原内信の名是より國内に喧傳せらると云ふ。

法難の遠因

寛政法難　京都要法寺は日全上人已來日慈・日良・日住・日立上人相續で一幅一體を勸請して盛んに十五山の雜亂勸請を評破せり。然るに日良上人の資小栗栖檀林の板頭賢承は日住上人に反對して一塔兩尊造像說を主張し、其法弟寶洲は故ありて日住上人に破門せられて一致派に轉じ。又本隆寺日東上人嘗て小栗栖在學中、日住上人に侮辱を加へられて啣む所ありしが。寛政七年秋、妙覺寺日琮・本隆寺日東・本滿寺日進・妙顯寺日遂・本圓寺日脫・本法寺日道上人等十五山は要法寺本尊の改奠は寛文の盟約に違反するものとして江戸奉行所に訴ふ。よりて幕府、日住・日立上人を召して一塔兩尊を勸請すべき事を命じ且つ日誠上人を拘禁せり。十五山之についで其實行を要法寺に促がせしも應ぜず、幕府終に檢使を要法寺及全國の末寺に派遣して、本尊の改奠を强行せしむ。茲に於て要法寺一門信仰の動搖を來たし、離末・離檀する者あるに至りしかば、翌八年日住上人、十ヶ條の尋問書を十

寶洲の轉派

要法寺對十五山の諍

幕府改奠を强行す

五山に發して自義を主張し、日琮・日東上人其答釋書を作りて之に報じ、日琮上人重て「金鏡篇」を著して要法寺の法式を反駁せり。同九年三月日誠上人は江戸の牢獄に毒殺せられ、双方の紛擾絶えざりしかば三浦正子之を仲裁して和談となりしも、翌十年日住上人「翻邪興正論三卷」を本山會合の席上に提出し、造像制止の義を主張して十五山を詰責せしより、再び物議を起し。翌十一年重て日住上人等江戸に召喚せられ、日琮・日東上人等と對論數月に亘れり、八月十五山は、日住上人等の願下げをなすに至りて、その結末を告げたり。日住上人の著「百圍論三卷」「本尊決疑論二卷」は其説を知るに好箇の資料たり。稱して「寛政

三浦正子の仲裁

【繪解】京都本隆寺所藏日東上人江戸下り日記の一節

日琮日東は日住と江戸に對論す

法難」と云ふ。

茲に於て十一月十六山は佛像造立、一部讀誦は舊規に任せて同心すべき事、法式法衣は從來の如く諸門流同樣たるべき事等を評決せり。

法難後の規約

【繪解】名古屋在萱津本郷日明庵所藏、日明上人自筆の御書

【繪解】日明庵所藏日甍上人が日明上人に送りし考正義の末文

深見要言

妙法寺日明

祖書の編輯

宗學復興の叫、四方に起ると俱に祖書編輯の業亦從て興れり、文化五年には「高祖累歲錄五卷」の著者盤城九面村の人、深見要言「百部摺本」を校訂して再版し。又尾州萱津

妙法寺日明上人は寛政十年信士伊藤七兵衛の外護により庵室を結んで之に退き、廣く異本を集め、爾來十七年間世緣を絶ちて校正に沒頭し、老僧已下の遺墨及宗内關係の公文書等を加へて五十卷となし、文化十一年其稿を脱せり。此校正に有力なる援助を與へしは和歌山感應寺日麗上人なり。其著「祖書考正義」は此間の消息を傳ふ。「龍華年譜」「同備考」「祖書編輯考」は上人史眼の高邁なる事を顯はせり。

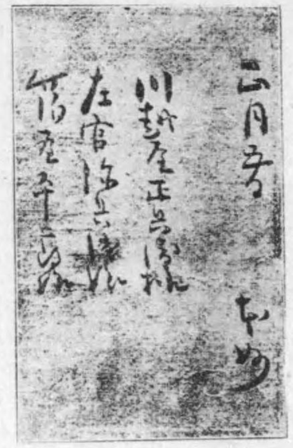
日麗の後援

第三十二章　文政天保年間の宗門

了慶大靈との論評

眞宗との論戰　遠州横砂妙龍寺徒弟にして西谷檀林の學徒たりし隆稟、文政五年横砂の眞宗林正寺了慶と法論をなし、次で「問答抄」を作て了慶を破せしかば同地長圓寺大靈、了慶に代つて「問答抄裂邪綱」を著して酬ゆ。茲に當時の學匠駿河貞松蓮永寺日富上人・飯高の學徒日通上人、甲州波木井醒悟園の日臨上人等難書を出して大靈の說を辯駁り。

本妙律師　本妙日臨上人性謹厚にして道念頗る堅く、常に泣いて經卷を拜せりといふ。文化十一年身延に詣で、雨畑の深山に苦修練行して、心身を修養し。又元政上人の高風を憧憬し、深草に至りて上人の遺書を探究し、同十五年攝州能勢金井山中に入り。本迹一致の儀相により、妙法五字の戒體を自誓受戒せり、上人の本化律卽ち是なり。法兄最誠其他堯山日輝・孝順日昇・行全日道上人



【繪解】日臨上人の筆蹟

【繪解】波木井の醒悟園

日臨の本化律

身延僧衆日臨を誤解す

等其德に懷きて門に集る。文政三年門下と共に再び身延に詣りしが、僧衆は律師を以て異流の人となし私に排斥を企つ。會〻隆禀、大靈の法戰に際し隆禀に代つて「佛海微濫」を撰せしにより、寺僧等の諒解を得、又上人に德化せられし波木井村の孫七・茂兵衞等の外護により、同村大古山に醒悟園を結び、唱題修懺し、近鄕の老若を集めて教導倦まざりしといふ。文政六年水戸に遷化す歳僅かに三十一、其著「三大祕法辨」「教觀撮要」等は宗旨の幽微を發揮せり。

醒悟園の布教

現身の成不を諍ふ

台當兩學者の諍論

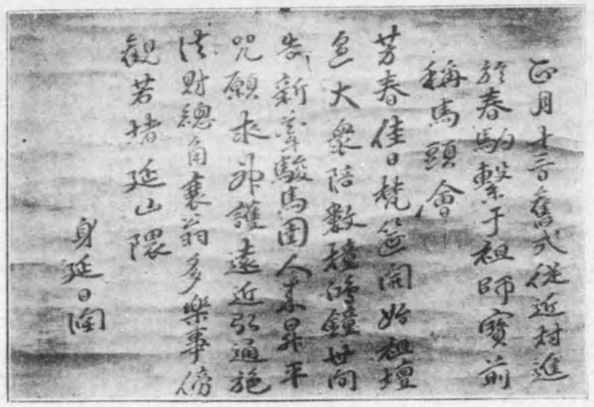
日導上人の法孫本用院日就上人盛んに折伏の化導をなし、本宗の義學を光揚す。文政六年名古屋に布教し、現身成佛の義を宣傳せり。時に日比津定德寺隱居一雨院日潤上人、末法下種益の教判に據りて法席に卽身の成道を否定せしかば遂に兩師の諍となり、日潤上人は名古屋實相寺日曄上人と謀り、日就上人を追放せんとせしも、日就上人の師大法寺日俊上人、其追放評決の不當なる

日就を異流なりと訴ふ

日壽の仲裁

【繪解】甲州身延山所藏日潤上人の筆蹟（國柱會の原版による）

日潤本山の裁判に服せず



に伏せず。よりて日潤上人等は更に尾州寺社奉行所に日就新義異流の訴をなせしが、日就上人答辯書を役寺に提出して異流に非る旨を辯明せり。其間妙勝寺日壽上人仲裁せんとせしも日就上人肯かず。玆に於て奉行所は兩師に說法差止を命ぜり。然るに日潤上人等更に江戸に訴へんとせしが、役寺の故障によりて果さず。事本山本圓寺に漏れ、翌七年本圓寺日運上人兩者を召して卽身の成不は力說點の異に外ならずと判決せしが日潤上人服せず、翌八年四月兩師共に押込を命ぜられ、漸く落着せり。

神儒兩道と本宗

元文・寛延の間に儒者富永仲基ありて「出定後

仲基の大乘非佛說

語」を著して大乘非佛說論を主張し、之に次て服部天游出て「赤裸々」を出して亦佛教を排擊す。國學者には仲基と同時に本居宣長あり、平田篤胤相續で「出定笑語」を作りて日蓮宗・眞宗を以て神敵二宗と稱し、蒲生君平・藤田東湖等亦篤胤の說を助けて佛教の攻擊增盛んなりしか

篤胤の神敵二宗論

日長日宣等の會通

ば、寛政四年正善庵日長上人は「三道中心錄」を著して三道の中心は釋尊聖化の本迹に達するにありとし。文政五年伏見本教寺英智院日宣上人、神道諸流を研究し「三道合法圖解」「神代評撰記」等を出し、神儒二道は本有覺體の垂迹化現となし、各〻其立脚を世に公表せり。

祖廟諸堂部燒失す

本院部廿八棟烏有に歸す

身延文政の災厄と山勢　身延は日脫上人已來甚だ盛んなりしが、日逞上人の文政四年八月西谷聖祖御廟の回祿に次て、同七年八月久遠寺諸堂部悉く燒失せしかば、日晴・日舜・日環上人等を經て、祖師堂の再建漸く落成せんとせし同十一年六月水害に遭遇し、翌年九月重て本院部二十八棟皆な烏有に歸し、五重大塔亦類燒せり。此等の諸宇は日朝上人已來の古建築物にして結構莊麗を極めたりと云ふ。茲に於て日潤・日心・日薪上人等を經て再建の業漸く成れり。是より身延は頻發せし數度の災厄により山勢稍や衰へたり。

江戸の八品講祖

日理と法義を角す

諸派の英哲　當時玉澤には境修日桓上人あり、下總峰妙興寺には寛智日慧上人あり、何れも學匠論客として世に知られ。又隆門に光長寺日隨上人の資、寂光院日韓上人あり、尼〻崎勸學院の能化となり、兵庫久遠寺を再興す。其教化に與りて入門せりと傳ふる舜龍院日蒼上人は富士一門を改派せしめん事を企て、重須に至りて終に學頭職となる「當家秘要錄」二卷は當時の著なり。然るに其密計漏れて危害を加へられんとし、避けて江戸に來り八品講を弘む、江戸に於ける八品講の初祖と稱せらる。文政六年什門の碩德本光寺一道院日理上人と法義を論じ「三難問書」三卷を送つて答釋を求む、日理上人「再問會答記」を作つて之に答へんとせしが、翌年終に遷化せらる。此他要法寺立正院日賜・

大石寺本壽院日量上人等ありて皆な一派の學哲なり。

池上日萬感應寺を鼠山に建つ

天保年間の宗門　將軍家齋の愛妾中野美代、深く本宗を信ず、池上日萬上人の請により天保五年新に雜司ヶ谷鼠山の地を寄せて感應寺を建立せり。蓋し元祿年間悲田派所斷に際し、碑文谷法華寺等と共に天台宗に改宗せしめられしを再興するの意に出ず。その本堂は幕府之が施主たりしかば規模の雄大、結構の莊美なる事、增上寺・寛永寺を凌駕せしといふ。幕府は受不施側に斯る多大の援護を與ふる他の一面には不受不施の絶滅を計れり。天保九年八月全國に令して上總・下總・河内・和泉・京阪各地の信徒を捕へて獄に下し、牢死せしむる者二十餘人の多きに及び、其他を遠島或は重追放に處す、之を「天保法難」といふ。然るに同十二年家齊薨去すると俱に老中水野忠邦の改革に遭遇し、遂に感應寺再び廢寺を命ぜらるゝに至る。茲に於て本宗の信徒等大に之に激昂す。當時深行なるものあり、四箇格言を赤旗に大書し、大道に布教す。會、水野忠邦を面前に痛罵し、爲に捕へられて牢中に毒殺せらる。

不受不施の絶滅を計る

信徒激昂す

赤旗深行

第三十三章　幕末宗門の概況

幕政と宗門　信教言論の自由を抑壓し來りし幕府は嘉永・安政の頃に至りて諸外國に開港通商を迫られ、內に攘夷の論囂しく、內外漸く多事となり、爲に內治の政綱弛緩せしかば、常に抑制せられし本宗は、日導上人當時より漸次高まりつゝありし宗學復興の氣勢と相待ちて、遽に復活の兆を呈し來り、諸門流の英哲相競ふて各自宗團の刷新、教學の振興、宗義の宣揚に努めたりしかば、各教團共に幕末掉尾の隆盛を見るに至れり。

宗勢復活す

各派の偉僧　本隆寺日壽上人は青藍抄に「私解」を加へ、「正義綱要」を著して一派の義學を宣揚し。隆門尼ヶ崎本興寺日肇上人は三途不成、

本隆寺日壽

本興寺日肇

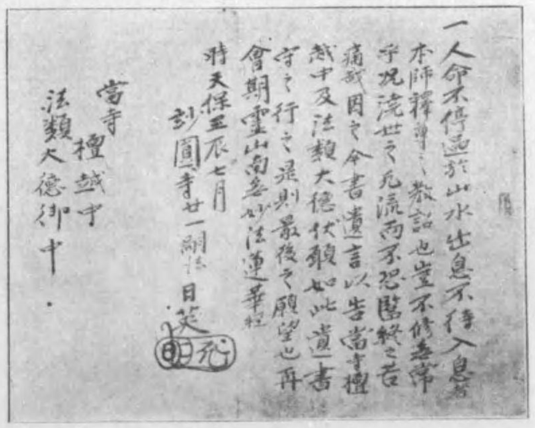
便妙日騰

【繪解】京都本隆寺所藏日壽上人筆寫の活套集末文

【繪解】稲田海素師所藏日英上人遺言狀

人界成佛の說を唱へ、大石寺學頭、便妙日騰上人は尾張の日明上人に倣ふて祖書の蒐輯をなし、安國論新註三卷の著者丹後妙圓寺英園日英上人は、摧邪辯正錄を出して眞宗靈城の說を駁し、又高祖年譜及攷異を改訂出版し、近代の碩學優陀那院日輝上人は加賀の領主前田齊家の外護により、金澤立像寺に充洽園を起して學徒の育英に

優陀那院日輝



充洽園

【繪解】稲田海素師所藏日輝上人の書簡

桓容日智

永昌院日鑑

努めしかば、日薩・日修・日鑑上人等の學匠其門に出で、又水戸檀林を再興し、南谷檀林に教鞭を執る、講暇妙經宗義抄十三、三千論六本尊辯、弘經要義三秘指要抄、圓通記四、祖書略要十、祖書綱要正義二等百餘卷を著し、大に宗要の精微を發揚せり。時に玉澤妙法華寺日桓上人の資桓睿日智上人あり、數、日輝上人を訪ふて其教を請ひ、理體事用、及五大本尊の說に據つて日輝上人と議論を上下せりと云ふ。又什門の永昌院日鑑上人は各地